



TITLE:

第2章 京都大学吉田南構内AN21区 の発掘調査

AUTHOR(S):

富井, 眞; 笹川, 尚紀; 伊藤, 淳史

CITATION:

富井, 眞 ...[et al]. 第2章 京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査. 京都大学構内遺跡調査研究年報 2015, 2013: 5-122

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226470>

RIGHT:

第2章 京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

富井 眞 笹川尚紀 伊藤淳史

1 調査の概要

本調査区は、京都大学吉田南構内の西南部に位置し、白川扇状地の西縁部に立地する（図版1-378）。そして吉田二本松町遺跡に含まれる。この地点に国際交流会館の新設が計画されたため、周辺地点の既往の調査成果を勘案して、建設予定地の発掘調査を2011年5月16日～11月16日に実施した。調査面積は1700㎡である。

近接する地点では、縄文時代に関しては、7・261地点で高野川の側方浸食を受けた段差の西側で早期や後期の土器がまとまって出土しており、西方の248地点では、その浸食を免れた前期頃の流路も確認されている。弥生時代に関しては、220・261地点で前期の水田や中期の方形周溝墓が検出されており、古墳時代については、111・220・322地点で中期の方形墳が検出されている。古代では、奈良時代については220地点で掘立柱建物や井戸が、平安時代について111・220地点で梵鐘鑄造遺構が、それぞれ見つっている。そして中世以降は活動が著しく、91・220・261地点では鎌倉・室町時代の大溝、土器溜や石室や墓や井戸などが多数確認されているほか、西方の134・248地点では、室町時代の土取穴群が広がっている。近世になると、道路や道沿いの野壺・井戸に区切られるように東西方向の杭列群が展開して田畑が広がっていたことがわかっている。また、1991年3月に実施された地中レーダー探査によって、本調査区内の西辺に南北方向の大溝が存在する可能性が指摘されている。

調査の結果、近世の活動痕跡としては、農作業に関わる杭群を確認した。中世については、南北にはしる溝群や埋甕のほか、多数の土器溜や集石が見つかった。古代については、遺物もほとんど出土しなかったが、弥生時代～古墳時代では、埴輪をともなう古墳を含む古墳中期の方形墳2基と、弥生中期後半の方形周溝墓1基を検出した。また、弥生前期末中期初頭の土石流堆積物の下層では、縄文時代晩期中葉の土器1個体分の破片集中部を確認した。出土遺物は、整理箱220箱を数え、そのうちの8割は中世の土師器・陶磁器で、約2割が埴輪である。

本章は、第4節（2）を伊藤、第6節と第8節（4）を笹川、そのほかを富井が執筆し、全体を富井が調整した。

2 層 位

本調査区は、掘削前には標高52.6m前後のテニスコートだったので、層位的に攪乱は少ないと期待された(図1・2)。表土(第1層)の厚さは、東部では30cm程度だが、西部では50cmを超える。表土下には、近世・近代の遺物を包含する灰褐色土(第2層)が全面に広がる。層厚は、東部では20cm前後で、西部で30cmを超える。調査区東部から表土の重機掘削を始めたときに、第2層にも近代の遺物を包含していることを確認したために、その下位の第3層(茶褐色土)上面近くまで重機による機械掘削を進めた。図1の南壁断面では、重機掘削分を第2 a層、人為掘削分を第2 b層としている。

第3層は、調査区中央から東にかけては、40cm前後まで残存しており、およそ2段階に分けて掘削した。中世の遺物包含層で、13～14世紀の遺物を多く含むが、それ以降の遺物は細片でもほとんど見られない。上部と下部では出土遺物の年代に違いは認められないが、土質としては、上部に比べると下部は砂質で色調も暗い。中世の溝S D 2以西となるY = 2085辺りから西では、遺構の埋土以外には実質的に残っておらず、第2層直下で弥生時代の前期末～中期初頭の土石流堆積層の上面が露呈した。

茶褐色土の包含層や遺構埋土には、第5層(黄色砂)との層理面も貫いて、液状化を示すと思われる薄微な皺状の堆積の乱れを確認できることがある(図版4-1)。また、調査区東南部では、下面が下位の層序と同様に波打つ部分をわずかに確認できる(同4-2)。以上は、中世に地層変形をとまなう地震があったことを物語る。

第4層は、包含層としては広がらない黒褐色～暗茶褐色ないし黄灰褐色を呈する砂質土。弥生時代から古代にかけての遺構埋土が相当するが、古代の遺物はほとんど出土しない。第4 a～4 g層は、古墳の周溝埋土で、これらについては第5節(1)で詳述する。第4 h～4 j層は弥生土器を包含する黒褐色～黄灰色の粗砂質土。

第5層は、弥生時代の前期末～中期初頭の土石流堆積物である黄色砂。最下部の粘土ないしシルト(第5 f層)から、細砂(第5 e層)、そして粗砂(第5 c層)へと上方粗粒化している。部分的には、細砂の上位で再びシルト(第5 d層)になっている。残りのよい部分では、上面の標高が52.0mを超えたり、層厚も1 m程度に達したりするが、西側以外では層厚50cm程度の残存である。また、条痕地の甕が第5 e層から(図版4-3)、櫛描文の壺形土器が第5 f層上面で、それぞれ出土している。なお、西辺では最上部がわずかに土壌化してかなり硬化したシルト質ないし砂質の部分もあるが(第5 b・5 a層)、

層 位

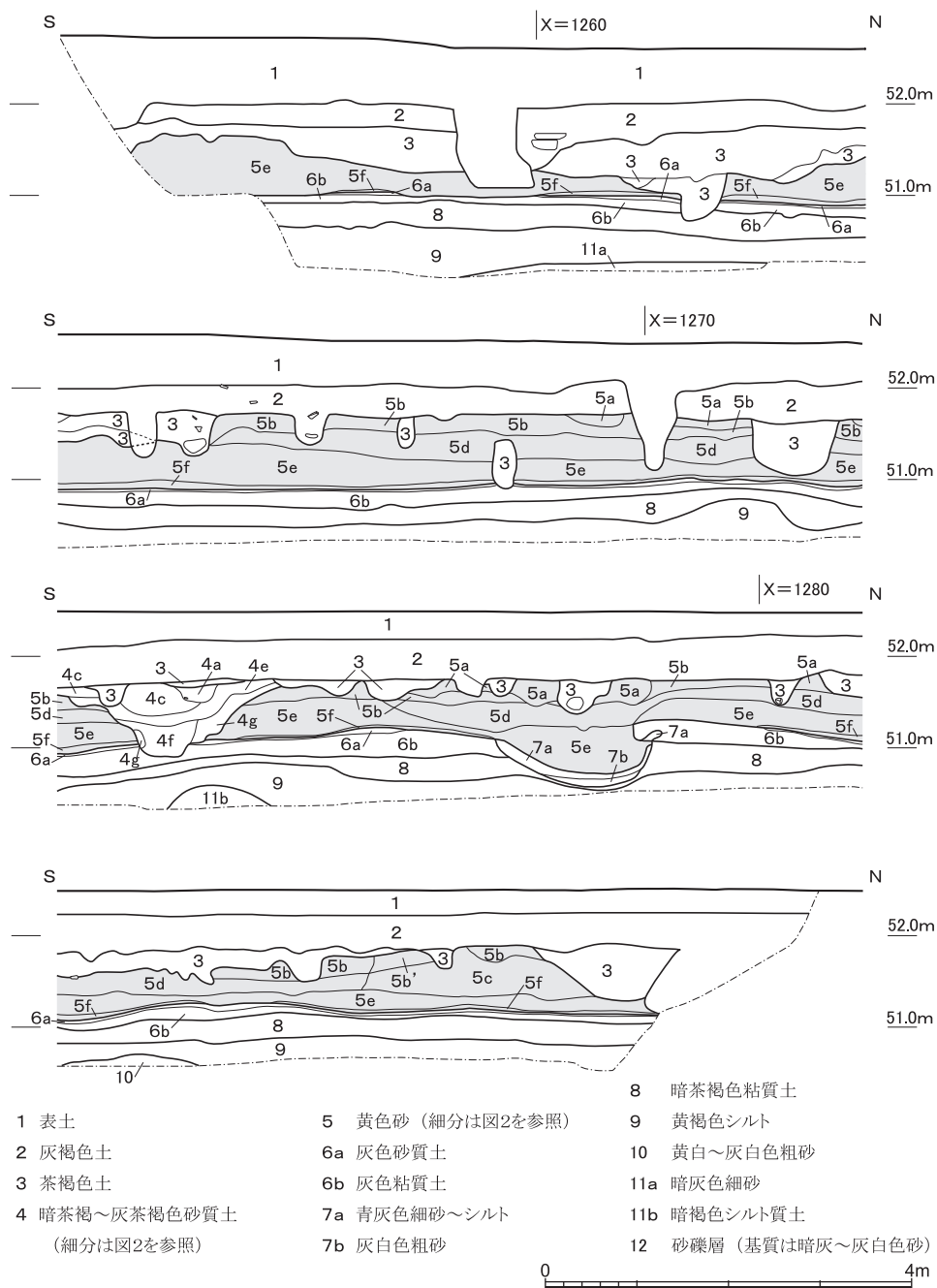


図1 調査区西壁の層位 縮尺1/80

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

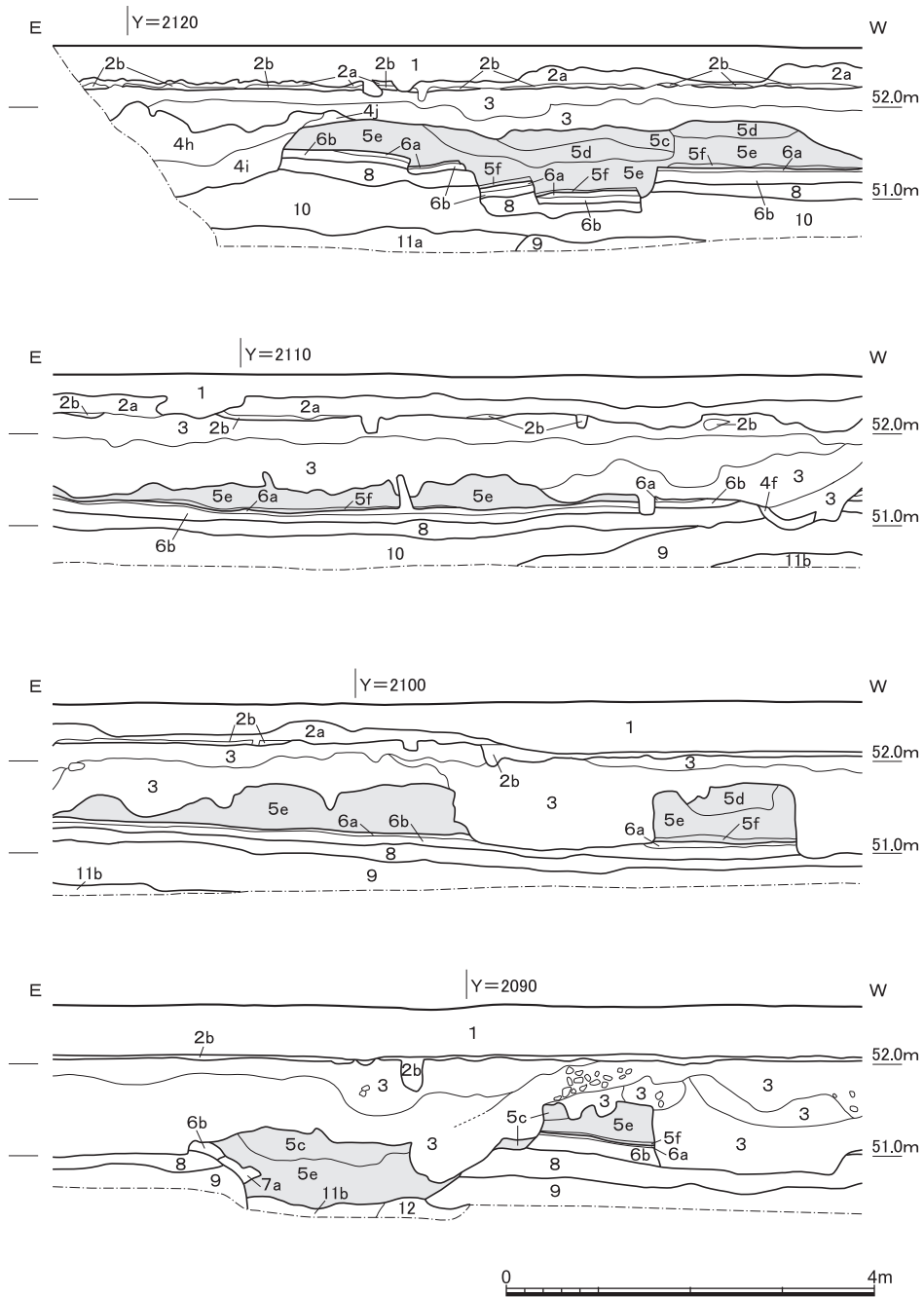


図2 調査区南壁の層位 縮尺1/80

層 位

第4層とは色調と硬さで識別できる。

第5層の下位には、灰色を呈する砂質土（第6 a層）および粘質土（第6 b層）が調査区全面に分布する。第6層の厚さは、上位の砂質土は5 cm前後だが、下位の粘質土は東辺で10cm程度、西辺では30cmにまで達する部分もある。断面では分層できるが、面的調査時には分離が困難で、合わせて第6層として掘削した。篋描き多条沈線文を特徴とする弥生前期末までの、あまり摩滅していない土器片を包含する。調査区中央および西北辺では第5層掘削後に、自然流路が検出され、その底面ないし縁部には、おもに青灰色を呈するシルト～細砂（第7 a層）が堆積しており、摩滅していない弥生前期の土器を包含する。この青灰色シルト～細砂と灰色粘質土の関係は、調査区中央の自然流路（大流路）では、前

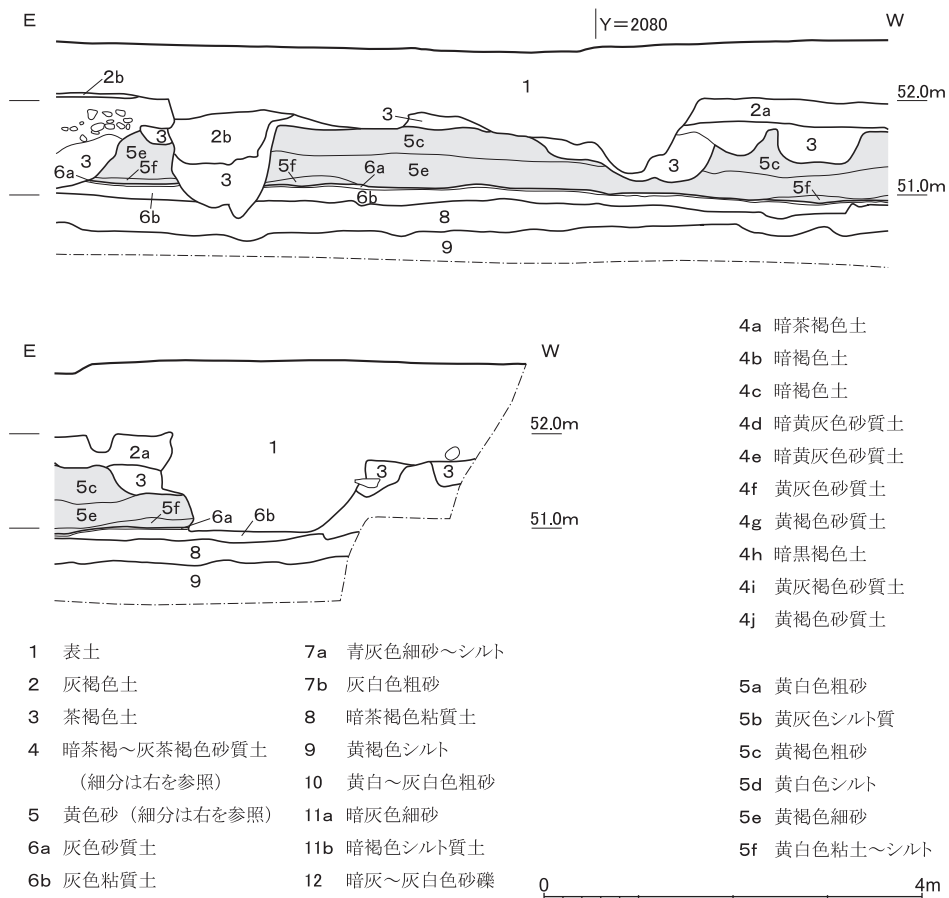


図2 つづき

者が下位に堆積していることを観察できるが、西北辺のS R 2では、両者の境界は不明瞭で後者が下位に堆積しているように見える部分もある。いずれにしても、灰色粘質土の母体は、流路があふれて調査区全面に堆積した細粒物であることがわかる。

第6 b層の直下には、暗茶褐色砂質土（第8層）が層厚20～30cmで調査区全域に広く分布する。人為掘削をおこなえたのはこの層までで、あまり摩滅していない縄文後期中葉の一乗寺K式の破片や晩期後半の滋賀里IV式までの遺物を包含する。暗茶褐色砂質土の下位は、広く黄褐色のシルト～細砂（第9層）が分布する。西側ほど堆積が厚く、西南部では、層厚が1 m近くにまで達する。

第9層の下位には、調査区西辺や東壁際で、黄白色～灰白色の粗砂（第10層）を確認できるが、その粗砂には、暗茶褐色砂質土の上下などで噴砂のように液状化した部分を確認できるところがある（図版4－4・5）。調査区南辺では、灰白色粗砂（第10層）の下位に暗灰色細砂（第11 a層）が堆積し、部分的には土壌化している（第11 b層）。調査区東南部では、この第10・11 a層が黄褐色シルトに陥入するような状況を見せるので、この暗灰色細砂も液状化していると判断できよう。この2つの層については、もとの堆積は、北東の220地点S R 10に対応する可能性が高く、東接する261地点の第12・19層をもたせた縄文後晩期の白川系流路の溢流堆積と思われる〔伊藤1999 a, 千葉・阪口2005〕。

中央南辺では、第9層の下位に、暗灰色から灰白色の粗砂を基質として頁岩を中心に拳大のサイズまでの堆積岩を多く含む砂礫層（第12層）が確認でき、調査区中央で検出した大流路底面以深では、層厚が20cm以上であることがわかった。包含する礫種には堆積岩も多いので、高野川系の堆積物と判断できる。261地点第26層に対応すると思われる。

3 縄文時代の遺跡

(1) 遺 構（図版2・4・5，図3・4）

S X 48 暗茶褐色砂質土（第8層）の掘削中に、調査区東辺で土器破片が比較的まとまって出土した（図3）。残存率が3割程度の同一個体と思われる篠原式の深鉢（I 2）で構成される。直径1 mほどの広がりの中で、立位の破片もあったが、全体を包括するような明瞭な落ち込みは見られなかった。また、大破片の下には、多少黒ずんだ部分があったが、平面的にも立面的にも明確な輪郭をもたなかった（図版5－1）。黄色砂（第5層）より下位の層準では、このS X 48で遺物の原位置取り上げを実施している。

地層変形と噴砂 人為的な遺構ではないが、黄褐色シルト（第9層）の上面では調査

縄文時代の遺跡

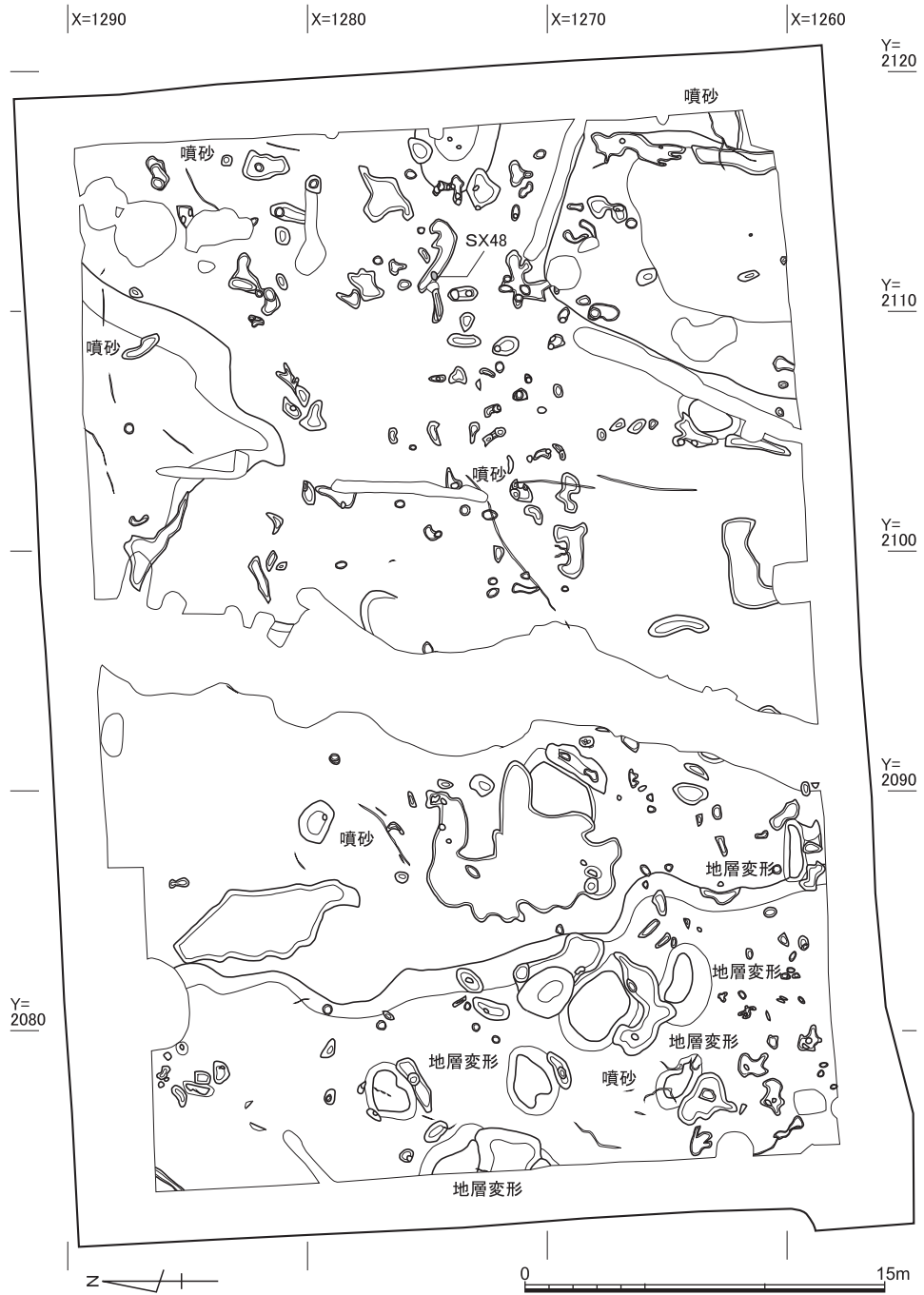


図3 暗茶褐色砂質土掘削後の平面 縮尺1/300

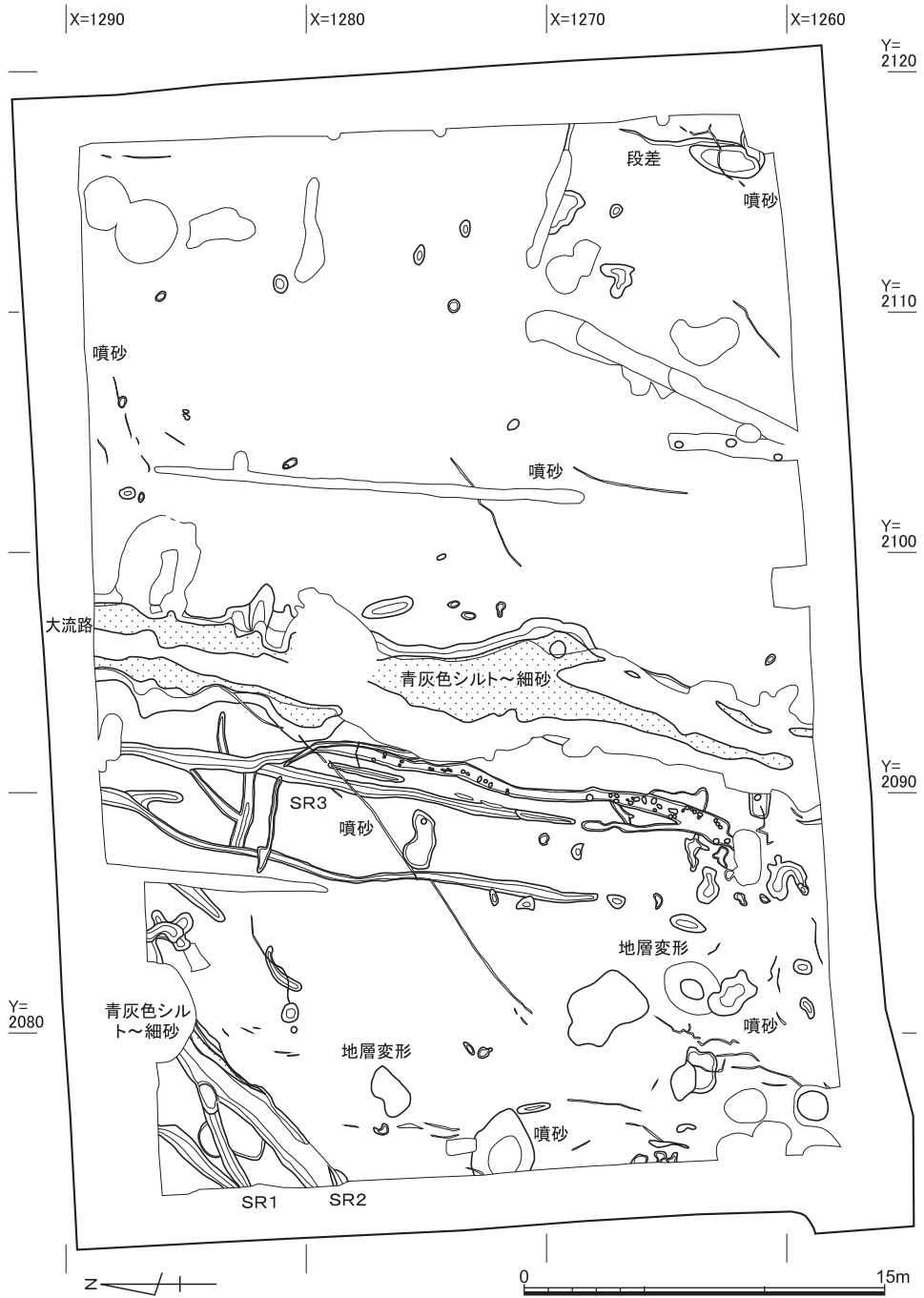


図4 灰色粘質土掘削後の平面 縮尺1/300

区西辺で、直径3m前後までのドーナツ状のくぼみを数カ所検出し、またその周辺には多数の埴砂も検出できた(図版4-4, 図4)。ドーナツ状のくぼみには、西壁で断面を観察できるものがあり、中央の隆起部が下層でも対応する事を確認できたので(図版4-6)、地震による地層変形と判断している。もっとも、埴砂は、第6層(灰色粘質～砂質土)の上面でも下面でも数条を確認できるほか、ドーナツ状のくぼみに対応する第6層上面の緩い傾斜も西壁で確認できる部分があるので、この地震は縄文時代のものではない。

(2) 遺物(図版15, 図5)

縄文土器は50点以上出土したが、多くは細片で、5cm前後の破片でも摩滅したものが多い。時期的には、ケズリが特徴的な晩期の破片が目立つが、それ以外でも、北白川上層式3期と思われる磨消縄文の胴部破片や一乗寺K式と思われる破片が出土している。

I1～I3は、およその法量のわかる土器。I1は、内外面ナデ調整の無文土器で、灰色粘質～砂質土(第6層)から出土した。器形や口縁端部の特徴から、後期のものと思われる。I2は、SX48の晩期中葉の篠原式。口唇を押し引き状にわずかに刻む。I3は、調査区中央北辺の暗茶褐色砂質土(第8層)から出土した、水鳥ないしホラ貝に似た器形と思われる土器で、上半と下半とを継ぎ合わせた成形。外面は丁寧に平滑に調整し、長軸両端に挟り込みによる文様をもつ。長石などの混和材も精良で器表面がざらつく砂質の胎土は西日本後期末の凹線文土器にも類似するが、器形も加味し、東方からの搬入品と推測する。しかし、北陸や東日本にも類例を確認できていない。文様のには後期末から晩期中葉、器形的には後期後半以降と考える。なお、I3aは俯瞰とその断面のみ図化した。

I4は、口縁の1段目が無文で縄文部が浮帯気味になっている磨消縄文意匠の一乗寺K式の口縁部で、暗茶褐色砂質土から出土した。ほとんど摩滅していない。I5は、口唇にも刻みをもつ刻目突帯文土器。滋賀里IV式で、暗茶褐色砂質土から出土した。I6は、少し摩滅した縄文晩期後葉の滋賀里Vの肩部で、灰色の粘質～砂質土から出土した。

4 弥生時代の遺跡

(1) 遺構(図版3～5, 図6～9)

前期末中期初頭の旧地表面 黄色砂に覆われていた灰色の砂質～粘質土(第6a・b層)の上面は、調査区全体で30cm程度の比高差で南西方向に傾斜していると言えるが、基本的には高低差の非常に乏しいかなり平坦な地形である(図版3-1, 図6)。

この旧地表面では、調査区中央に幅3mをはかる南北方向の自然流路を検出した(大流

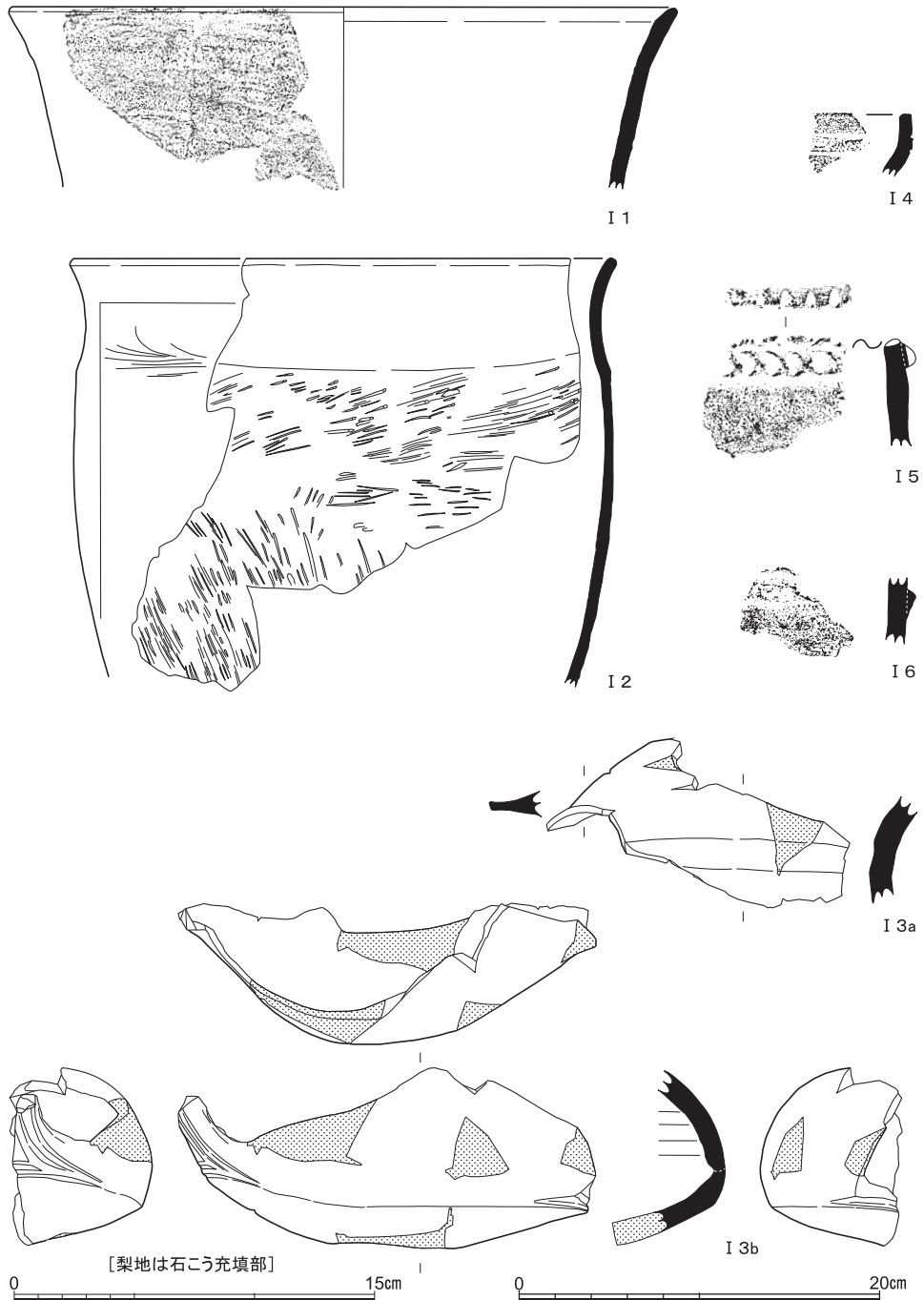


図5 縄文時代の土器（I 1・I 4後期, I 2・I 5・I 6晩期, I 3後晩期） I 4～I 6は縮尺1/3

弥生時代の遺跡

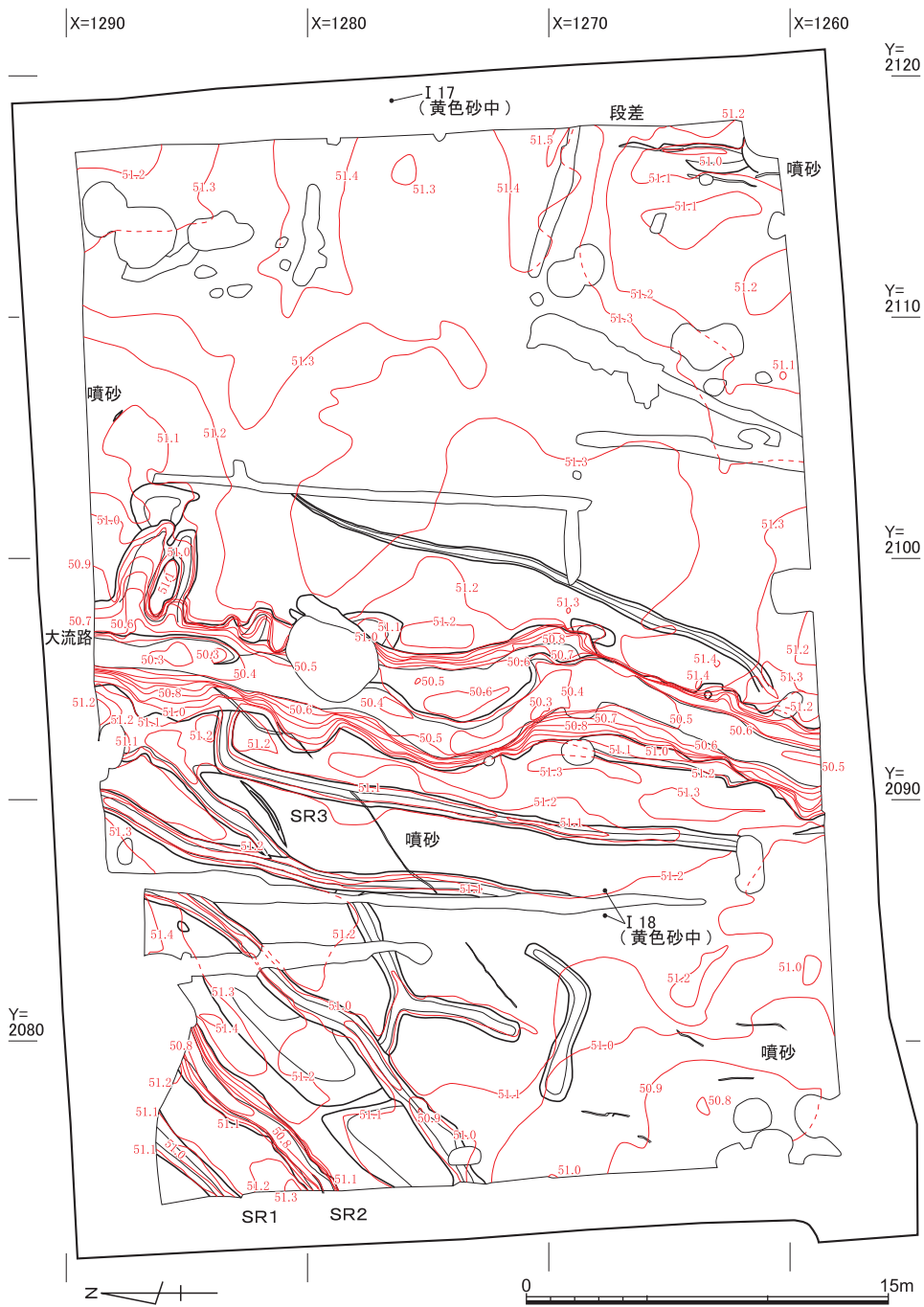


図6 黄色砂除去後の旧地形 縮尺1/300

路)。北接する220地点で調査区中央付近を北北東から南南西の方向で検出された流路(220地点S R 4)の下流部と考えられる。220地点S R 4と同様に、南南西方向に枝状に細く分岐する部分(S R 3など)を有する。埋積の状況は、砂層からそのまま黄色砂へと移行しているので、土石流直前にも流路だったと思われる。縁に堆積した、第6 b層の母体となる粘土の供給に寄与した堆積物と考えられる青灰色の細砂やシルト(第7 a層)と、底面の砂層(第12層上部)からは、弥生前期までの土器が出土する。

また、調査区西北部では、おもに北東から南西方面へはしる3～4条の流路(S R 2ほか)を確認した。これらの流路も、220地点S R 4から南西方向に分岐したものの延長と思われる。埋土は、最下部に灰白色粗砂(第7 b層)も認められるが、主体は黄色砂で、側壁には第7 a層が堆積する。もっとも、S R 2は、第6 b層の上位に第7 a層が堆積する部分もあることから(図1)、大流路よりも出現が後出的な流路だと思われる。ただし、包含遺物は同様で、弥生土器が含まれる。なお、上面が旧地表となっている灰色の砂質土・粘質土や、自然流路の内部の青灰色シルト・粘質土に包含される、細片を含めて総計50点前後の弥生前期の土器では、ほとんど摩滅していないものも多い。

地層変形と噴砂 調査区西辺および東南部で、噴砂を確認した。また、調査区東南辺で検出した、北北東から南南西にかけてはしる50cm近い段差辺りでも、すぐ西側や直下でも液状化を確認しており(図版4-5)、この段差はさらに中世の包含層にも影響を与えていることが南壁断面で確認できるので(図版4-2)、これらは後世の地震による地層変形と判断する。暗茶褐色砂質土(第8層)の上面の地層変形と同一原因かもしれない。

中期の方形周溝墓 土石流堆積物の上位では、調査区西北部で古墳時代の方形墳(8号墳)に切られる一辺約8mの方形周溝墓を検出した(図7)。主体部は残存しない。当初は、8号墳と中世の溝S D 2の間で土坑S K 6と判断した遺構と、その南方で中世の土坑の底面近くで確認した壺の出土地点を別個の遺構と認識して掘削したが、8号墳の調査後に精査して、元の形状の西半を中心に全体の規模をうかがうに十分な周溝を確認した。埋土は、暗黄灰色～暗灰色の粗砂質土(第4 i層)。西側周溝の南端からは把手を備えた台付水差(I 19)が、当初は土坑S K 6と認識していた北側の周溝の中央付近からは近江系と思われる甕(I 20)が、そして南側周溝の中央付近からは伊勢系と思われる壺(I 21)が、それぞれ出土した(図8)。いずれも第IV様式。供献土器と判断する〔深澤1996〕。

I 19は、口縁が溝の長軸におよそ平行して北西方面を向いた横位で、胴上半部の把手側が上面を向いて出土した(図版5-2)。把手本体は口縁のすぐ北西側で出土した。重厚

弥生時代の遺跡

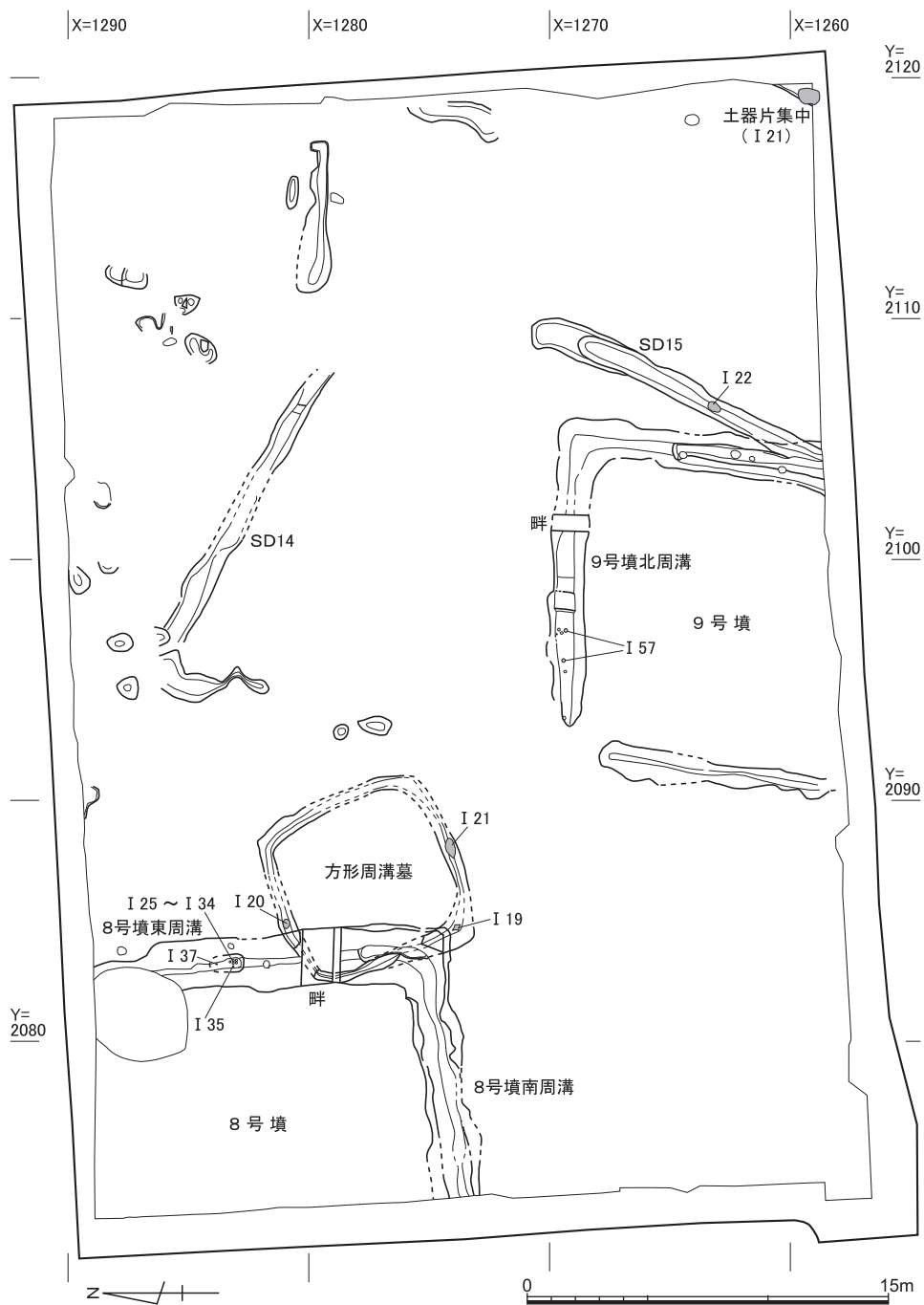


図7 黄色砂上面の弥生～古墳遺構 縮尺1/300

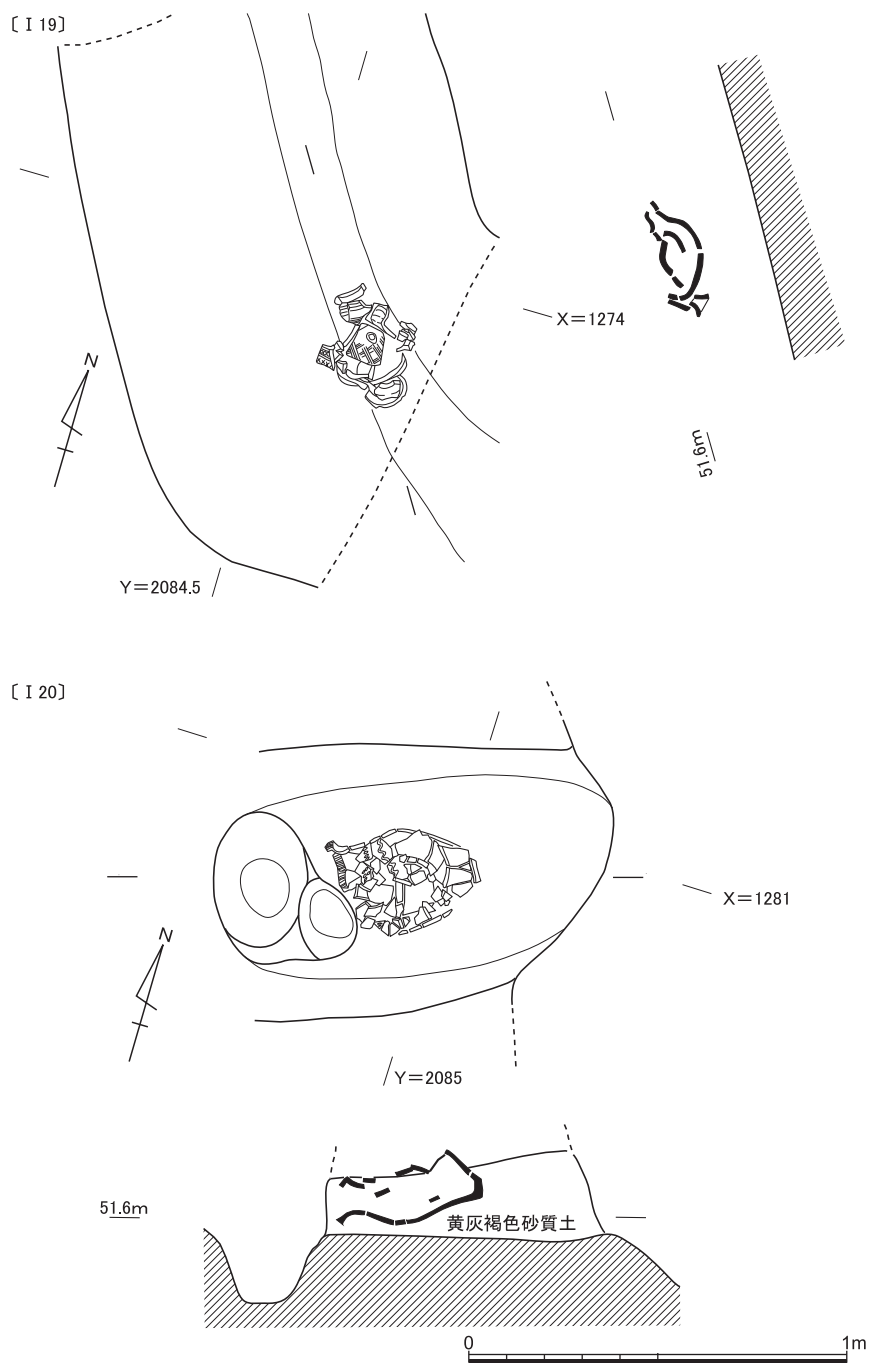


図8 方形周溝墓の弥生土器出土状況 縮尺1/20

弥生時代の遺跡

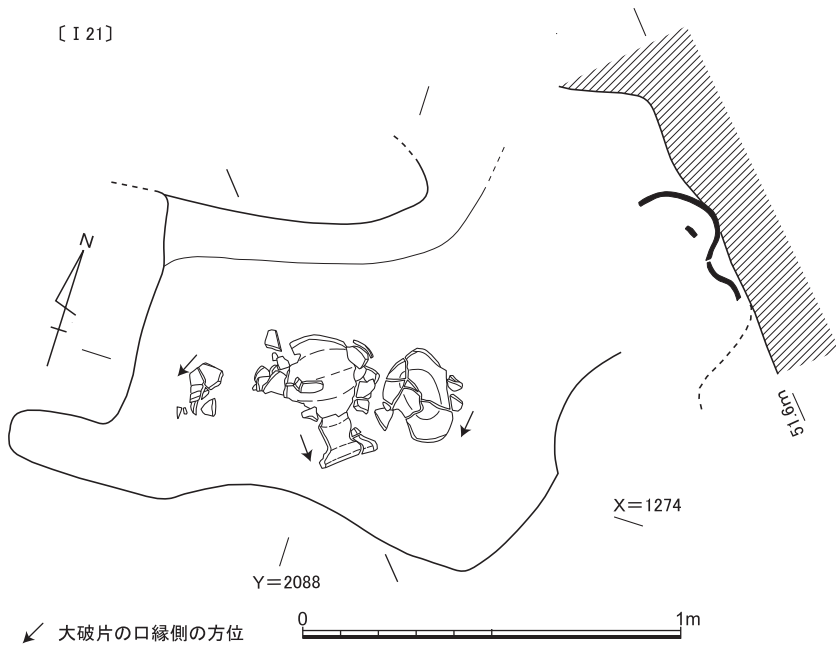


図8 つづき

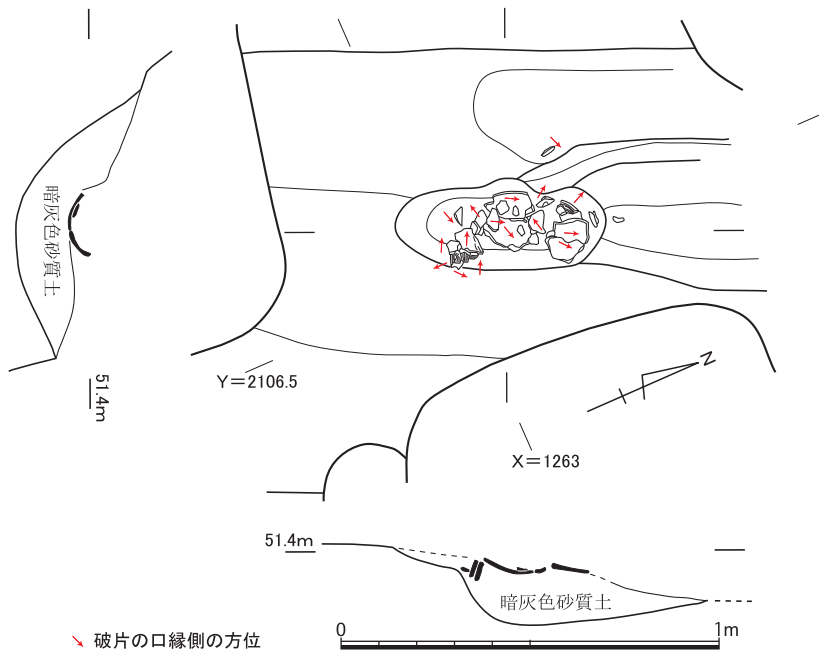


図9 溝S D 15の弥生土器出土状況 縮尺1/20

な台部は底部との接合部から剝離した状態で、両部の正位時の中軸線は直線にならない。以上から、正位から北西側へ倒れたのではなく、不安定ながらも把手を上向きにして横位に据えられた可能性が高い。なお、把手のほぼ真裏側の胴下半部に焼成後の穿孔がある。

I 20は、口縁の一部は中世に破損を被っているが、口縁が溝の長軸におよそ平行して南西方面を向いて横位で出土した（図版 5 - 3）。有文だが器面の特定箇所正面にある意匠ではなく、また穿孔部や明瞭な黒斑もない。上面側の最大径付近に蜘蛛の巣状の割れを確認でき、その中心近くの破片は下面近くまで落ち込んでいる。胴上部と同様に非常に薄いつくりの胴下部は、土が充満していたが底裏面が周溝底面とはほぼ直交する。

I 21は、口縁が溝の長軸に関わらずに南東方面を向いて横倒しの状態で出土したが、上部を中世に破壊されその破片が並ぶように出土したので（図版 5 - 4）、原位置を保ってはいないと思われる。底部付近からその破壊された胴部にかけて黒斑を認められる。

中期の溝と土器辺集中部 土石流堆積物の上位では、溝と土器片の集積も検出した。調査区東南部では、北東から南西へはしる溝 S D 15を検出し、そこから第Ⅲ様式の 1 個体分の短頸壺の破片（I 22）がまとまって出土した（図版 5 - 5、図 9）。埋土は暗灰色砂質土。方形周溝墓の一辺かと思ひ溝の遠端を精査したが、折れは見つからなかったため、溝と判断している。残りのもっともよい部分では、口縁は北東を向いて出土したが、その下位の底部破片は口縁部よりも北東から出土しているほか、それらからやや離れて出土する破片もあった。したがって、破損後に二次的に移動していると思われる。

調査区東南隅では、暗黒褐色土から暗灰褐色砂質土（第 4 h・4 i 層）にかけて、第Ⅲ様式の壺の破片が散漫な状態で出土した（I 23）。調査区壁面にも破片が残っていたので、できるだけ回収したが、破片の分布の中心は調査区外と思われる（図版 5 - 6）。

土石流 黄色砂（第 5 層）からは、調査区東壁中央付近の最下部に近いシルト（第 5 f 層）では胴部の残りのよい壺が（I 17）、調査区西辺の中世の溝 S D 2 の側面の細砂（第 5 e 層）では同一個体と思われる甕の複数の大型破片（I 18）が、それぞれ出土した（図版 4 - 3、図 6）。ともに、第Ⅱ様式（中期）の特徴をもつが、表面がほとんど摩滅しておらず、土石流堆積の上部から掘り込まれた痕跡も認められない。また、I 18の口縁部破片には、立位で出土したものもある。こうしたことから、この 2 個体はこの近辺から土石流によってもたらされたと考えたい。すなわち、土石流の堆積年代は前期末というよりも中期初頭とみなすべきであろう。ただし、直下の旧地表面では、京大構内やその近辺のこれまでの調査で、中期とみなし得る個体は出土していない。

(2) 遺物 (図版16, 図10～12)

弥生前期の土器 (I 7～I 16) I 7～I 13が壺の口縁部や頸部付近, I 14～I 16は甕の頸部付近。頸部には複数条の篋描沈線文が認められ, また, 壺の口縁部も大きく外反するような特徴を示していることから, 第I様式でも新段階に位置づけられる。

弥生前期末～中期初頭ごろの土器 (I 17・I 18) 壺と甕がある。いずれも特異な要素をもつことから, 以下にやや詳しく説明しておく。

I 17の壺は, 口縁部と胴部の約半分を欠失しているが, ほかはほぼ全周する。底部と胴部以上では中心軸が若干ずれており, 胴部の最大径は26cm。くびれの少ない太い頸部をもつ器形で, この頸部のみに櫛描文が施されている。櫛原体は5本単位のものともみられ, 残存する2帯のうち, 全体が観察できる下段のものは, 2条を重ねて幅を広くした複帯構成となっている。胴部は, 上半が浅く幅広い横位の篋磨き, 下半は縦位の刷毛調整が残される。中央付近に輪郭不鮮明な10cm大程度の黒斑が認められる。総じて器壁は厚いが, 底部はとくに分厚く突出する形状をとっており, 外面を横位に強く撫でつけている。施文に櫛を用いていることから, 中期に下る時期のものと判断されるが, 手法が稚拙であり, また厚い器壁や篋磨き主体の仕上げなど, 前期の特徴を色濃くとどめており, 限りなく前期に近い時期のものと評価すべきと考える。

I 18の甕は, 互いに接合しない口縁部と胴部の大破片があるが, 特徴が類似することから同一個体とみて, 図上で器形を復元した。口縁はゆるやかに大きく外反し, 面を持たない端部に, 丸みを帯びたD字状を基調とする小さな篋刻みを施している。胴部破片の湾曲度合いから, 最大径は24～25cm程度になるものとみられ, 頸部がわずかにくびれる器形になるものと想定した。頸部付近は横位の, 胴部以下は斜位の条痕調整で, 3～4条単位程度の板状原体による浅くべったりとしたものである。胴部外面は煤の付着が著しく, 黒変している。内面は全面が撫で調整で平滑にされ, そのほかの調整痕を認めない。山城地域の前期～中期には類例の無い資料で, 縄文晩期の深鉢を彷彿とさせる器形であるが, 口縁端部の篋刻みは弥生時代に下るとみるべき特徴を示している。

弥生前期遠賀川式の甕形土器は, 中期の大和・山城・近江地域などでは, 文様を失って刷毛調整を基調とした「大和形甕」と呼ばれる地域の特徴を示すものへと大きく変化していくことが知られている。大和地域においては, その過渡期にみられるもののうち, 口縁部の屈曲が緩やかな, 浅い刷毛調整のみで無文化している甕を, 定型化する以前の「初期大和形甕」と評価し, 大和Ⅱ-1様式の指標としている〔大和弥生文化の会編2003

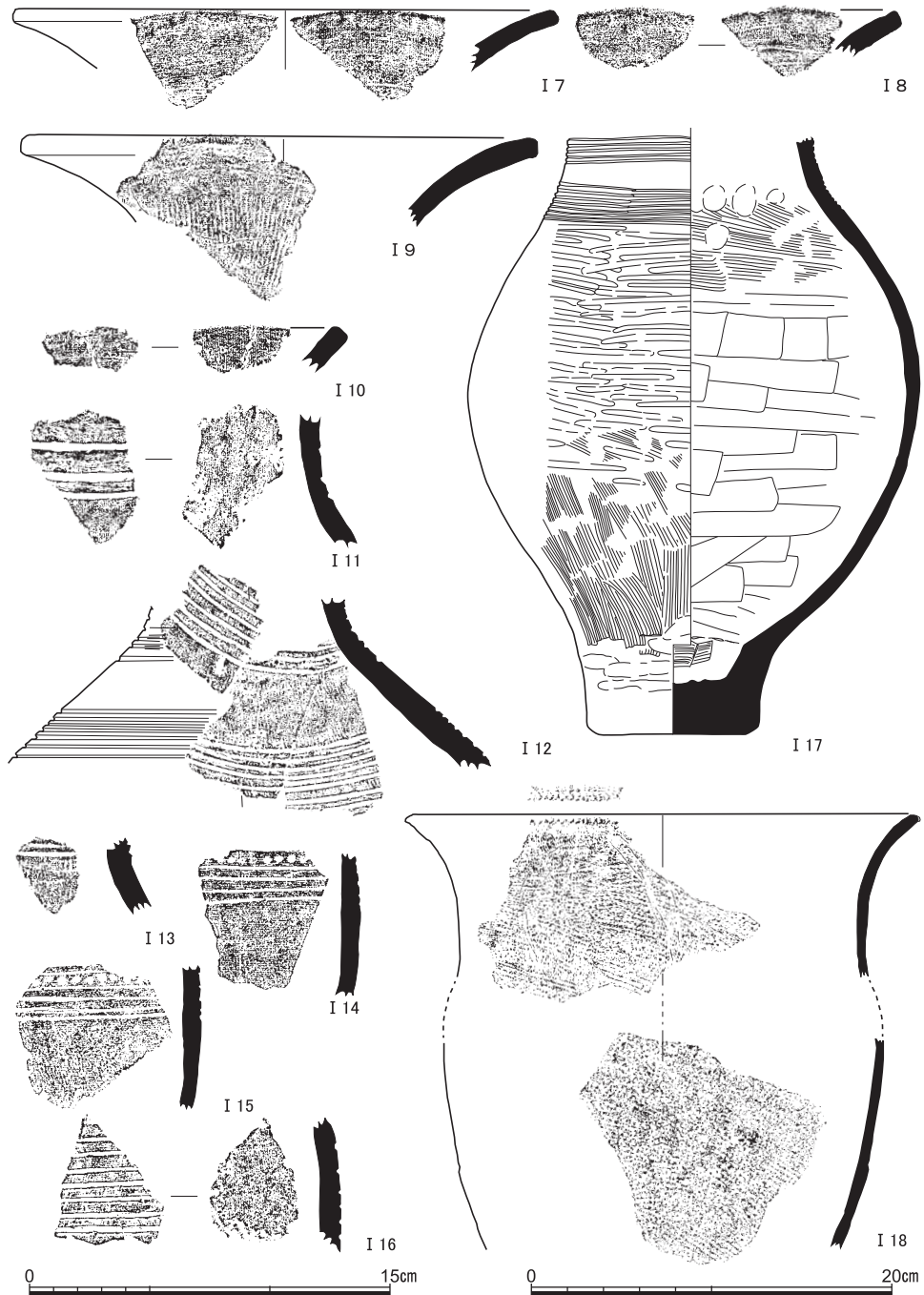


図10 弥生時代前期の土器と前期末～中期初頭の土器（前期：I 7～I 9・I 13・I 14流路内砂礫，I 10・I 11・I 15青灰色細砂，I 12・I 16灰色粘質土出土，前期末～中期初頭：I 17・I 18黄色砂出土） I 17・I 18以外は縮尺1/3

pp.69-73]。この I 18についても、外面の調整手法が大和地域とは異なるものの、山城地域における前－中期間の過渡期に生じた製品と評価できる可能性がある。条痕状の調整については、地理的位置を反映して、伊勢湾地方などとの影響関係が考慮されよう。なお、大和Ⅱ－1様式は、大和地域においては櫛描文出現前の段階であり、周辺地域においては前期新段階とされる時期に並行すると位置づけられている。したがって、仮に本例の前述の想定が正しいとすれば、山城地域における前期末の製品であると評価することもできる。ただいずれにせよ、類品の増加を待つ必要があろう。

以上の I 17・I 18は、黄色砂中からの出土であり、その時期的評価は、土石流発生時期の特定に大きく影響する。同じ吉田南構内の A R 24区（288地点）では、黄砂上面で、I 17に類似した器形の篋描文壺の一括出土があり〔伊藤ほか2006 図102－Ⅱ358など〕、土石流が弥生前期末に限定できる可能性が示唆されている。しかし今回の I 17については、櫛描文施文という中期に下る特徴を示すことから、その評価を重視するならば、発生時期も少し下らせて考えておく必要が生じよう。

弥生中期中葉～後葉の土器（I 19～I 24） 方形周溝墓に供献されたとみられるほぼ完形に復元可能な一群（I 19～I 21）と、それとは遊離した溝などから出土の個体（I 22・I 23）があり、前者は凹線文手法の盛期である中期後葉（第Ⅳ様式）、後者は凹線文出現前段階の中期中葉（第Ⅲ様式）に位置づけられる。

I 19の水差しは、底部に別造りの脚台を付す。台部との接合後に、底部内面の凹みを埋めるように円盤状の粘土を充填していたとみられるが、破損して円盤部のみ剝離している。把手は、穿孔して差し込む手法で接着する。外面は、櫛描の蓮縄文・直線文・斜格子文に円形の刺突文を組み合わせた文様を施す。なお円形刺突は、〱形に割った工具を複数回刺突して〇形とする煩雑な技法を用いている。胴部下半は横位・縦位の刷毛調整である。

I 20は受け口状の口縁を呈する甕。器高36cmを越える大形品であるが、頸部以下の器壁は底部に至るまで非常に薄くほぼ均一である。外面上半に櫛歯の軽いタッチの刺突列2帯と波状文が施され、下半は流れるように縦位刷毛調整を重ねる。内面は、口縁から頸部にかけては横位の刷毛調整、それ以下縦位・横位の撫で調整が丁寧にほどこされる。これらの調整区分は製作の単位をおおむね反映しているようで、境目に粘土紐接合痕が観察できる。使用にともなう痕跡は全く観察されない。金雲母を多く含んだ、精良な胎土である。近江系と呼ばれている器形や文様の特徴を有する個体だが、胎土や色調に搬入品と明らかに指摘できるような特異さは無い。

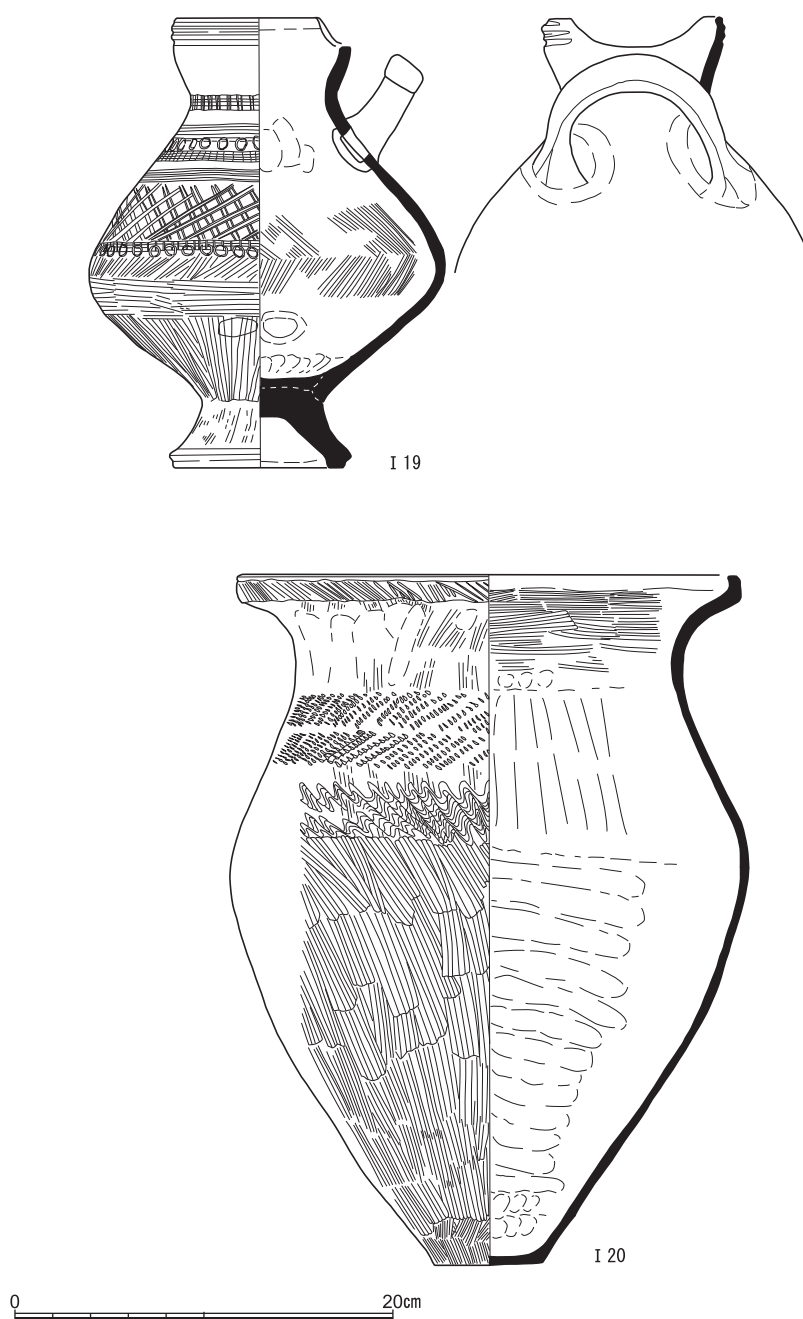


図11 弥生時代中期の土器(1) (I 19・I 20方形周溝墓出土)

I 21は口縁が受け口状を呈する壺。胴部は丸みを帯びた算盤玉形を呈する。底部は焼成後に穿孔されたとみられ、円形に欠失する。内外両面とも刷毛調整を基本とし、口縁部の凹線以外、無文である。山城地域をはじめとして近畿地方では主体とならない器形であり、伊勢湾地方西岸部に特徴的な壺に類似しているといえる。

I 22は短頸壺。口縁部は短く強く外反し、内面に、大和形甕に類似する粗い横位の刷毛調整を施す。頸部のくびれ部に蓋用の穴とみられる2孔を穿つ。外面全面を縦位に篋磨き調整しており、片側におおきな黒斑を有する。底部はドーナツ状に凹んでおり、凹んだ部分に葉脈状の圧痕を認める。

I 23は広口壺の口縁部と胴部下半。特徴が共通であるので同一個体として図上復元した。口縁部周辺は強く横撫でし、それ以外は全面刷毛調整。わずかに残る底部には葉脈状の圧痕がある。

I 24は古墳周溝に混入していた、甕頸部付近の小破片。口縁にかけて直角に近く外折するものとみられ、器壁は薄く、外面に叩きと縦位の刷毛が認められる。中期後葉の甕とみられ、本来は方形周溝墓にともなったものだったのであろう。

以上の中期の土器群は、先述したように出土遺構に対応して時期的に2群に大別されるが、空間的にみても、淀川水系を中心とする近畿地方西部的な特徴を示す土器（II 19・II 22～II 24）と、近畿東部の近江地域～伊勢湾地方にかけての特徴がうかがえる土器（II 20・II 21）の双方が含まれている。山城地域の中でも東縁部という遺跡の所在位置を如実に反映する様相と言え、興味深い。

5 古墳時代～古代の遺跡

(1) 遺 構（図版3・6～9、図7・13～20）

弥生中期初頭の土石流堆積物の上位では（図7）、調査区の中央北辺から東辺にかけて、第4層を埋土とする数基の小規模な落ち込みと溝SD14を確認している。前者では時期を確定できる遺物を包含していなかった。また後者では、古代の須恵器と9～10世紀の緑釉陶器の破片を包含していたにすぎない。

しかし古墳時代に関しては、調査区の西北部隅と中央南辺で、方形墳の周溝を1基ずつ検出した。本調査区は、これまで7基の方形墳が検出されている吉田二本松古墳群の一角を占めるので、それぞれ吉田二本松8号墳、同9号墳と呼ぶことにする。以下、8号墳および9号墳について説明する。

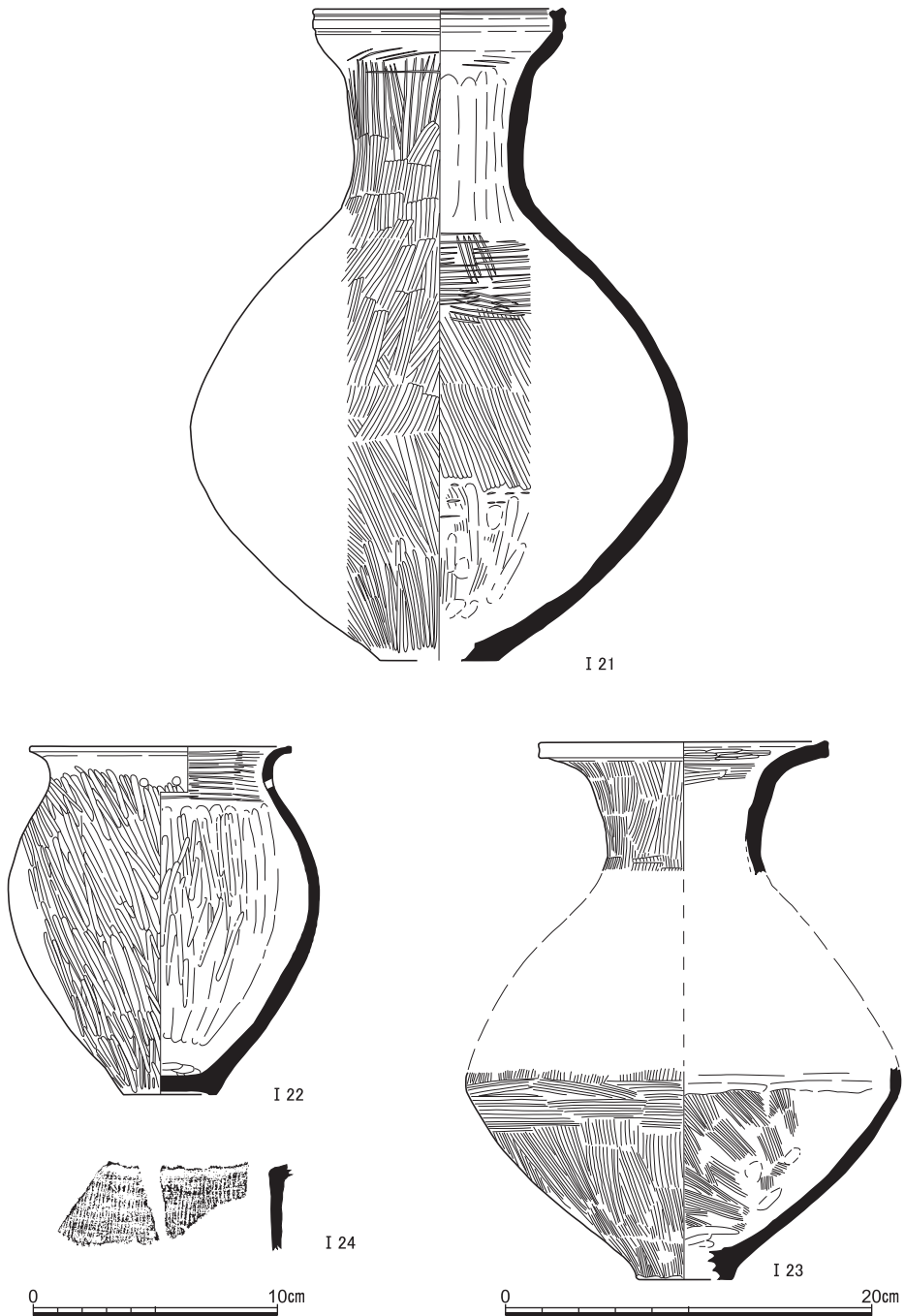


図12 弥生時代中期の土器(2) (I 21方形周溝墓, I 22 S D 15, I 23暗黒褐色砂質土, I 24 8号墳東周溝出土) I 24のみ縮尺1/3

(i) 吉田二本松 8 号墳

調査区西北部で、黄色砂の上面で暗褐色土を埋土とする東の周溝と南の周溝を検出した(図版 6 - 1)。確認面の標高は、高いところでは 52.1m をはかる。周溝に囲まれた内側には、暗褐色土を埋土とする掘り込みは認められず、また古墳時代の遺物のみを包含する土坑なども認められなかったので、墳丘も主体部も削平されたと判断する。周溝の一边は 13m 以上に達し、覆土中に多量の埴輪片が包含されていた。東周溝は北辺で中世の井戸 S E 1 に深く広く切られるほかは、後世の破壊を免れている部分が広い。南周溝は、中世の土坑 S K 4 などによって底面以深まで破壊されている部分も目立つが、中世の溝 S D 4 などのように、周溝埋土の上部までの破壊にとどまるものもある。

周溝の埋土 周溝の底面は先史時代の遺物包含層にまで達し、確認面からの深さは 1 m 前後になる。周溝埋土は(図 13)、上層は暗茶褐色土～暗褐色土で、包含される花崗岩粒はサイズが大きく含有率が高い(第 4 a ～第 4 c 層)。埴輪のほとんどはこの層群から出土した。また埴輪は、東周溝では墳丘側から堆積したことが断面観察でよくわかったが(図版 8 - 1)、面的に掘り下げる時には、どちらの周溝でも墳丘側から落ち込むような分布的傾向を認識しづらかった。

中層は暗黄灰色砂質土。包含される花崗岩粒は、サイズが小さくなる傾向にあり、含有比は高くなるが、粒径が数 mm 程度に達するものの含有率はやや下がる(第 4 d ～第 4 e 層)。東周溝では、墳丘側に粒度の大きいものが目立つ(第 4 d 層)。なお、第 4 d 層と第 4 e 層とでは、堆積の先後関係を決めがたい。埴輪はほとんど出土しない。

下層は黄灰色砂質土で、花崗岩粒の比率が相当に高くなるが、粒径数 mm 程度のものはほとんど含まれない(第 4 f ～第 4 g 層)。下層の標高では、地山の黄色砂が粒径の小さい第 5 e 層であることを反映していると思われる。第 4 f 層と第 4 g 層とでは、色調が異なり、後者がより黄色砂に近い黄褐色を呈するが、内容物にはほとんど違いはない。中層と第 4 g 層とでは色調変化は明瞭ではない。また花崗岩粒の違いは地山となる黄色砂の上方粗粒化を反映しているとみなせたことに加え、埴輪の出土量にも大きな変化がなかったで、中層と下層を一体のものとして掘削した。

中・下層からは埴輪はほとんど出土しないので、墳丘に樹立されていた埴輪は、周溝が 50cm 程度埋まるまでは、ほとんど破損していなかったかもしれない。しかし、出土した埴輪は、多くを占める焼成の良い橙色を呈する個体を見れば、器表面は口縁部から底部まで風化が目立つようなことはない。第 4 f 層から中層にかけては、上層よりも土壌化してい

京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査

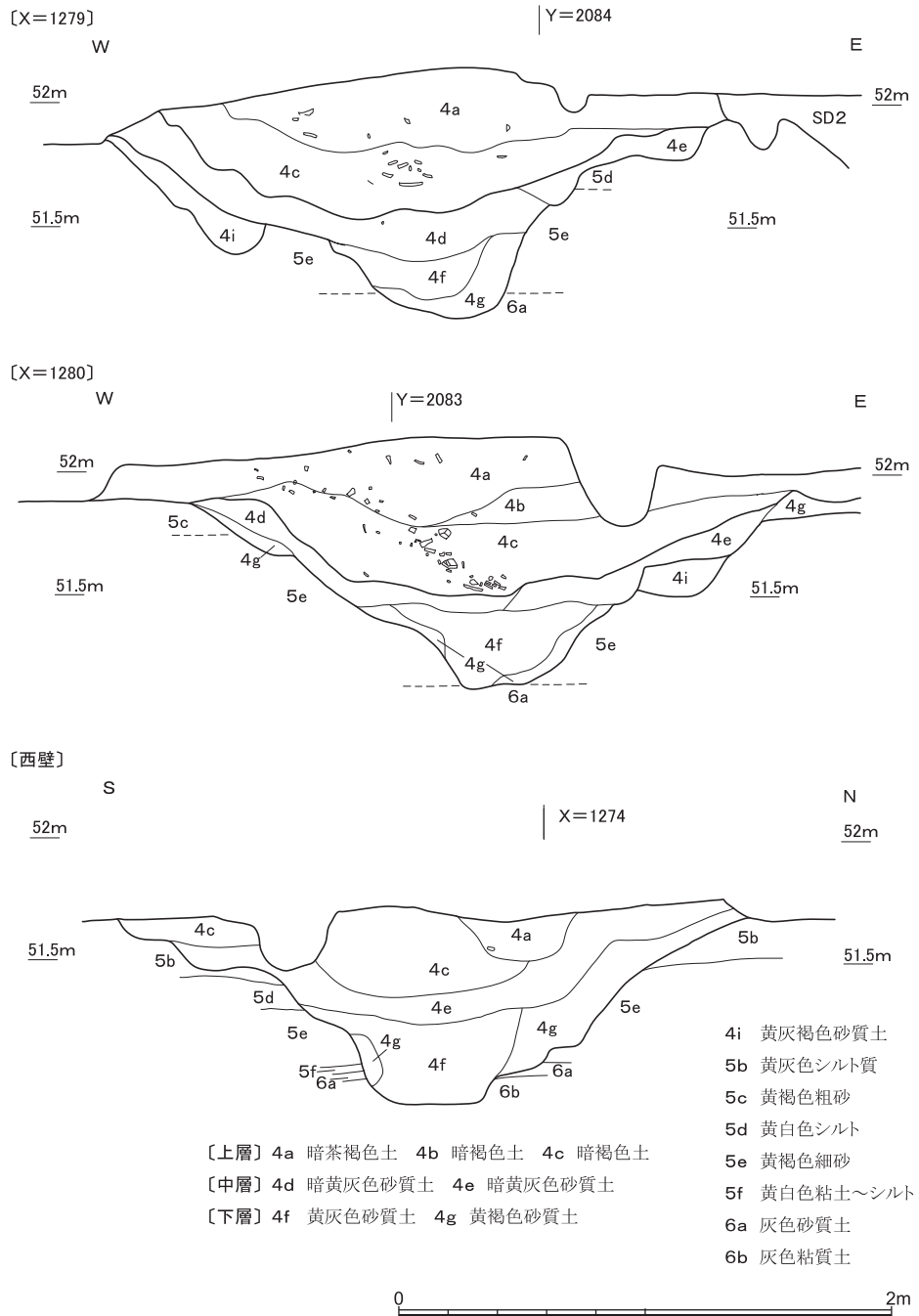


図13 8号墳の周溝の層位 縮尺1/30

ないが、上方に向かって土壌化傾向にあるわけでもない。なお、埋土中には、第4 g 層のように、第5層に由来する黄色砂が主体となる地層はあるが、水成堆積を物語るラミナの確認できる砂層はまったく存在しない。また、葺石はなかったと言える。

東 周 溝 北端は調査区外にあると思われるが、調査区内では13mを発掘できた。上層群では、上半（第4 a・4 b 層）からは少量の埴輪の出土にとどまるが、下半（第4 c 層）からは、接合する須恵器甕の小破片2点と、1個体分の摩滅した土師器甕（I 36）の細片約30点とともに、多量の埴輪片が出土した（図版6－2）。埴輪片は、墳丘側から流れ込んだような状況を断面から読み取れる（図版8－1）。黄灰色砂質土からは遺物はほとんど出土せず、数点ずつの埴輪の細片と弥生土器の細片にとどまる。

底面付近では、須恵器の蓋杯と壺、そして鉄製刀子が出土した。周溝埋土の中・下層の掘削時にも、これらの遺物の確認時にも、掘り方を確認できなかったが、掘削後に須恵器蓋杯から南に約50cmの部分で、底面がわずかに北側に落ちるのを確認できた。須恵器蓋杯は、ホームベース状に並んで5組出土した（図版7－1・2，図14）。北の1組は（I 25とI 26），略方形をなすほかの4組の南北中軸線より数cm東へずれている。およそ方形をなす4組は、集合の中心に向かってわずかに傾く。また東北の1組は（I 29とI 30），蓋が少し持ち上がっていると同時に、下の杯身がほかの3組よりやや北東に外れている。この東北の1組の内部には、土が充満しておりその中からは、少し曲がった針状の鉄製品（I 36）と、それと同一個体の可能性のある短い針状鉄製品が見つかった。この1組以外からは、内容物は見つかっていない。西南の1組（I 31とI 32）の下の杯身には、「へ」字状のヘラ記号と思われる浅い刻線があり、それは北北西を向いていた。5組のうち、北の1組と、西北の1組（I 27とI 28）は、蓋と身の天地が逆転している。

この5組の蓋杯の5cm上位で西側の2組より20cmほど西方からは、口縁が西側（＝墳丘側）を向いて横倒しになった状態で須恵器壺（I 35）が出土している（図版7－3，図7）。この壺は、底部のわずかなひずみと口縁の厚みゆえか、正位ではなく横位で安定する。また蓋杯の50cmほど北方からは、先端が南を指し刃部が東を向いた状態で鉄製刀子（I 37）が出土している（図版7－4，図7）。

南 周 溝 西端は調査区外にあり、調査区内では10mを発掘できた。上層群の上半（第4 a 層）からは、すべて接合する1個体分の甕の体部破片6点が、後述するエリア8でも出土したが（I 41），埴輪の出土量は少ない。下半の第4 c 層に埴輪は集中する（図版6－3）。黄灰色砂質土からは遺物はほとんど出土せず、埴輪の細片数点にとどまる。

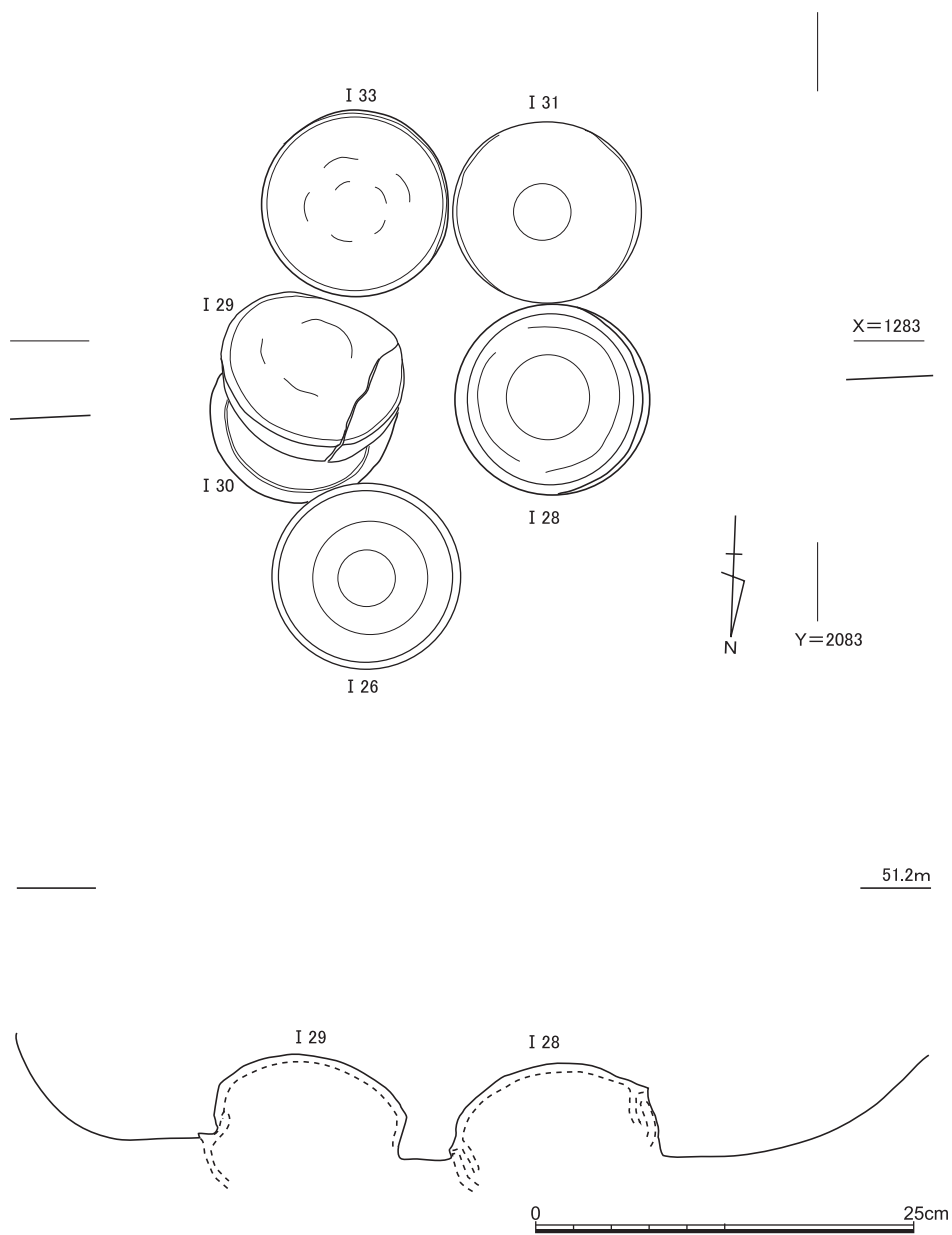


図14 8号墳東周溝の須恵器蓋杯の出土状況 縮尺1/5

底面付近では、2個体分の土師器と赤色顔料が出土した。赤色顔料は、おもに西半で、砂質の埋土になじむような状態で、小銭～人頭大くらいまでの集中部を数カ所認めた。もっとも西で確認した人頭大のまともりは、西の縁をSK4に切られる（図版7-5）。この人頭大のまともりの下部からは、内外面や破断面に赤色顔料が付着している甕の胴部破片6点が出土し（図15）、いずれも接合した。この甕の分布の西縁は、中世の土坑SK4の範囲に収まるようで、破片の多数はその埋土に包含されていた（I37）。

もう一個体の壺は、中央よりやや東側で、多くの破片が内面を上向けに出土した（図版7-6, 図16）。下位に赤色顔料のまともりのある破片でも破断面に顔料は付着していない。頸部以下は9割以上を回収できたが、口縁部で回収できたのは口径の3分の1を占める大破片2点のみである（I38）。復元すると、底部破片の縁を割れの起点と判断でき、そこは出土時に西方を向いていたが、その上部に位置する口縁部2片は、離れた東側で口縁を西に向けて出土している。以上から、割れてからの二次的移動があったと思われる。

埴輪の包含状況と回収方法 2辺の周溝から出土した埴輪には、朝顔形を含めた多数の円筒埴輪のほかに、人物埴輪と馬形埴輪と家形埴輪の各1点から成る形象埴輪がある（1）。多くの破片は、南周溝では標高51.5～51.7m、東周溝では51.5～51.8mで出土した。形象埴輪も出土した南周溝では、実測図を描きながらおもだった破片約900点に番号を付して取り上げ、円筒埴輪のみが出土した東周溝では、おもだった破片約1800点に番号を付して光波測量で取り上げた。番号を付すことのできなかった破片は、包含密度に応じて2～3mの範囲を一つのエリアとして、エリア別に回収した。東周溝では、北縁から2.5mがエリア1、さらに2.5m分がエリア2、そこから断面観察畔までの4mは2分してエリア3および4、幅2mの畔をエリア5、畔から南の2mをエリア6とした。東南隅の約3m四方をエリア7として、そこから西へ、2mごとにエリア8、9、10、そして最後に西縁までの3mをエリア11とした。これらのエリアでは、原則的にエリア内をさらに2分して約1m単位ごとに回収したが、東南隅は遺物が少なかったので（図版8-5）、エリア7については全体で一まとまりとした。

東周溝（エリア1～7）では、各エリアについて、周溝の立ち上がりのラインを明確に確定するまでと確定した後との2回に分けて掘削した。およそ、第4a層が1回目で第4b・4c層が2回目に相当する。南周溝（エリア8～11）では、既に周溝の肩が検出できていたので、エリア別の掘削は1回で、実質的に第4c層が相当する。

こうして回収した埴輪片は、破片の大小を問わなければ総計で1万点を超えると思われる

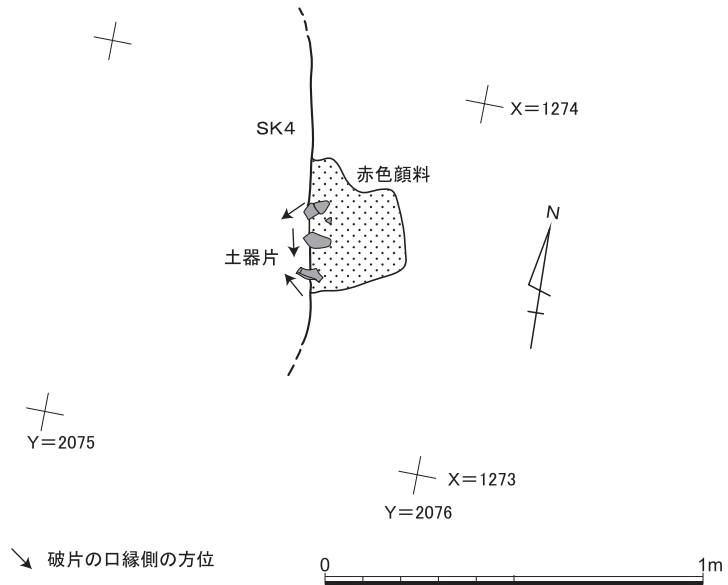


図15 8号墳南周溝の赤色顔料と土師器の出土状況 縮尺1/20

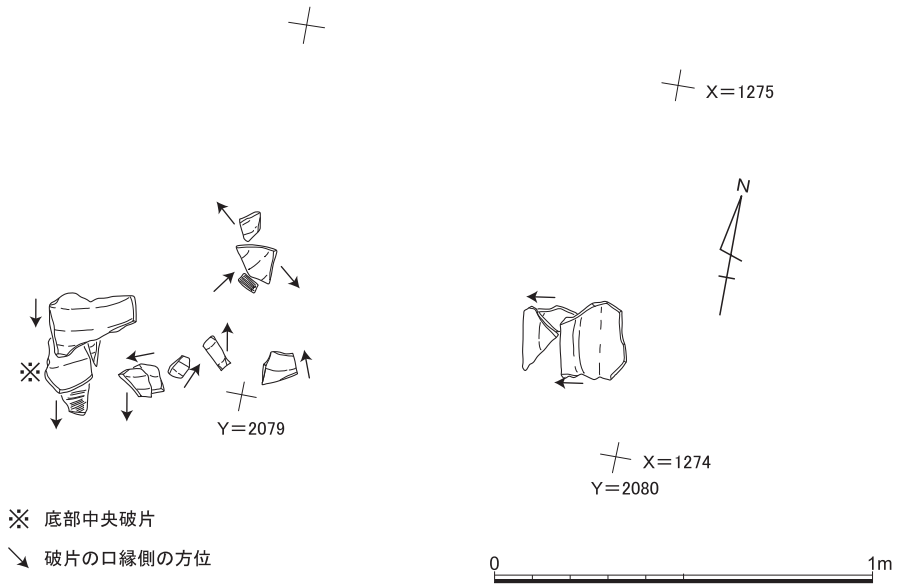


図16 8号墳南周溝の土師器の出土状況 縮尺1/20

るが、破片の大半は10cm四方に満たない（図版6－2・3）。出土する部位に偏りはなく、口縁部も底部も出土する。器表面は、焼成の悪いものでは内外面も破断面も摩滅しているが、橙色を呈する焼成の良好なものはほとんど摩滅していない。なお、周溝の内側および外側でも、周溝からおよそ10mの範囲内にある後世の包含層や遺構埋土からも、円筒埴輪の破片は出土したが、数十点にとどまる。

南周溝の埴輪 形象埴輪、朝顔形円筒埴輪（以下、「朝顔形埴輪」）、普通円筒埴輪（以下、「円筒埴輪」）が出土した（図17～19）。人物埴輪（I 42）と馬形埴輪（I 43）の破片は、おもに西辺のエリア10西半から出土し、破片の分布域がほぼ重なる。細かく見れば、およそ馬の破片は、人の破片よりも東側で出土する傾向があることに加え、左後脚の破片のいくつか、人物の破片分布域より少し離れて東側のエリア10東半から出土する。エリア11からは左手網の剝離破片しか出土しない。人物では、左半身側の破片のいくつか、手網破片を除く馬の破片分布域よりも西側のエリア11から出土している。さらには、人物の方が馬よりもいくぶん下位から出土する。したがって、人物は、形態面だけでなく出土状況面でも、馬の引き手を右手で持つ馬子と判断できよう。そして両者は、墳丘外側の南方でなく、北方ないし西方を向いて樹立されていた可能性が高い。

家形埴輪（I 44）は、東辺のおもにエリア8から出土した。墳丘の外側から周溝に向かって、斜めに反転し、図24のC面を北ないし上に向けながら、三角形の入母屋破風のあたりから多少の勢いを得て突っ込み潰れたかの状態だった（図版8－2・3）。すなわち、C面の左下部の破片のまとまりは、墳丘内側の北東方向に巴投げされたような状態で出土し、またB面の破片は、他の3面より細片が多く、より西方で出土する傾向にある。

朝顔形埴輪を含め、円筒埴輪は、両方の周溝から出土しているが、3条突帯と確認できる小ぶりの円筒埴輪の破片は、東溝からは出土せず、南溝でも形象埴輪の分布域におよそ重なって出土する。それらのおもな破片分布域は、I 46はエリア9～10で、I 47はエリア10～11である。3条突帯のものはこのほかに少なくとも1個体あり、そのおもな破片分布域もエリア9なので、いずれも基本的に家形埴輪より西からの出土である。

I 45は、家形埴輪の東のエリア7西半で、周溝よりもやや外側東方から、口縁を西方に向けて、軽く放られて潰れたかの状態で出土した（図版8－4）。すなわち、上面側の破片が、対向すべき接地側の破片よりも北西方向に飛び出しているものが目立つほか、底部にも、巴投げに近い状態で西方に勢いがついて飛び出た大型破片がある。なお、口縁部の刻線と穿孔で構成される記号は、墳丘外側、すなわち南側を向いていた。

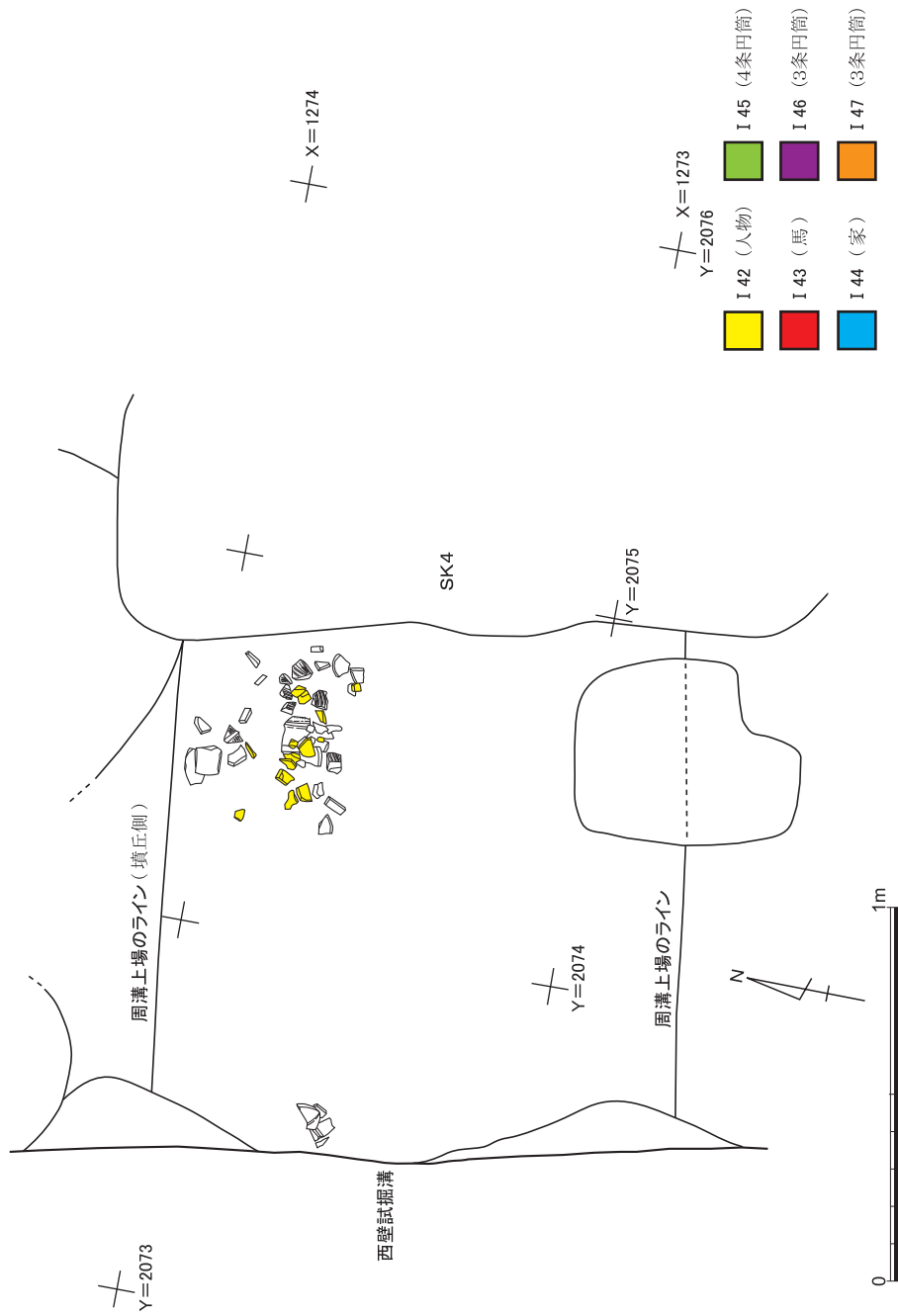


図17 8号墳南周溝の直輪の分布 (第1次取り上げ時) 縮尺1/20

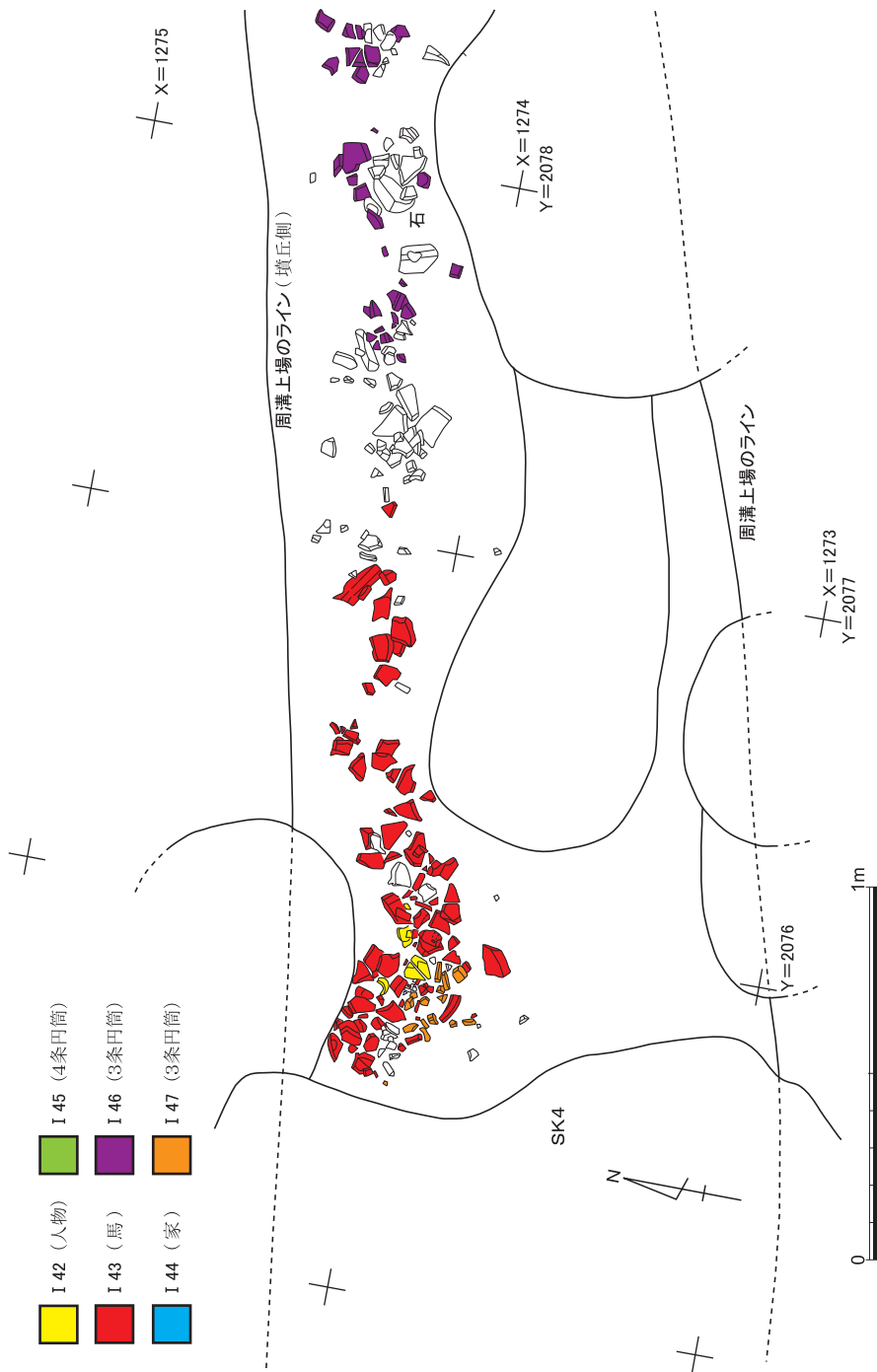


図17 つづき

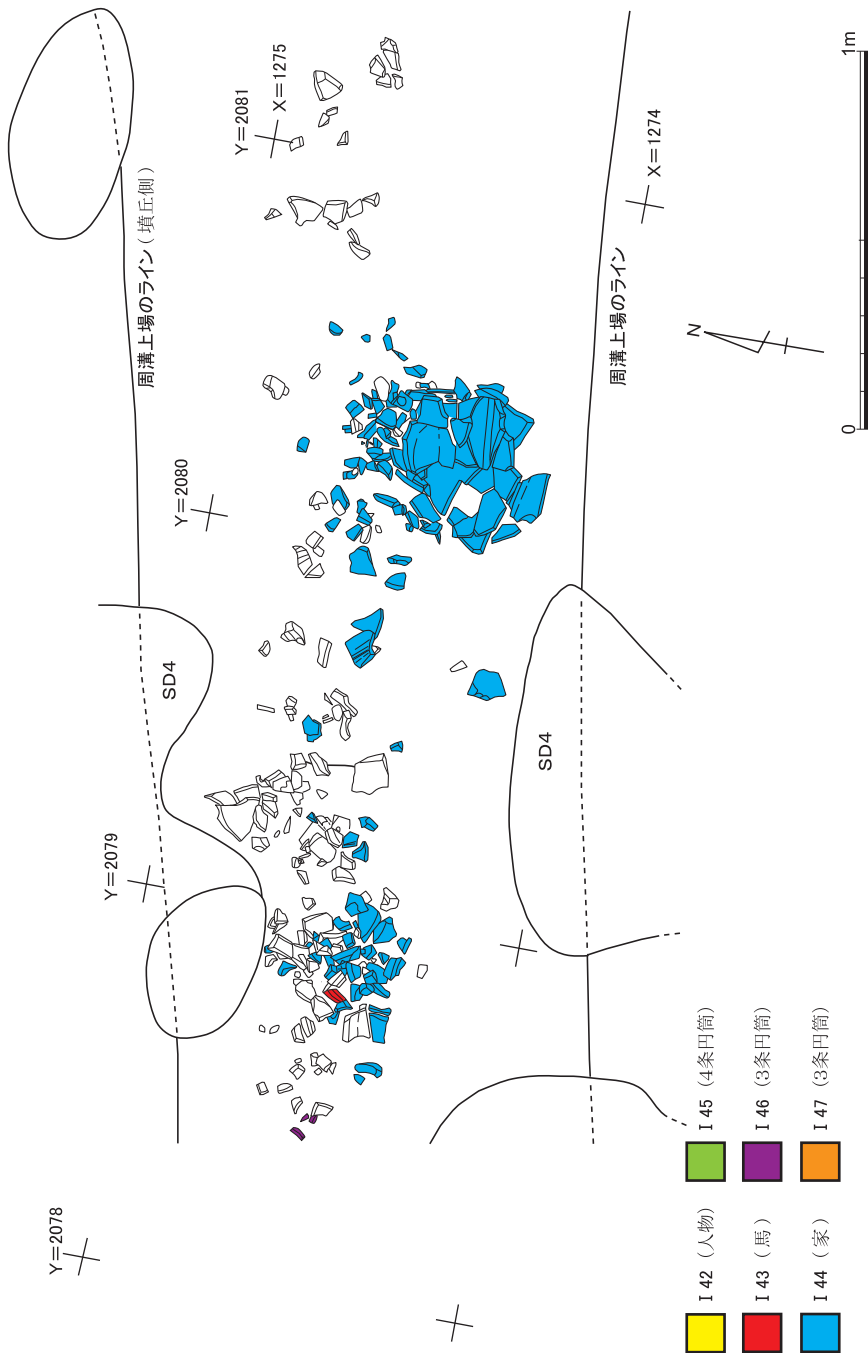


図17 つづき

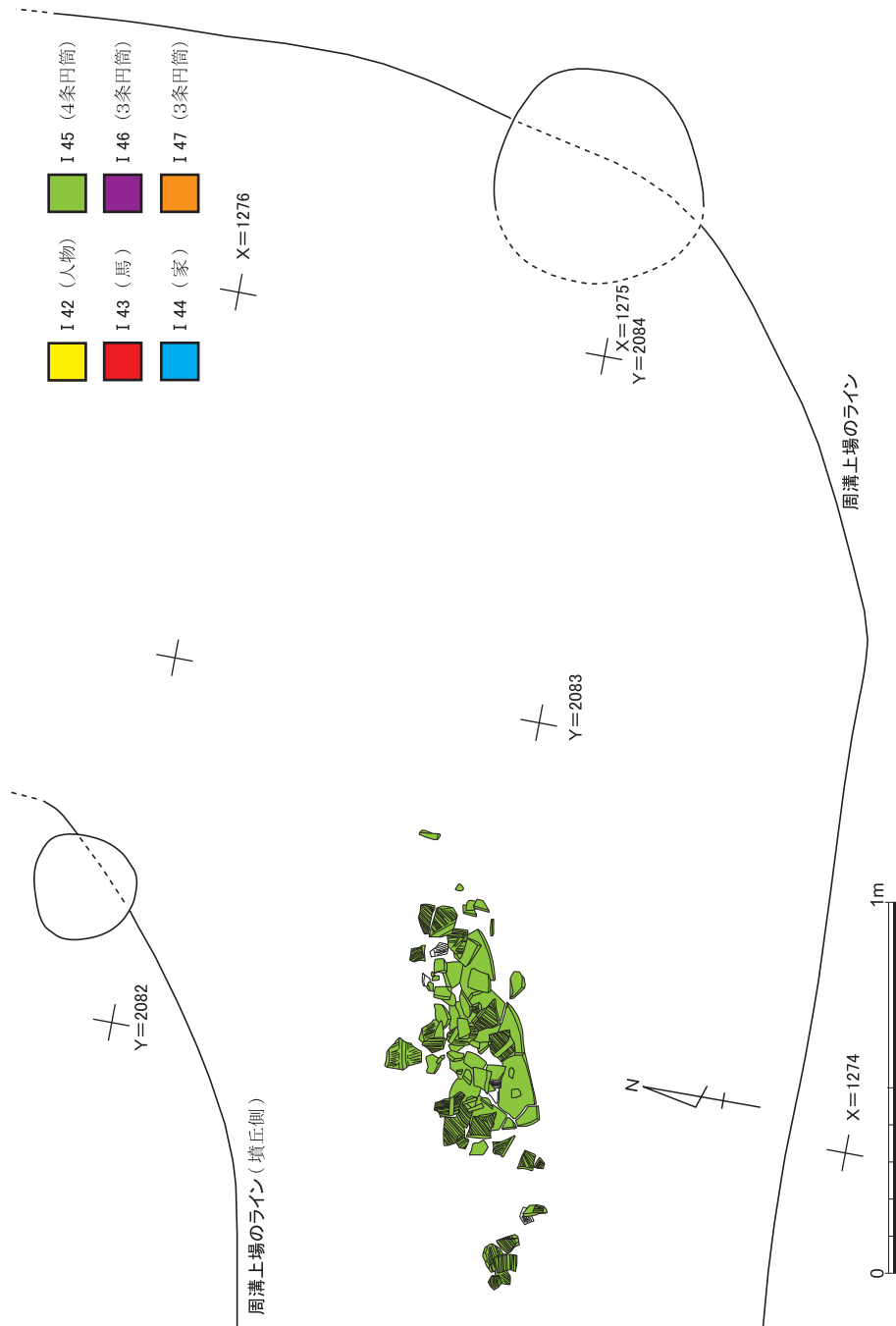


図17 つづき

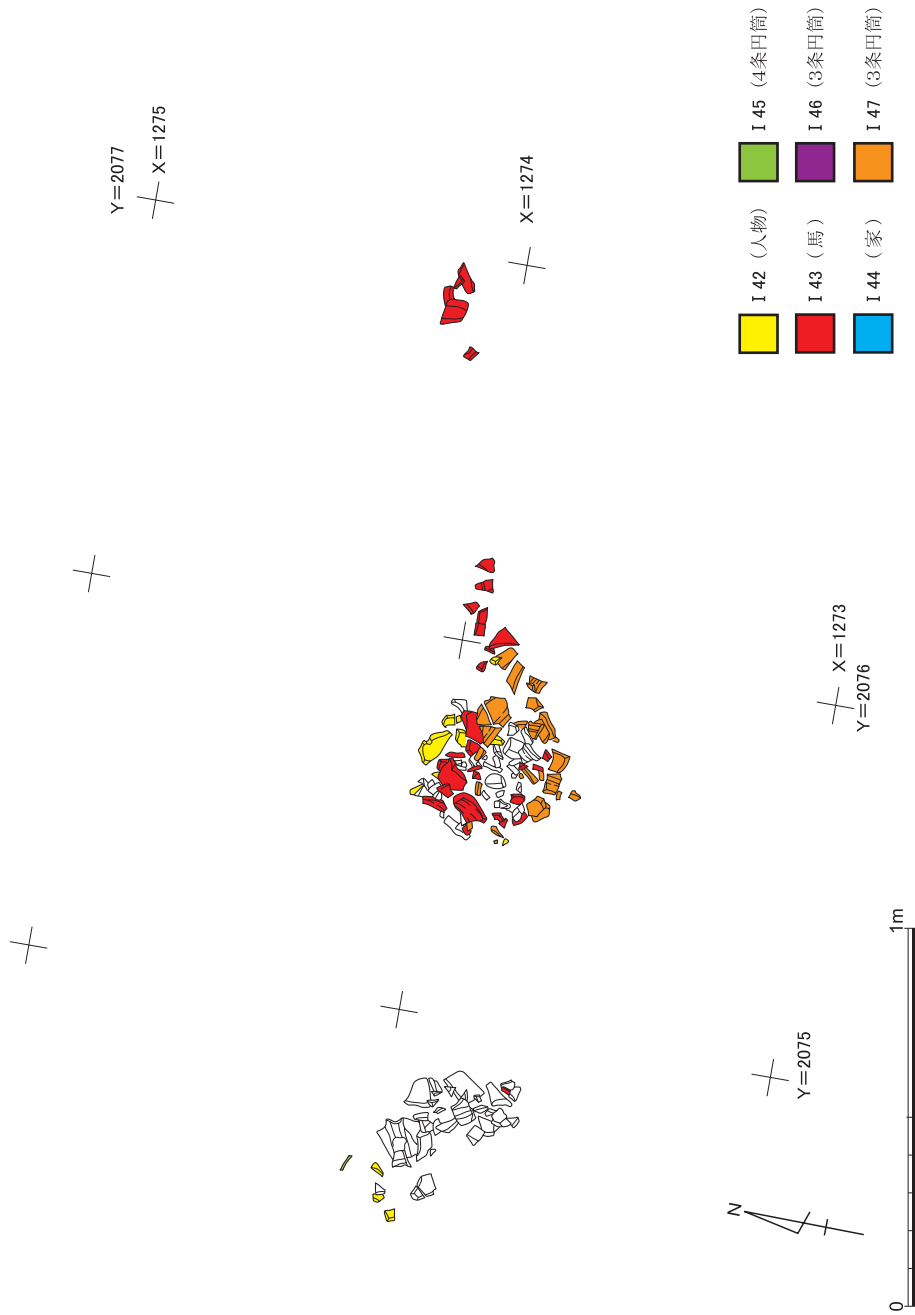
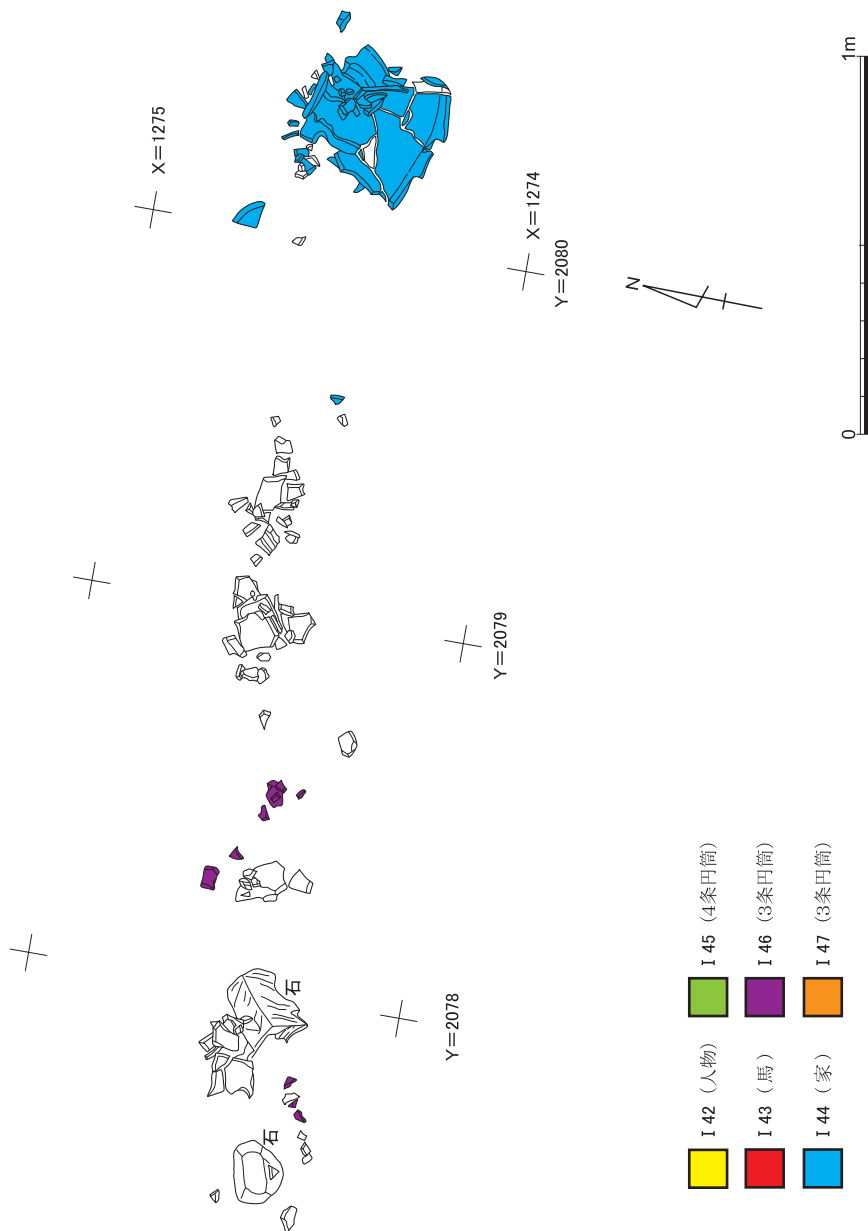


図18 8号墳南周溝の直輪の分布 (第2次取り上げ時) 縮尺1/20



18 ㊦



図18 つづき

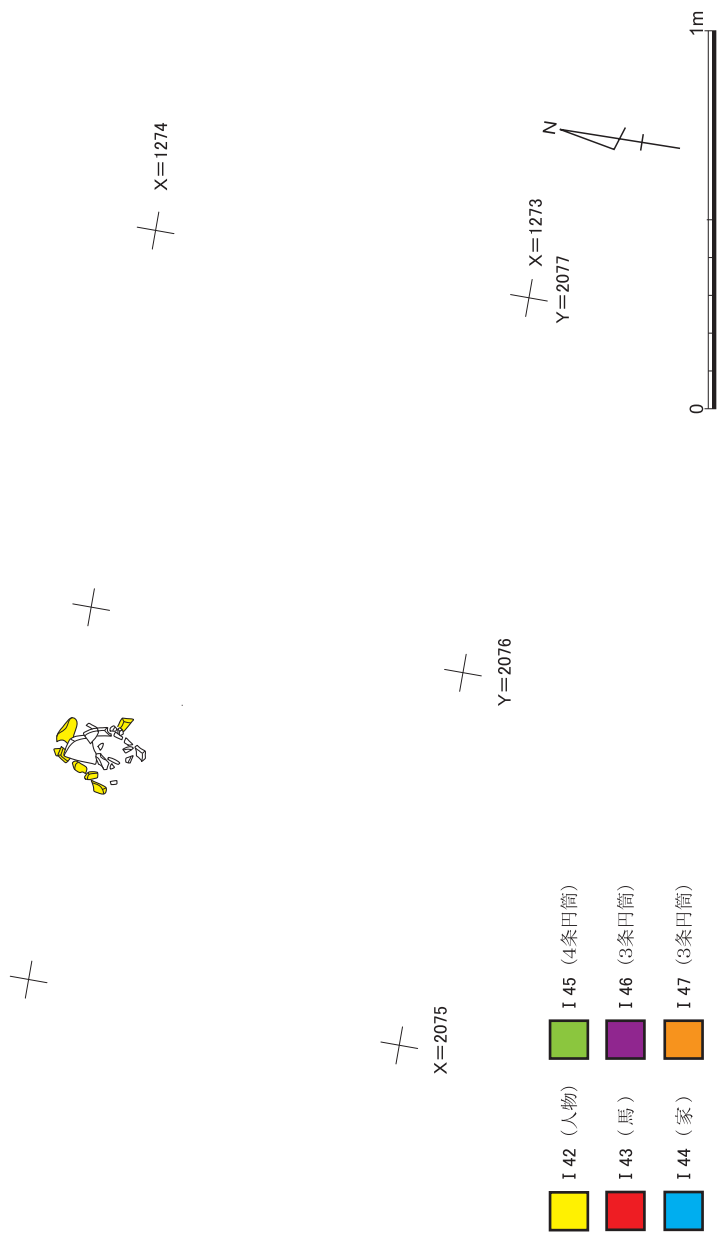


図19 8号墳南周溝の直輪の分布（第3次取り上げ時） 縮尺1/20

南周溝ではこのほかにも、朝顔形埴輪の破片分布域がエリア7～8、8～10、11のそれぞれにあり、3個体は存在する。また、円筒埴輪も突帯が4条と思われるものの破片分布域が、エリア8～9で焼成の悪いものを含み2個体前後分、エリア9～10でも2個体前後分、エリア10～11で4個体前後分、それぞれある。以上、10m分を調査した南周溝では、3個体の形象埴輪、3個体の朝顔形埴輪、12個体前後の円筒埴輪、合計18個体前後の埴輪の出土を確認できる。

東周溝の埴輪 形象埴輪の破片は確認できない。13m分を調査し、円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が19個体分以上出土しているのを確認できた。南北で4m以上に達する分布域をもつことが破片の接合関係から確かめられた個体もあるが、現段階では南周溝から出土した個体と同一個体とみなせる破片は確認できていない。

I 48は、エリア4で、北東に向いた口縁が底部より少し高い位置で、その場で押し潰れたような状態で出土した(図版8-6)。すなわち、縦方向に器体を半截されたような、雨樋のような形状で出土している接地側の破片に対して、対向すべき位置にある上面側の破片は、ほとんどがその雨樋状空間内におさまって出土していることが、接合後の各破片の原位置情報からわかった。ただし、上面側の破片はその場で潰れたままの状態を保ってはいなかったようで、もとの形状時の口縁側を北に向けて出土した破片が多いわけではない。なお、口縁部の刻線と穿孔で構成される記号は、接地面に位置していた。

I 49は、エリア4・5から出土した破片を主体に接合しているが、破片分布域の南北間距離は4mを超える。I 50の朝顔形埴輪ではおもに、口縁側の外反部のまともはエリア3に、体部のまともはエリア4に、そして底部のまともはエリア3～4に、それぞれ認められる。周溝内に堆積するまでに、すでに少なくとも2つの部分に別れていたことが推測される。I 51は、5条突帯と思われる円筒埴輪で、口縁部側のまともはおもにエリア4だが、下半部から底部にかけてはエリア3～6にいたるので破片分布域の南北間距離は4mを超える。

このほかに東周溝には、エリア1～6までで少なくとも15個体前後の破片が群在する。その中には、エリア3におもな破片分布域をもつ朝顔形埴輪や、エリア4におもな破片分布域をもつ5条突帯の可能性のある円筒埴輪、エリア5におもな破片分布域をもつ4条突帯で3段に透かし孔をもつ円筒埴輪、エリア5南半～7におもな分布域をもつ焼成の悪い円筒埴輪も含まれる。焼成のあまり良くない破片は、おもにエリア5～7に4個体前後が分布するほか、エリア1にも1個体前後ある。なお、3条突帯の個体は確認できない。

(ii) 吉田二本松 9 号墳

中央南辺で、黄色砂の上面で南の辺を除く 3 辺の周溝を検出した（図版 9 - 1，図 7）。検出面の標高は、高いところで 51.8m をはかる（図 20）。8 号墳と同様に、周溝の内側に古墳時代の遺構を認められなかったため、主体部は削平されたと判断する。周溝は、中世以降に破壊を受けている箇所もあり、また東周溝と西周溝の南端を確認していないが、一辺の規模は 13m と推定できる。周溝の深さは確認面から 70cm ほどで、底面は先史時代の遺物包含層にまで達する。埋土は、8 号墳と同質で、上半は黒褐色～茶褐色土で花崗岩粒はサイズが大きく（第 4 a・4 c 層）、下半は黄灰色砂質土で（第 4 d・4 e・4 f 層）、花崗岩粒は上半に比べてサイズが小さく含有率も低い傾向にある（図版 9 - 2）。埴輪は出土せず、葺石もなかったと思われる。北の周溝の中央付近には、底面から 40cm ほど高くなっている渡り土手があり、上面で幅 60cm、底部で幅 130cm を測る。

遺物の出土状況 北の周溝で 5 点の遺物が出土した（I 52～I 56）。渡り土手の約 1 m 西側の周溝底面近くから、北側から順に、須恵器の杯身（I 53）と大型の甕（I 54）、そして鉄製 U 字形刃先（I 56）の 3 点が出土した（図版 9 - 3）。下場はいずれも標高 51.3m 前後でほとんど変わらない。杯身は完形で割れていないが、甕は口縁の約半分を欠き出土時には頸部にかすかな割れ目が入っていた。杯身は、周溝北壁に接するほど偏った位置にあり、正位よりは 30 度ほど北側に傾いて出土した。甕は、その南東から、穿孔部を地面に向けて 80 度ほど南側に傾いたほぼ横位の状態で出土した。ともに、形状に照らして、その傾きを保持したままでは安定して自立するのは困難である。鍬ないし鋤の刃先と思われる鉄器は、甕の南西、周溝中軸付近で、刃先を東に向けて 30 度ほど北側に傾いた状態で、図 27 の正面を上に向けて出土した。柄の痕跡は確認できなかったため、装着していたか否かは不明である。

これらの約 2 m 西の周溝底面の中軸付近からは、橙色を呈する小型の土師器壺が（I 52）、70 度ほど傾いて口縁を南西に向けて出土した（図版 9 - 4）。下場の標高は 51.3m。この傾きでは、自立可能ではあるが、甚だ不安定である。外面の唯一わずかに黒化した部分が地面を向いていたが、その内面側も、対応するように、内面で唯一わずかに黒化した部分だったので、埋没の過程で変色したのかもしれない。

さらに約 2 m 西の周溝底面で中軸よりやや北で、別の鉄製 U 字形刃先が（I 57）、刃先を南東方に向け、図 27 の正面を上に向けて出土した（図版 9 - 5）。下場は 51.3m より数 cm 高い。これ以外のものとは異なって、ほとんど傾いていない。後世の攪乱のすぐ際から

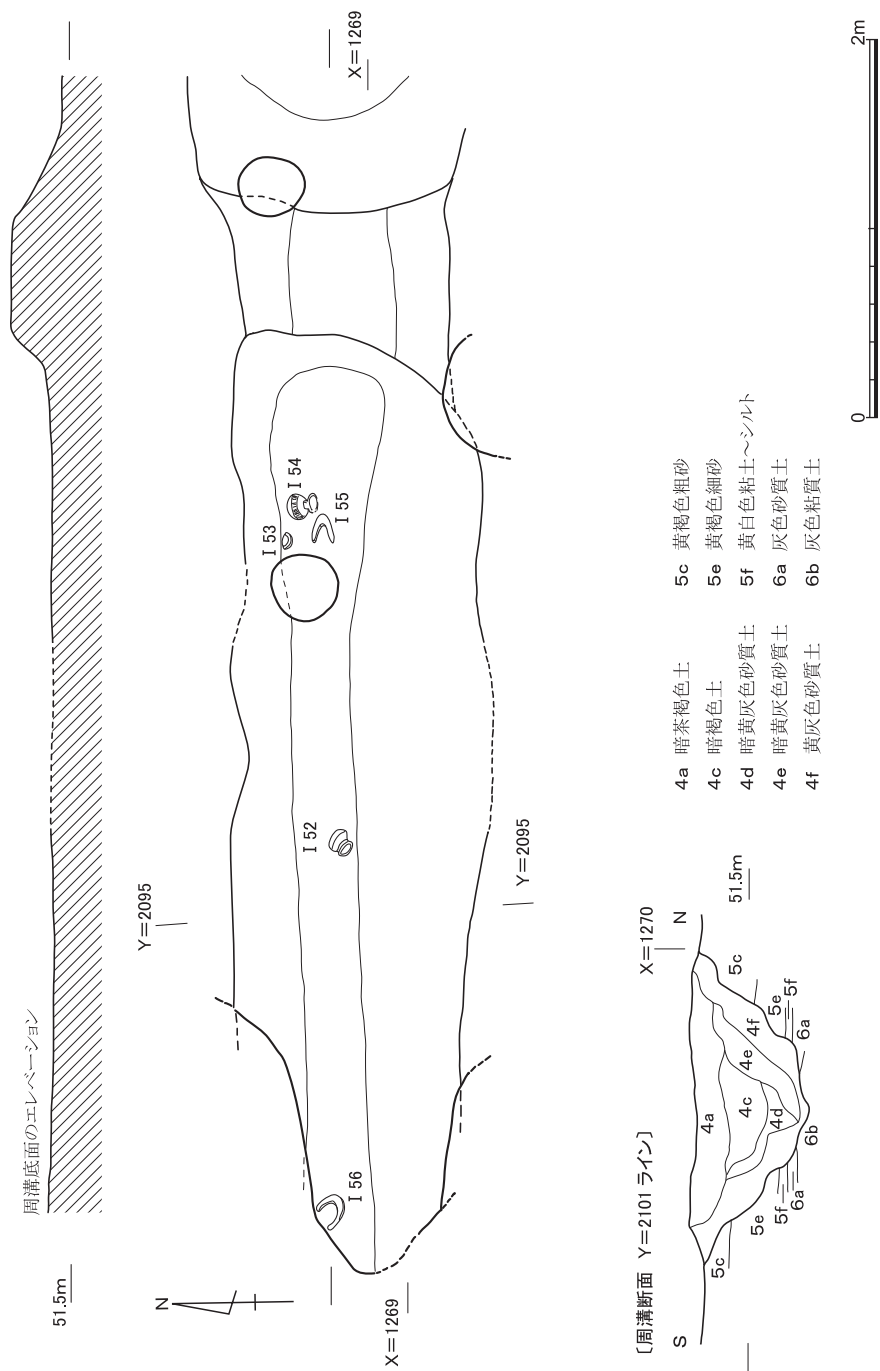


図20 9号墳北周溝の遺物出土状況と層位 縮尺1/40

の出土なので、柄を装着していたかは不明だが、装着して原位置を保っていたとすれば、鋤の場合には、北壁に斜めに引っかからないほどに短い柄だったことになる。

このほか、北の周溝からは、渡り土手の上面よりも標高がやや高い埋土上部で、破片になった1個体分の甕が出土した(I 57)。1 m以上離れた破片が接合している(図版9-6, 図7)。東側から出土した穿孔部を含む縦半分の体部は、穿孔部がおおよそ天を向く方向で出土した。その破片は出土時の下側半分が、おそらく東方向上部からの圧力によって、その場で割れていたが、近くに石などの出土は確認できていない。この部分の6破片も含め、接合できた合計15破片では、破断面の縁辺に摩滅が認められる破片が目立つ。なお、西の周溝と東の周溝からは、遺物が出土していない。

(2) 遺物 (図版17～26, 図21～図27)

古墳時代の遺物は、8号墳と9号墳に帰属する遺物のほかには、後世の地層からの、須恵器杯蓋や5世紀前半の家形埴輪と思われる埴輪の細片で、合計でも数点にとどまる。

8号墳出土遺物 (I 25～I 51) I 25～I 34は、東周溝底面付近から並んで出土した5組の須恵器蓋坏。I 25・I 26は北の1組で、以下、I 27・I 28は西北、I 29・I 30は東北、I 31・I 32は西南、I 33・I 34は東南の組。I 29以外は割れていない。外面の回転篋削りはいずれも時計回り。I 32は「へ」字形の浅い刻線がある。工具が不慮に当たった可能性はあるが、直線的でないのでヘラ記号と思われる。これら5組の須恵器蓋坏は、坏身の口縁立ち上がりや、蓋の口縁部にある程度の変異はあるものの、いずれも、稜はシャープで、法量を考慮すれば、陶邑編年〔田辺1981〕のTK23・47に相当しよう。

I 35は、これら5組の須恵器の直上やや西方から出土した須恵器壺。胴部上半にはカキ目が施され、肩部には自然釉がかかる。口縁は厚手な作りで、底部は、内面に指頭と思われる圧痕が確認できるが、外面はナデ調整で仕上げられている。I 36は、I 30に充満していた土を洗浄した時に確認された針状鉄製品で、部分的に折れ曲がっていると思われる。このほかに、図示していないが長さ10mm弱のものも、同じ蓋杯の内部から出土している。I 37は鉄製刀子。刃先は折れている。茎の片面に繊維の残存を認められる。I 38は埴輪片と共に出土した土師器甕の細片。最大3 cm四方前後の細片約30点が出土したが、すべての破片がやや摩滅している。法量と全体の器形は不明。頸部内面と胴部外面に刷毛目が認められるが、口縁部の内外面とくびれ部以下の胴部内面は撫で調整。

I 39～I 41は南周溝からの出土。I 39・I 40は底面付近から出土した土師器。I 39は、甕の底部から胴下半部で、内面は撫でで、外面は左上がりの刷毛目。約30点の破片が回収

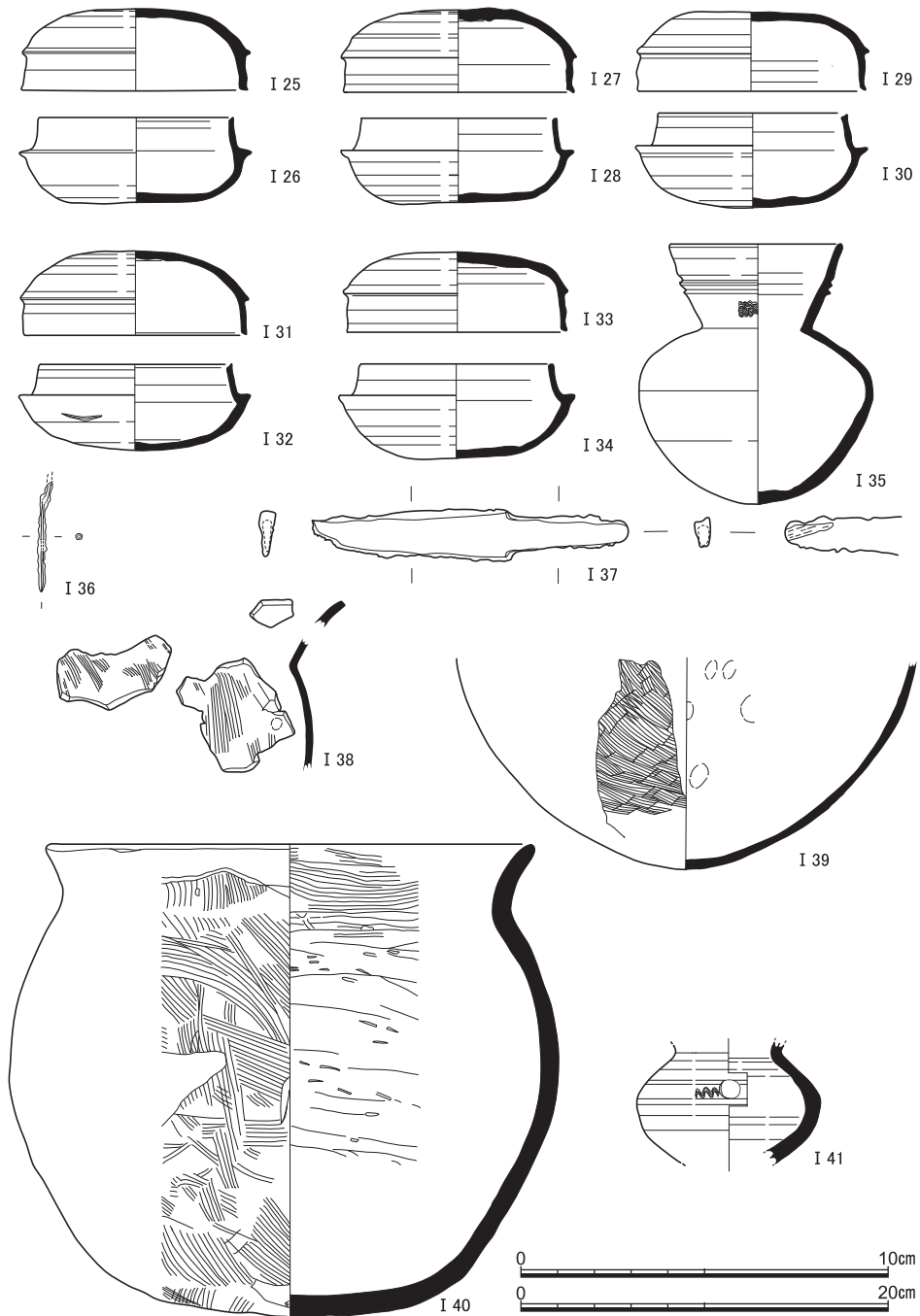


図21 8号墳出土遺物（I 25～I 35, I 41須恵器, I 36・I 37鉄器, I 38～I 40土師器）
I 36・I 37のみ縮尺1/2

され、ほとんどが接合する。内外面だけでなく破断面にも赤色顔料が付着している破片もある。6点は赤色顔料の下部から出土しているが、そのほかは中世の土坑SK4から出土した。I40は壺。外面は、頸部から底部に不定方向の刷毛目を持つが、口縁部は刷毛目を撫で消して仕上げている。朱色を呈する内面は、胴部はケズリで頸部から口縁にかけては刷毛目を認め得る。I41は南周溝の埋土上層から出土した須恵器甕。肩部に自然釉がかかる。底部外面の叩き痕は明瞭で、この甕も陶邑編年のTK23と思われる。このほかに東周溝埋土上層からは、図示していないが、接合する須恵器甕の小破片2点が近接して出土した。外面は格子目叩きだが、内面は青海波文が撫で消されている。

I42～I51は埴輪。この10個体を含め、すべての埴輪は黒斑をもたない。I42～I47は南周溝からの出土で、I42～I44は形象埴輪。I42は人物埴輪で、両腕の形状と出土状況から、馬子と判断できる。残存部で高さは36.9cm。頭頂部は平坦で中心は開放して成形している。両脇腹と両目の穿孔は成形後の割り抜きによる。馬の引き手をもつ格好になっている右手の指先は、器表面が剥離している。I42の破片は、白桃色が基調で、焼成はあまり良くなく、内面や外面が剥離しているものが多い。全体の3割前後は復元できるが、同様の焼成で内面や外面が剥離している未接合の小破片は多い。底部までは接合しないが、焼成や刷毛目のよく似た、円筒埴輪の底部と同様の形の底部破片は、おもな破片分布域からも出土している。また、裾部の可能性のある破片も認められる。

I43は馬形埴輪。残存高55.3cmで、焼成は良く、色調はおもに下半部が橙色を基調とし、上半部は黄白色を基調とする。尻尾や耳は欠損部が多いが、全体で少なくとも6割前後の破片は回収できた。胴体や脚は板巻きの成形で、腰上面の尻繫連結部の穿孔と、両目および腹面の穿孔は、成形後の割り抜きによる。f字形鏡板と剣菱形杏葉、面繫と尻繫は浮帯状に表現するが、鐙は線刻で表現し、鞍褥は刺突を連ねた文様となっている。線刻は鞍橋にも認められる。また、口も線刻で表現する。刷毛目は実測図では一面での表記にとどめたが、前脚の後側と腹面以外は全面に細かい刷毛目を認められる。なお、f字形鏡板と剣菱形杏葉の組合せは、周溝の上層や下層から出土する須恵器の年代観に矛盾しない。

I44は家形埴輪。器高は67.0cmで、焼成は良く、色調は淡橙色を基調とする。9割以上の破片を回収しているが、人や馬と異なり大型破片も多い。器体は板を角筒状に積み上げる成形と思われる。外面は、全面におもに縦方向の細かい刷毛目を認められるが、屋根の上半部の破風板間は横方向の刷毛目である。入母屋の突き出た破風板は、B面は台形だがその対向面は三角形である。なお、断面図は屋根の上半とそれ以下とで合成した。

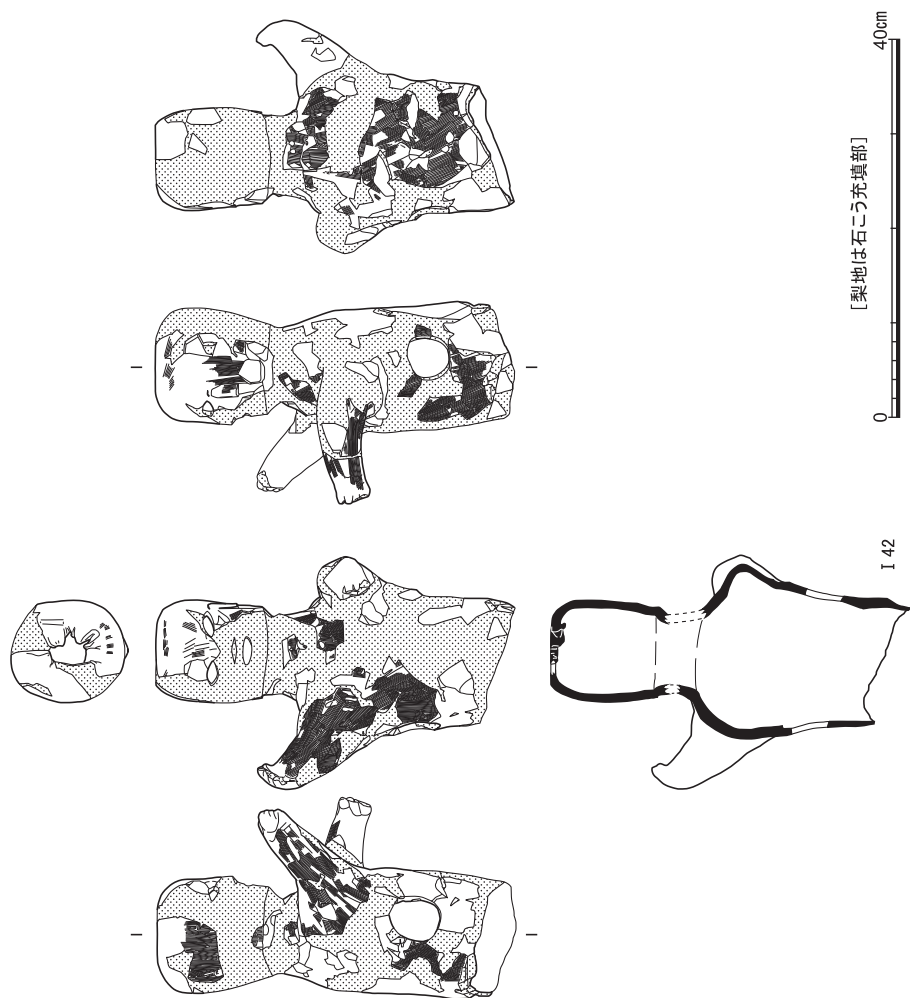


図22 8号墳出土人物埴輪 縮尺1/8

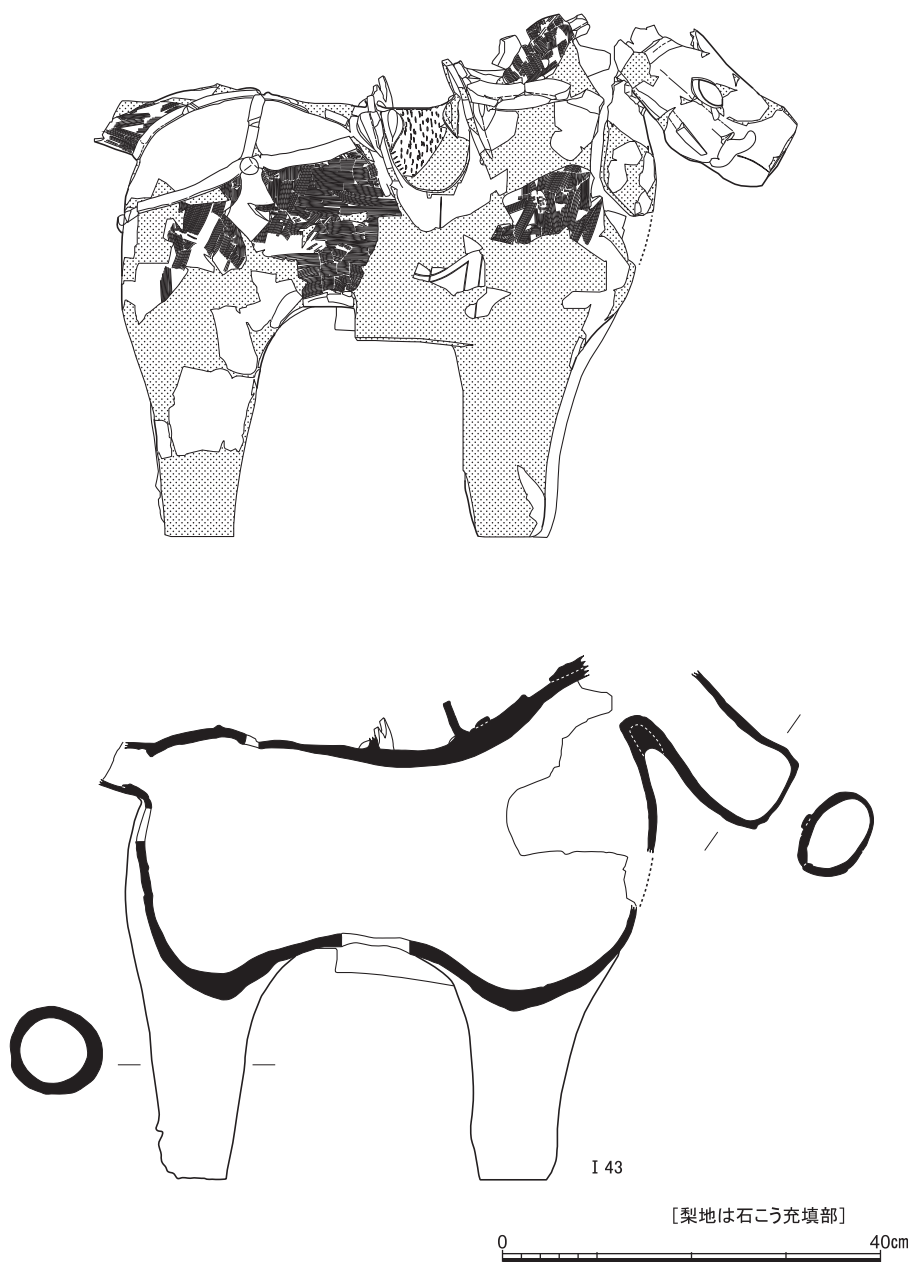


図23 8号墳出土馬形埴輪 縮尺1/8

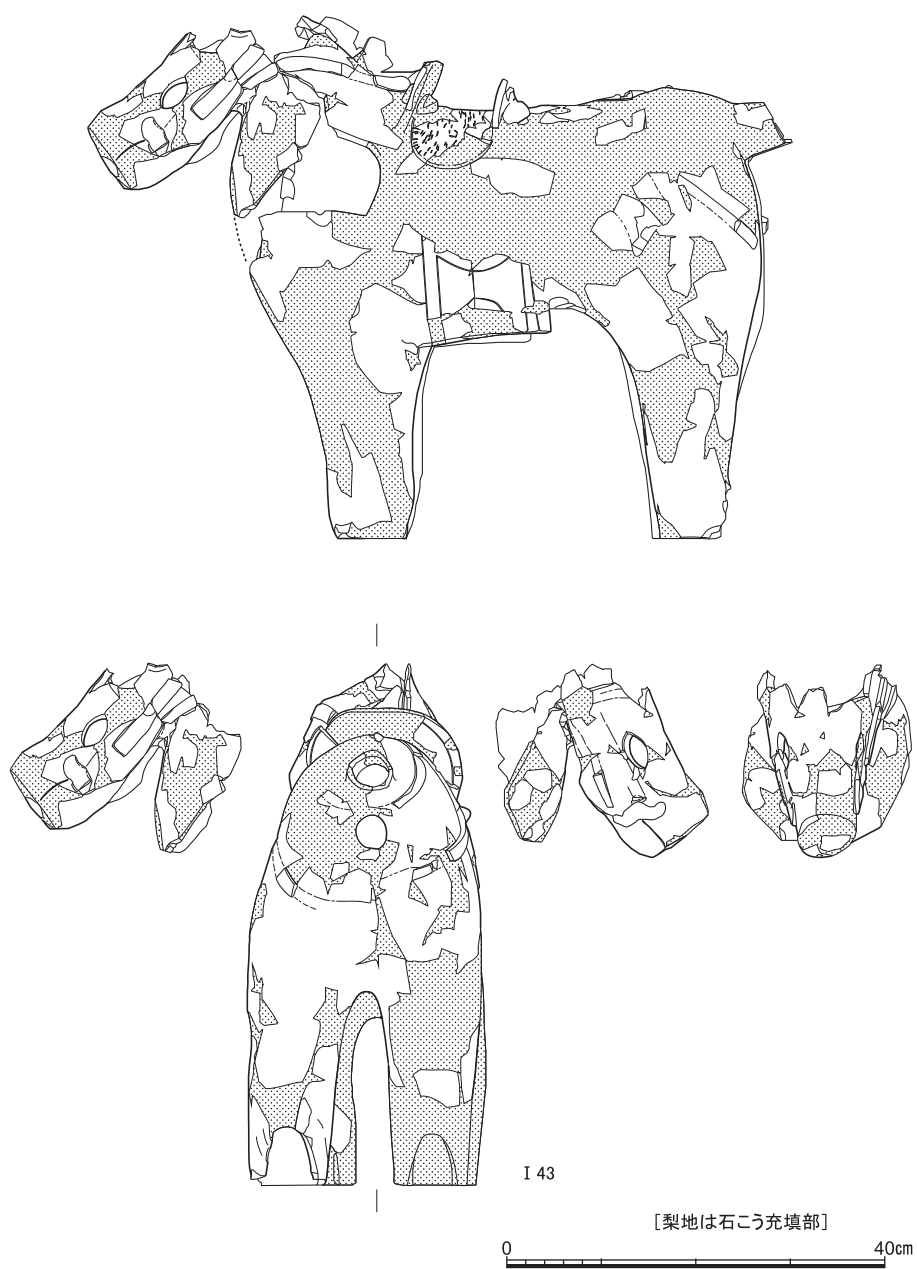


図23 つづき

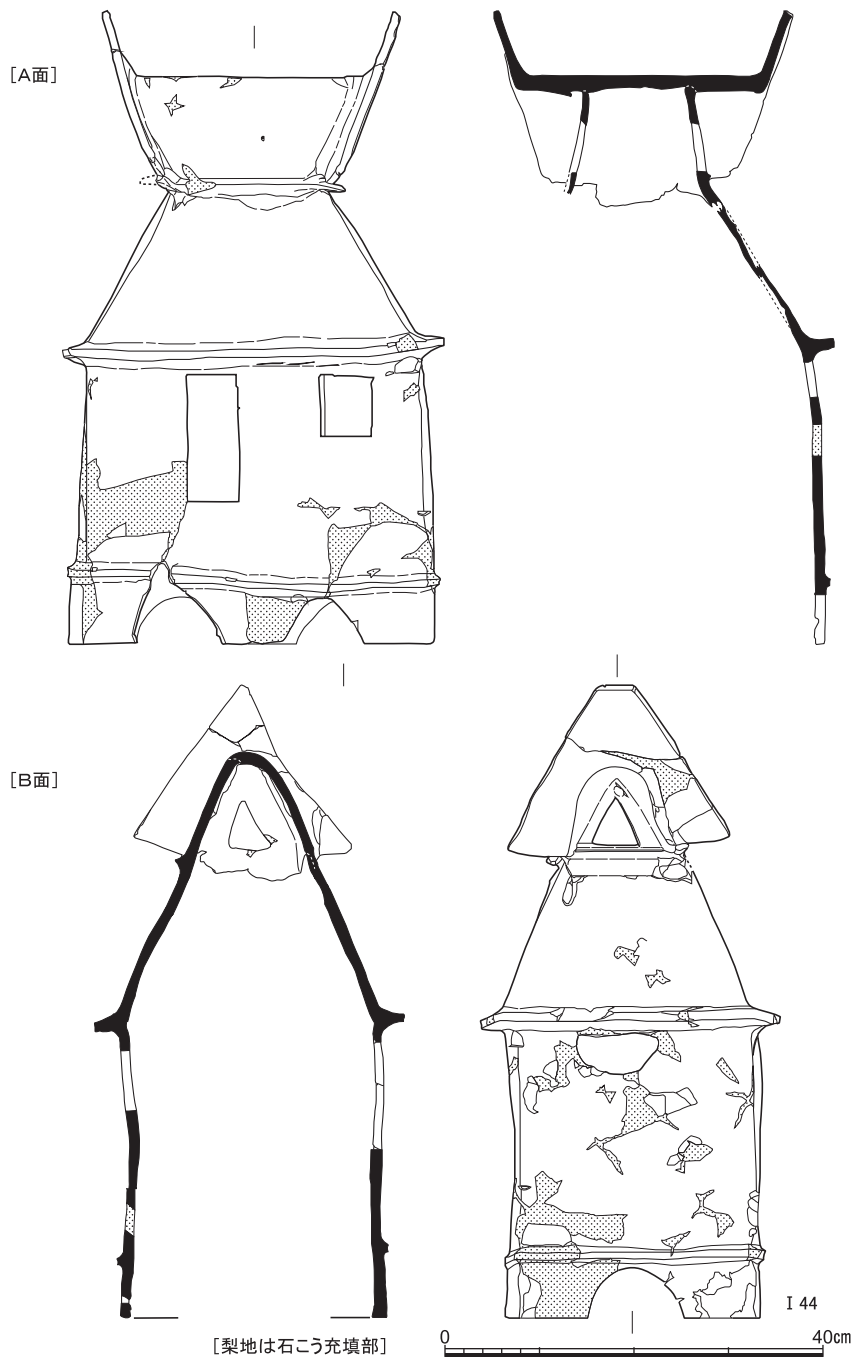


図24 8号墳出土家形埴輪 縮尺1/8

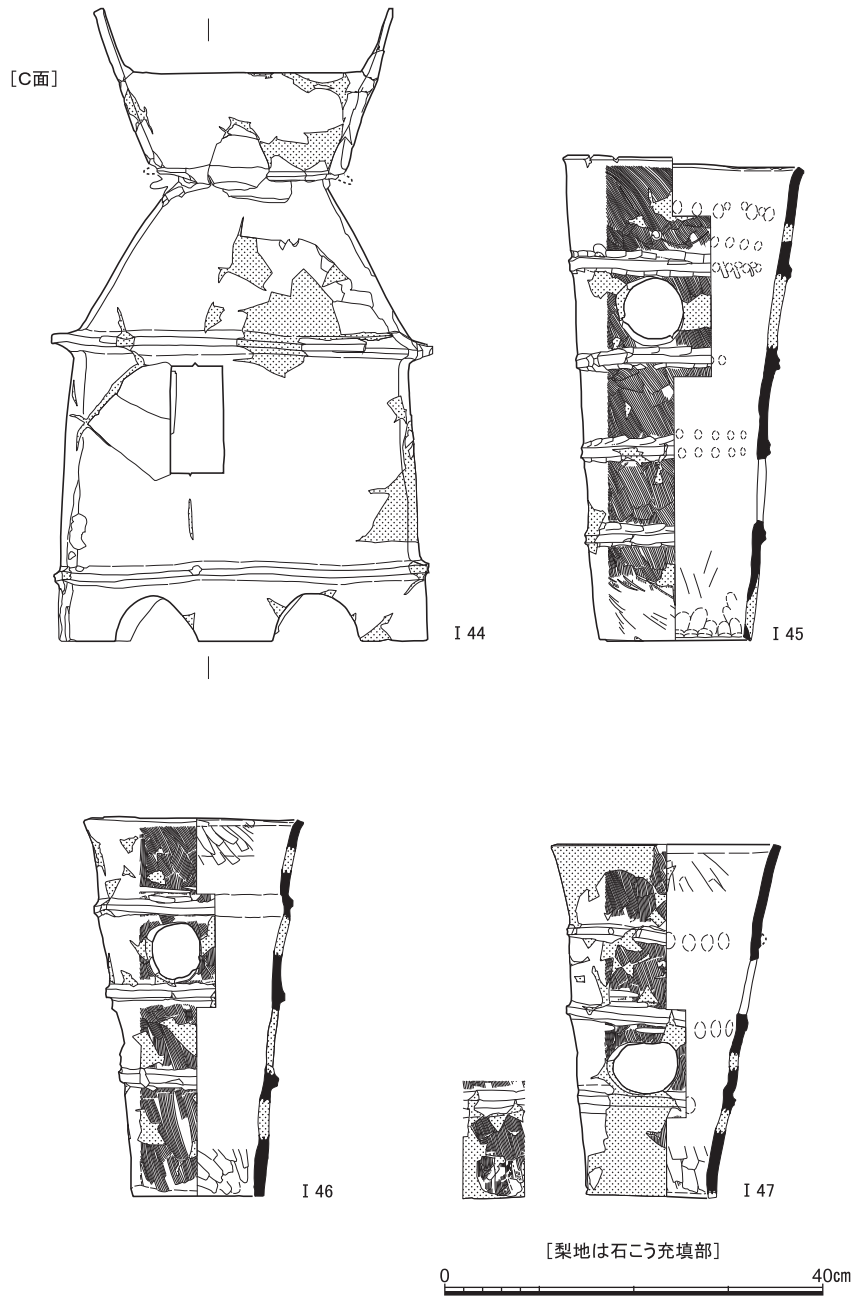


図25 8号墳出土家形埴輪と円筒埴輪（I 44家形埴輪，I 45～I 47円筒埴輪） 縮尺1/8

I 45～I 47は円筒埴輪。I 45は、4条突帯で、器高51.5cmをはかる。最上段に穿孔と刻線による記号をもつ。外面の左上がりの刷毛目はストロークが10cm弱で、底部は整形の当て具痕に切られる。内面は外面刷毛目調整時に当てたと思われる指頭の圧痕が巡るが、底部は整形時に当てたと思われる指の長い圧痕が巡る。I 46・I 47は、突帯が3条で、最上段に記号をもたずに口縁がやや強く開き、器高は前者が40.0cmで後者は37.5cmをはかる。形象埴輪の近くでのみ出土する点で、他の円筒埴輪とは扱いが異なると言える。製作技術的にも出土地点的にも近い関係にあるので一括して特徴を詳述しておく。

外面の刷毛目は、視覚的に左上がりを基調とするが、口縁から15cm辺りまでは右上がりも珍しくない。底部では、鉛直方向も目立ち、そこでの単位は最大で25mm幅を認める。刷毛目は下端まで良く残り、底部接地面に被さるようなストロークも確認でき、また、底部側への砂粒の動きも散見できる。内面は、水分が多い段階の、視覚的に左上がりのナデだが、口縁は乾いた段階で、口唇を3本指でまたぐようなヨコナデ。また、口縁から15cm辺りには内傾接合痕を確認できる。突帯の裏側内面には指頭サイズのくぼみがめぐる。突帯を3本指で押さえながら撫でる時に内側からあてがったものであろう。底部の接地面は数mmのへこみがあばた状に認められ、粒径5mmの角のある花崗岩粒が半分ほど埋まっている箇所がある。こうした特徴から、正位で内傾接合で粘土帯を積み上げて成形し、器面に付く砂粒を容易に払えるくらいに乾燥してから、粗粒の離れ砂の上に正位に置き、底部整形せずに口縁を端面面取りしながら整形したと思われる。なお、透かし孔については、I 47はI 46と異なって歪んだ円形を呈する。

I 48～I 51は東周溝からの出土。I 48・I 49は4条突帯の円筒埴輪で、器高52.5cmのI 48は、最上段に穿孔と刻線による記号を、最下段に半截竹管状工具による記号を、それぞれもつ。I 49は器高47.5cm。製作技術的にはI 45と同様である。I 51は突帯が5条以上の円筒埴輪。残存長で、49.5cm。4段目と5段目の透かしのあり方から、5条突帯と思われる。最上段には穿孔と刻線による記号を確認できる。刷毛目の外観は櫛歯状ではないので、ほかの個体とは容易に識別できる。この刷毛目をもつ個体は、同じ出土エリアからのもう1個体にとどまる。I 50は朝顔形円筒埴輪で、器高は57.5cm。おもな色調は黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。この個体の刷毛目の外観も、櫛歯状にはなるもののほかの個体とは異なるので、識別は容易で、類似した刷毛目の個体は出土していない。

8号墳からは、図示した10個体のほか、朝顔形埴輪が4個体は出土し、円筒埴輪は23個体前後出土している。形象埴輪と同様の細かい刷毛目を確認できるのは、焼成の良くない

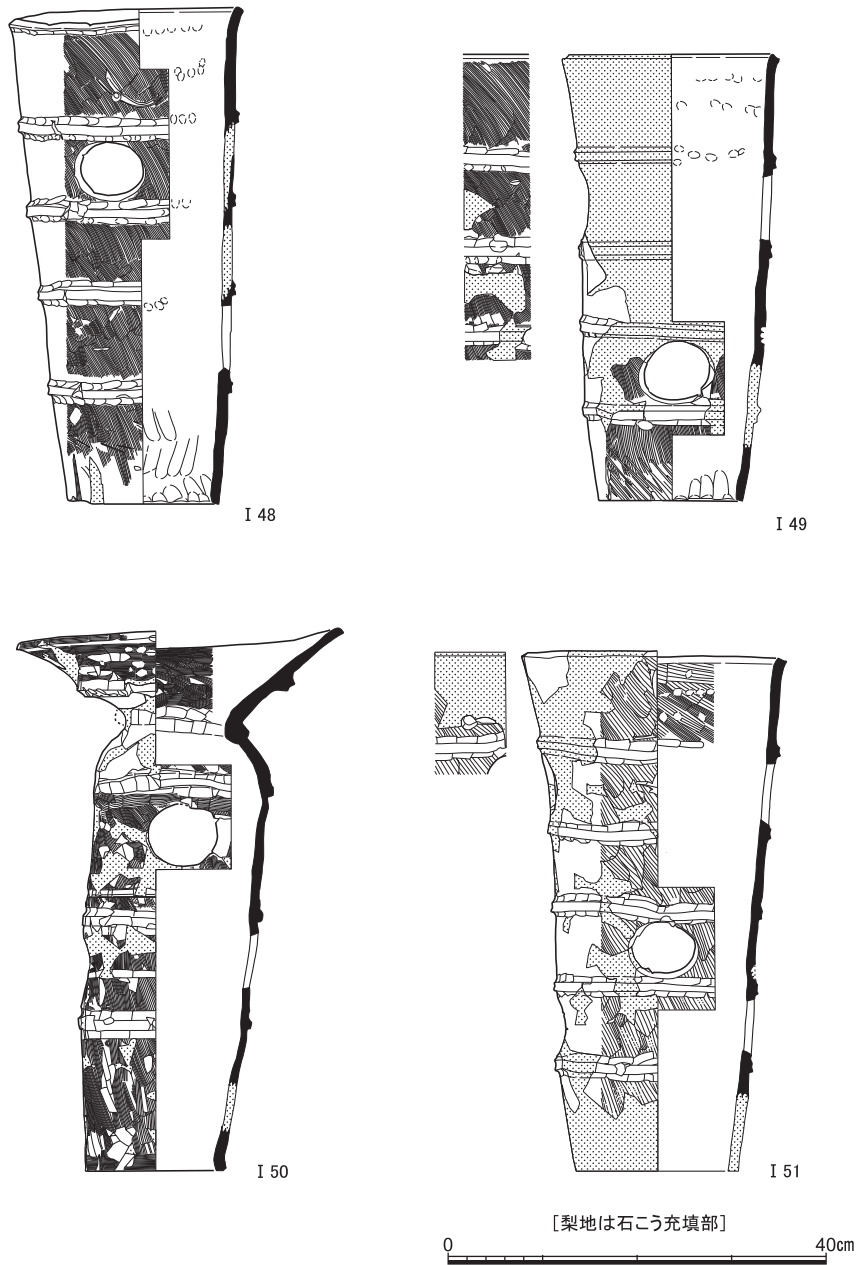


図26 8号墳出土円筒埴輪（I 48・I 48・I 51円筒埴輪，I 50朝顔形埴輪） 縮尺1/8

個体に限られるようである。穿孔と刻線による記号は、円筒埴輪では3条突帯のものにはみられず、朝顔形埴輪では、I 50にはみられないがそのほかの個体にはくびれ部の直下の段に確認できる例が複数ある。また、放射状の割れを確認できる個体も複数あり、その中には、収れん部の内面側に器表面の剝離があるものも含まれる。

9号墳出土遺物（I 52～I 57） I 52～I 56は北周溝の底面近くから出土した。単独で出土したI 52は、橙色を呈する土師器の小壺。手づくね成形のような粗雑な作りで、内外全面を撫でつけ、口縁部のみが回転撫で。I 53は、I 54・I 55とともに出土した須恵器杯身。回転篋削りは時計回りで、稜はシャープ。TK 23・47と見られる。I 54は須恵器の大型の甕。口縁は、出土時に西側だったおよそ半分を欠き、残存する口縁もおもに内側からの連続小剝離を被っている。底部は、撫でで仕上げているがかすかに叩きを認められる。肩部にはほぼ全面に自然釉がかかる。I 55・I 56は、鉄製U字形刃先。ともに、断面は上端部が横V字形で中央部はY字形である。周溝の西辺から単独で出土したI 56は、左右非対称で、一方の刃部側縁が大きく減っている。使用によるものだろう。I 57は、北周溝の埋土から出土した須恵器甕。I 54と同様に口縁端部をつまみ上げ、肩部に自然釉がかかる。底部の外面に叩き痕、内面に指頭圧痕を確認できる。TK 23と見られる。

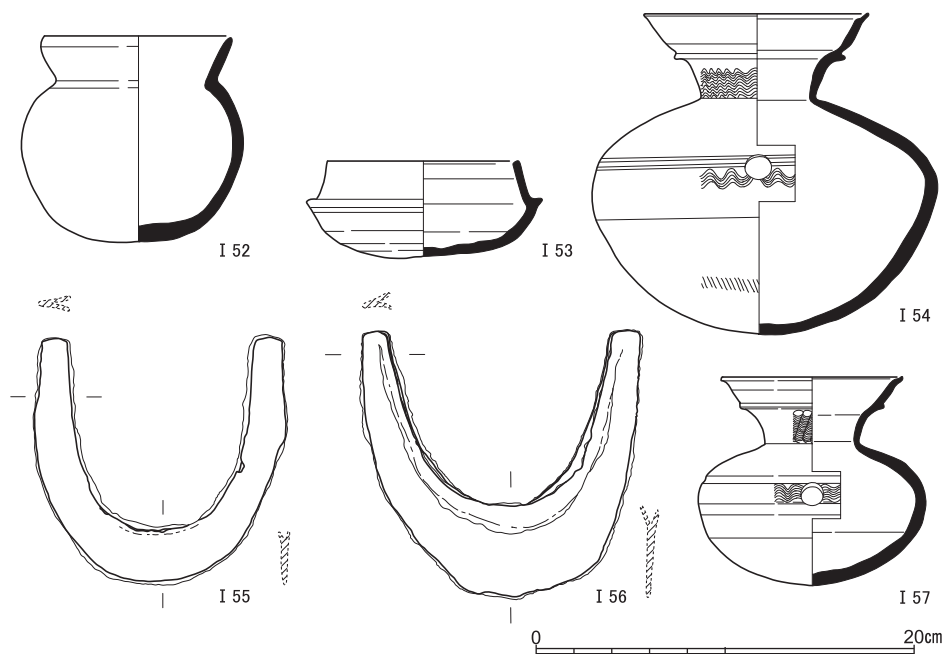


図27 9号墳出土遺物（I 52土師器，I 53・I 54・I 57須恵器，I 55・I 56鉄器）

6 中世の遺跡

(1) 1期の遺構（図版3-2，図28）

中世の遺構にかんしては，1期と2期にわけて説明していく。ちなみに，1期は1段撫で手法D類，2期は1段撫で手法E類が主体を占める時期となり，前者は13世紀代，後者は14世紀代におおむね相当する。

溝 SD4は調査区西辺，Y=2080のすぐ西側をはしる南北溝。北端は井戸SE1・東西溝SD3によって切られ，南端は調査区外へと続いている。X=1274付近より南側が落ち込んでおり，もっとも深いところで0.7m弱をかぞえる。一方，その北側はもっとも浅いところで0.1m弱となっている。

SD5はSD4の西側に位置する溝で，真北より約20°西に振れている。南端の深さは約0.4mであって，そこから北に向かってだんだんと浅くなっている。

井戸など 調査区南西隅では，集石SX21の下部にSE9が確認された。掘形は径1.5mほどの円形を呈し，検出面からの深さは約0.9mをはかる。水溜として用いられたと考えておきたい。底部外面に墨書を有する華南三彩盤が1点出土しており，注目される。

SE9から3mほど南東のところにSE12が見つかった。SE8によってその南端が破壊されている。円形のくぼみの部分が存し，検出面からの深さは0.7mとなる。これもまた水溜であった可能性を指摘しておきたい。

調査区北東隅には，SE11が検出された（図版10-1）。当初，不整円形の輪郭が認められ，その内側を掘り進めていくと，深さ0.4mのあたりで灰色粘質土がひろがっていた。ただし，その中央付近で径1mほどの円形の部分が残し，そこからおよそ2.2mの深さのところで掘り終えた。底部の標高は48.78mをはかる。素掘りの井戸とみなしてよかろう。

土 坑 出土遺物から，SK1～3，SK10・11がこの時期に属する土坑と考えられる。それらのうち，SK10はSE11のほぼ北側に位置する隅丸方形の土坑。検出面からの深さは約0.5mをかぞえる。

土 器 溜 調査区中央からやや東よりのSX4，そのほぼ北側に近距離で確認された調査区北端のSX42～44，調査区中央南辺のSX46（図版10-2）がこの時期の土器溜に相当する。これらのうち，SX46からの土師器の出土量がもっとも多い。

遺 物 溜 調査区中央のあたりから検出されたSX45は，土師器・須恵器・青磁・石鍋の破片がかたまっていた。D₆類の土師器皿1点が確認されているので，この時期のも

中世の遺跡

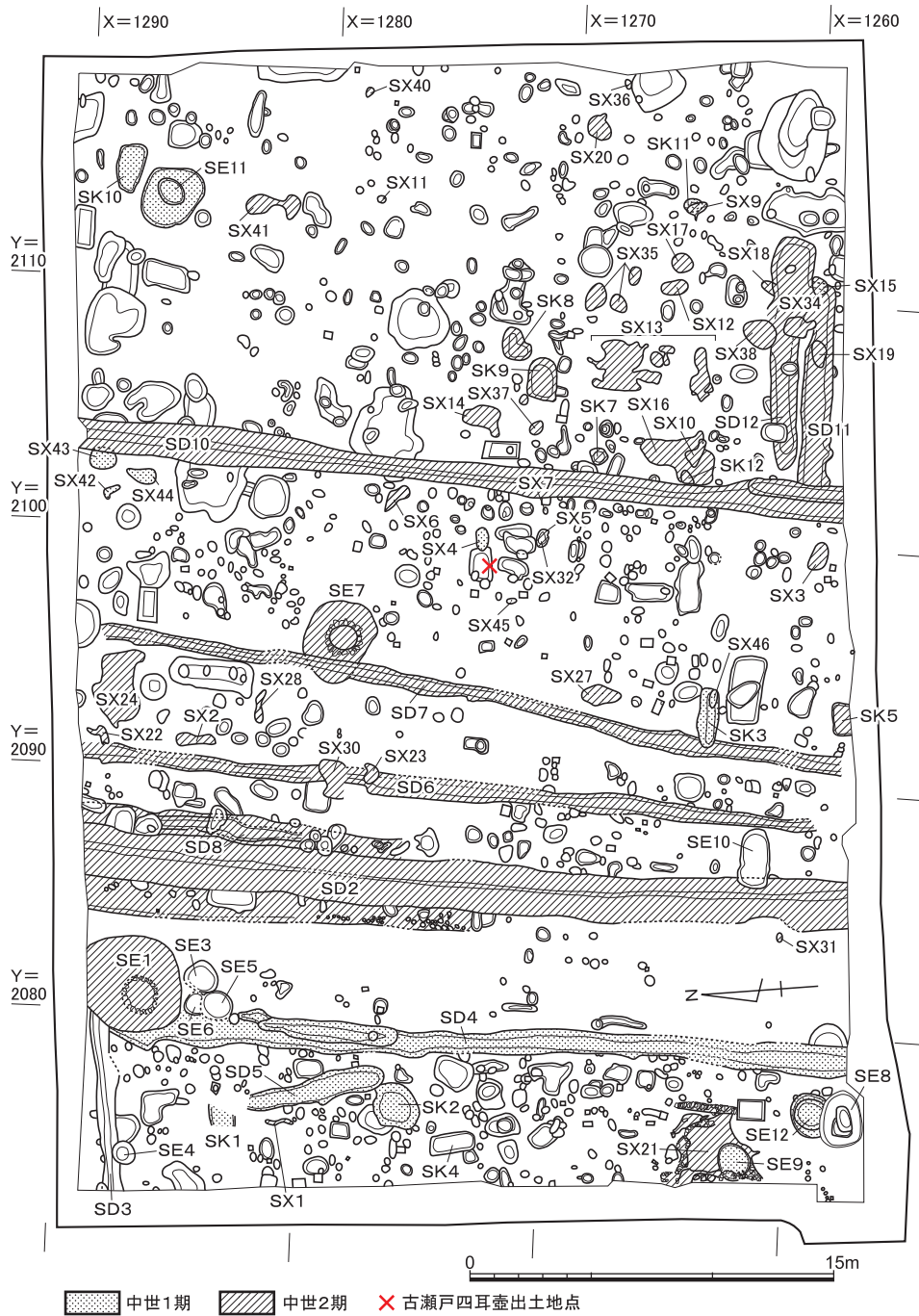


図28 中世の遺構 縮尺1/300

のであると推測しておきたい。

(2) 2期の遺構（図版3-2，図28）

溝 調査区の西から，SD2・8・6・7・10の南北溝，調査区南東部のSD11・12の東西溝が検出された。SD8をのぞく南北溝はいずれも北端・南端ともに調査区外へと続いている。

SD2は検出面から底の部分までは北辺で約1.2m，南辺で約0.7mをはかる深い溝となる。ただし，調査区北端から中央付近にかけて，その東側に0.8～1.2m，西側に0.8～1.4mの幅の浅いくぼみがひろがっていた（図版10-3）。なお，東側の浅くへこんでいる部分から，SD8が確認されている。

SD10は断面がV字形を呈する溝。検出面からの深さは，北辺で約0.9m，中央付近で約0.8m，南辺で約0.3mと，北から南に向かってだんだんと浅くなっている。出土した土師器のうち，残りのよいものはD類が中心となる。ただし，E類の土師器皿の破片も多くみうけられた。

なお，本調査区の北に所在する220地点から，Y=2100に沿って，北端・南端とも調査区外にのびる南北溝SD5がみつまっている。断面がすどいV字形で，室町時代中期（15世紀）のものであるとされる〔伊藤1999a〕。SD10はこのSD5に接続する可能性が存しているといえる。しかしながら，220地点のSD5の南端はY=2100のすぐ西側に位置しており，結局のところ，SD10とは直線的にはつながらない。したがって，別個の溝であるとも推測され，いずれが妥当かは後日の調査をまたなければなるまい。

井戸 調査区北西隅のSE1，中央あたりのSE7がこの時期のものに相当する。

SE1は円形の石組井戸で，掘形は径約4mの大きな円形を呈する。石組は高さが3mほど残存していた（図版10-4）。井筒の下部には2段の方形木枠が確認され，その下からは水を溜める桶を設置していたと思われる円形のくぼみが検出された。そのうちからE₁類の土師器皿1点が出土している。井戸底の標高は46.32mである。

SE7も同じく円形の石組井戸で，長軸約3.5m，短軸約2.5mの楕円形の掘形をもつ（図版10-5）。その埋土よりE₃類の土師器皿などがみつまっている。井筒の下部から2段の方形木枠が検出され，その下には曲物をおいていたとみられる円形の水溜がともなっていた。井戸底の標高は47.76mをはかる。

土坑 調査区中央南壁際のSK5，南東部のSK7～9がこの時期のものにあた

る。

S K 5 は方形の竪穴状の土坑で、調査区外へと続いている。深さは約0.6mをはかる。その埋土には赤褐色を呈する粘土のかたまりが多く含まれていた。

S K 7 は円形の土坑で、検出面からの深さは0.3mほどとなる。拳大の石がつめられており、そのあいだから常滑焼および備前焼の甕の破片がとりあげられた。少なくとも2個体分が認められる。

S K 8 は不整円形の土坑で、深さは約0.4mをはかる。その埋土からはあわせて61枚の銭貨が出土した。4つの文字がわかるものは55枚で、その内容は唐銭である開元通宝が5枚、古くは至道元宝、新しくは政和通宝の計20種類の北宋銭が50枚となる。

S K 9 は楕円形の土坑で、検出面からの深さは0.5mほどとなる。その埋土には拳大の石がまばらに含まれていた。

土器溜 調査区北西部のS X 1, 中央北辺のS X 2・22・28(図版12-1), 中央南端のS X 3, 中央付近のS X 5・6・32, 東辺のS X 11(図版11-2), 中央やや西寄りのS X 23・30(図版11-3), 南東部のS X 34(図版12-2)・36(図版11-4)・37, 北東部のS X 41(図版12-3)が相当する。

S X 1 およびS X 36は、土師器皿が重ねおかれた状態で検出された(図版10-6・11-4)。また、S X 2にかんしては、当初ひろがっていた土師器(図版11-1)をとりあげていくと、最終的には平面が東西約0.7m, 南北約1.5mの長方形の範囲で、深さが約0.4mのところまで土師器がつまっていたのが確認された。

陶器溜 調査区南東部のS X 9・10・12・15・16・17(図版11-5)・18・20・35および南西部のS X 31が属する。いずれも常滑焼ないしは備前焼の甕の破片がかたまっていた。けれども、完形に復元することはすべてかなわなかった。口縁部の破片などから、S X 9・12・15~18・31・35には1個体分、S X 10には2個体分(図版13-1), S X 20には3個体分(図版11-6)が少なくとも含まれていることが知られる。先に述べたS K 7出土遺物、以下に説明するS X 13の埋甕などもあわせて、南東部に甕の出土が多いことは、邸宅の存していたことをうかがわせ、すこぶる興味深い。

遺物溜 調査区中央北端に位置するS X 24は、土師器・陶器・瓦器・青磁などの遺物や礫がひろい範囲にわたってかたまっていた。

埋甕など 埋甕およびその周辺の石敷などをS X 13とした。

掘形が楕円形の穴を作り、東寄りに常滑焼の甕を正しい位置にすえて、そのまわりに土

を入れている。甕は全体にわたって割れ目が生じていた（図版13-3，図30）。甕の西および南西で、口縁から0.2mほど下のところに、E類の土師器皿の破片を主体とする土器溜が確認された（図版13-2，図30）。甕の口縁直上には焼土がひろがっており、それをとりのぞくと甕をかこむように礫が検出された（図版14-1，図29）。埋甕と石敷とは一体的にもうけられた蓋然性が高い。なお、橙褐色のかたまりとなる焼土は、甕のなかの茶褐色粘質土・灰茶褐色砂質土のうちにも混ざっているのが認められた。

埋甕の底部直下から9枚の銭貨がみつまっている。4つの文字がわかるものは3枚で、北宋銭である皇宋通宝・元豊通宝・元祐通宝となる。甕の底部にも割れ目がみうけられ、それら銭貨はもともとその内部底面にあったとも考えられる。換言すると、裂け目から外部に出た可能性も残されているといえる。それゆえに、埋甕は渡来銭を貯わえるために用いられたものであったとも想定されるものの、はっきりとした根拠を提示することができず、残念ながらその使われ方は未詳とせざるをえない。

ちなみに、本調査区の東隣に位置する261地点の北西隅から、常滑焼の甕を正位で埋めたS X38が検出されている。ただし、その時期にかんしては、甕の型式をふまえ、13世紀前半であると解されている〔千葉・阪口2005〕。

集 石 調査区南西隅からS X21が確認された（図版14-2）。

東端では、石がほぼ南北に一列にならべられている。その石の大部分は長軸が20cm、短軸が10cmほどのものとなって、長軸が東西方向にすえられている。そうした石列の途中からは、拳大から幼児頭大の石が積みあげられているのがみうけられた。その深さは、上段の石の上面から下段の石の下面まで約0.5mとなる。一方、南西部分には、拳大から幼児頭大ほどの石がかたまっており、西から東に向かって低くなっている。南西隅の石の上面から、その北東に1.5mくらいはなれて位置する石の上面までの深さが約0.3mをはかる。

本調査区の東に接する261地点からは、S X26・35・60というこの時期の3基の石室が検出されている。石室にかんしては、「地面を掘りくぼめ、四周に礫を壁状に配置した遺構」であると説明されている〔千葉・阪口2005〕。

S X21は長方形の掘形を呈していた可能性が高く、石が重ねおかれている点をも考えあわせると、石室であったのではないかと推察される。そうであるならば、中央付近に散在している石は、四方の石積からくずれ落ちたものということになろう。その範囲は南北が4mほど、東西が3m強になるかと思われる。

図28に示したもののうち、調査区南東部のS X14・19・38、中央やや南側のS X27、東

中世の遺跡

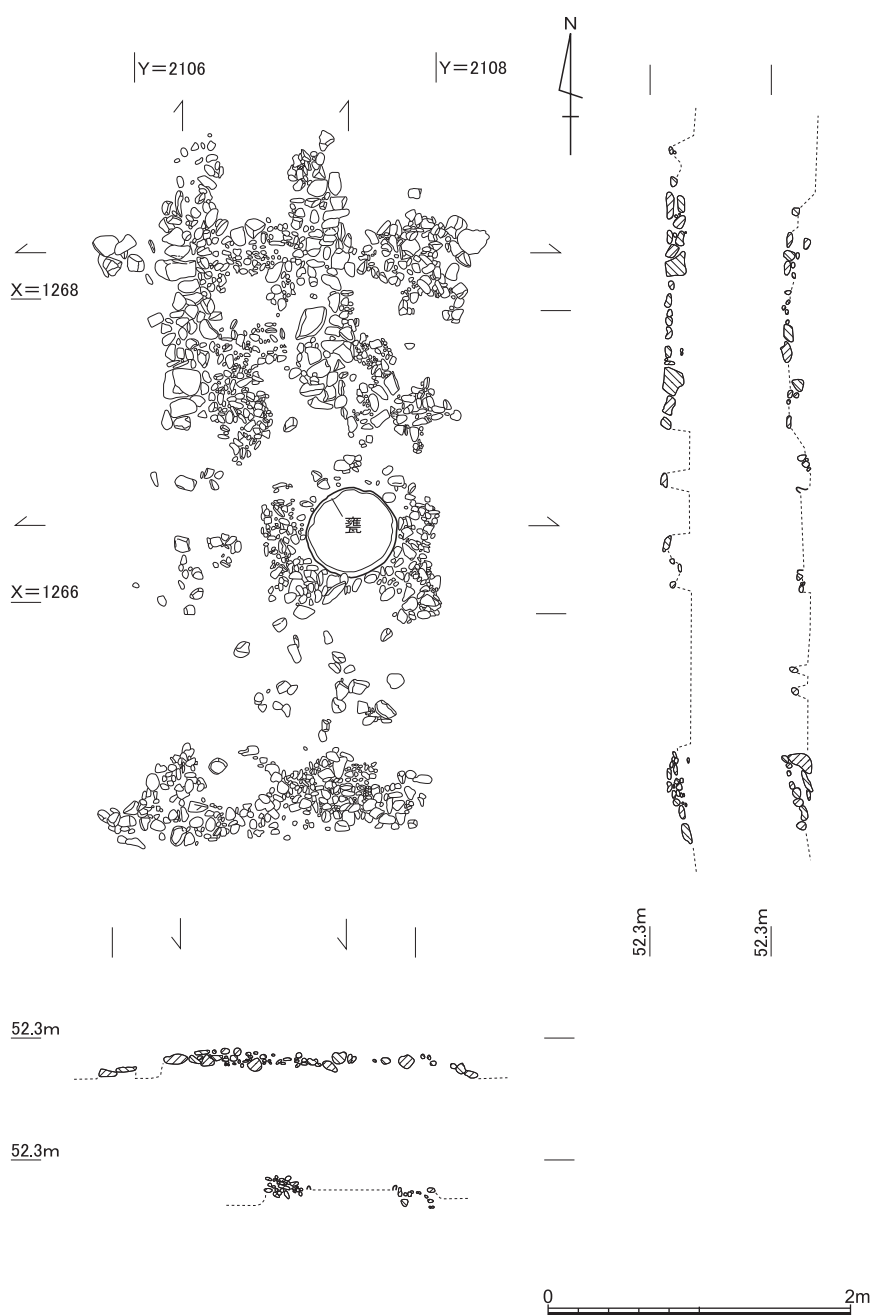


図29 S X13埋甕および石敷 縮尺1/50

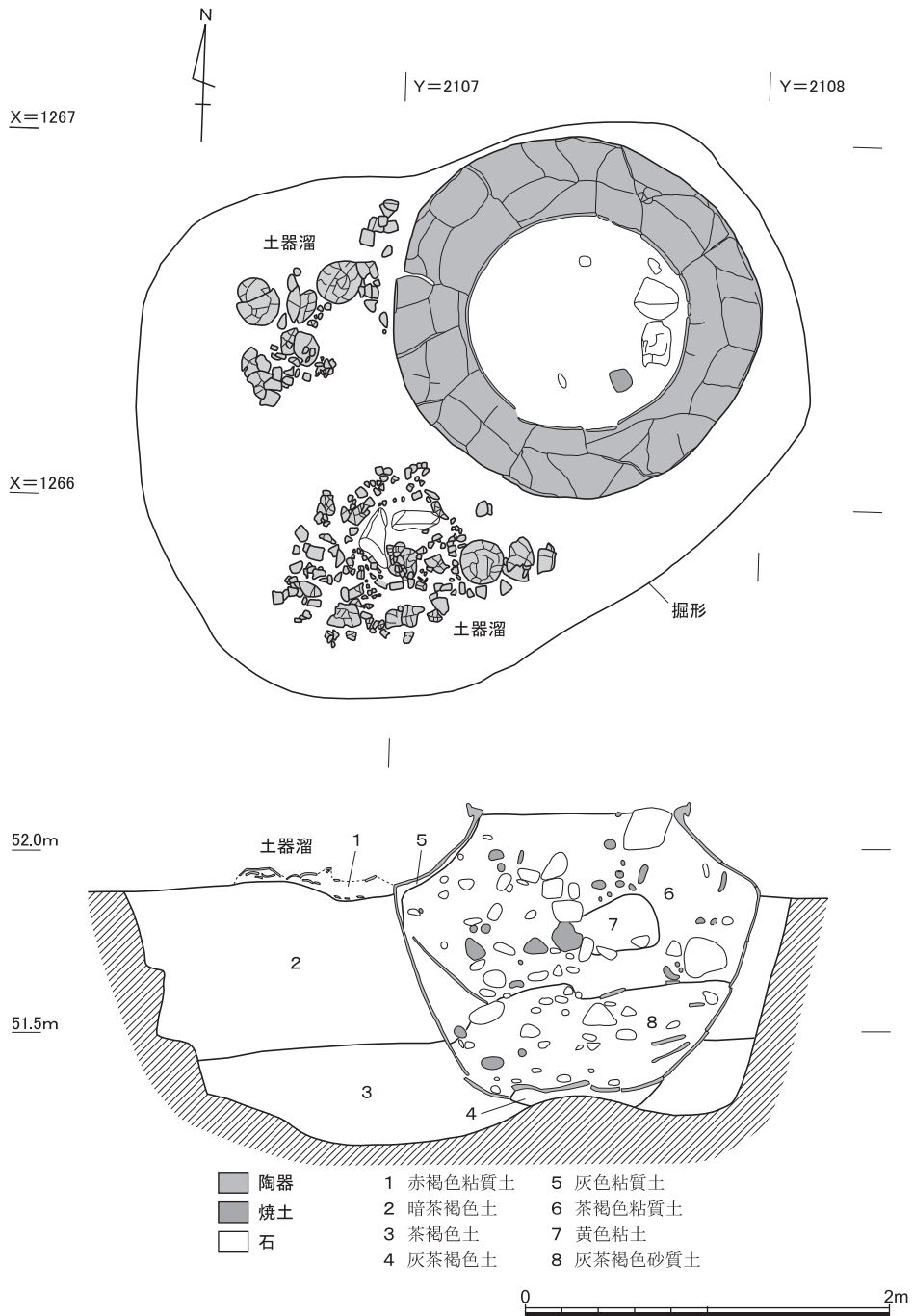


図30 S X13埋甕および土器溜 縮尺1/20

端中央付近のSX40が集石となる。SX27がいつ作られたのか判然としないものの、それ以外のものは、出土遺物にもとづくと、この時期に属すると考えられる。

本調査区では、SD2の南1/3くらいの上において南北に細長くおかれたものなど、多くの集石がみついている。けれども、それらの大半は時期を分明にすることができず、かつ図示すると雑然となってしまうので、割愛することにした。

(3) 1期の遺構の遺物（図版27，図31～35）

SD4出土遺物（I58～I82） I58～I63は土師器小皿。I58～I60はD₂類，I61はD₃類，I62・I63はD₆類。I64～I74は土師器皿。I64は2段撫で手法のC₅類，I65～I67は乙訓在地形，I68はD₂類，I69はD₃類，I70は乙訓在地形，I71・I72はD₅類，I73・I74はD₆類。乙訓在地形の土師器皿は、口縁部外面に1段の横撫でをほどこし、その端部をやや外反させる〔京都市埋文研2004a pp.164-65〕。I75は灰白色を呈する土師器皿。体部外面には回転篋削り，底部外面には回転糸切りの痕跡が認められる。

I76～I79は瓦器鍋。いずれも口縁部が2段に屈曲し，端部に面をもつ。I80は瓦器盤。口縁端部が内側にやや出ている。I81は灰色を呈する須恵器すり鉢。口縁端部が上方に伸び気味となる。I82は青白磁の合子蓋。

SE9出土遺物（I83～I100） I83～I88は土師器小皿。I83は乙訓在地形，I84～I87はD₂類，I88はD₆類。I89・I90はD₂類の土師器皿。I91～I93は白色系の土師器小椀。I94～I96は白色系の土師器椀。I97は土師器羽釜。口縁部外面には横撫でをほどこし，端部を外側に丸く折り曲げている。鋳部から下の部分に煤が付着している。

I98は灰白色を呈する須恵器すり鉢。体部は厚みを減らしながら直線的に斜め上方に伸び，口縁部は玉縁状に肥厚している。底部外面に回転糸切り痕が認められる。

I99は華南三彩盤。口径は推定33cm，器高は8.7cmとなる。体部内外面および口縁部内外面には緑釉が，底部内面には緑釉とともに褐釉・黄釉がかけられている。底部外面は露胎で，浅黄橙色を呈する。体部内面下半には2条の沈線がめぐり，底部内面には1本の花が刻まれているものと思われる。体部は丸みをおび，口縁端部は玉縁状となる。13世紀末から14世紀初頭ごろに作られたと考えられる。

底部外面には，中央に近いところに2文字，端のあたりに2文字の墨書が確認される。前者の1文字目は「福」，後者の1文字目は「升」の可能性が高い。

I100は青磁椀。オリーブ黄色を呈し，底部外面を露胎とする。

SE11出土遺物（I101～I103） I101は「て」字状口縁手法のB₂類，I102・I

103はC₃類の土師器皿。

S K 1 出土遺物 (I 104～ I 106) I 104はD₂類の土師器小皿。 I 105・ I 106は白色系の土師器碗。前者の口縁部分には「、」の墨痕が認められる。

S K 2 出土遺物 (I 107・ I 108) I 107はD₄類の土師器小皿。 I 108はD₃類の土師器皿。

S K 3 出土遺物 (I 109～ I 118) I 109～ I 112はD₃類の土師器皿。 I 113～ I 115はC₅類, I 116～ I 118はD₃類の土師器皿。

S K 10 出土遺物 (I 119～ I 135) I 119～ I 121はC₃類, I 122はD₅類の土師器小皿。 I 123はC₃類, I 124・ I 125はC₅類の土師器皿。 I 124には口縁端部に煤がわずかに付着している。

I 126～ I 130は瓦器小碗。いずれも口縁内端部に段をもつ大和型で, 口径・器高はほぼ同じとなる。口縁部外面に横撫で, 体部内面に圈線磨きがほどこされている。高台は断面三角形の低いもので, いずれも貼り付けられている。第Ⅲ段階E型式に相当し, 13世紀末ごろに作られたと考えられる〔森島2005〕。

I 131～ I 135は山茶碗。 I 131・ I 132は小碗で, 口縁部がわずかに外反する。 I 132は内面に自然釉が付着している。 I 135もまた小碗で, 器壁が厚い。内面に自然釉が付着し, 底部外面に糸切り痕が認められる。 I 133・ I 134は小皿で, 底部外面に糸切り痕が残る。

S K 11 出土遺物 (I 136・ I 137) I 136・ I 137は乙訓在地形の土師器皿。

S X 4 出土遺物 (I 138～ I 140) I 138・ I 139はD₃類, I 140はD₄類の土師器小皿。

S X 42 出土遺物 (I 141～ I 143) I 141・ I 142は乙訓在地形の土師器皿。 I 143は土師器受皿。

S X 43 出土遺物 (I 144～ I 149) I 144はD₂類, I 145はD₆類の土師器小皿。 I 146・ I 147は乙訓在地形, I 148・ I 149はD₅類の土師器皿。

S X 44 出土遺物 (I 150～ I 154) I 150・ I 151は乙訓在地形の土師器小皿。 I 152～ I 154は乙訓在地形の土師器皿。

S X 46 出土遺物 (I 155～ I 200) 口縁部が1/6以上残る土師器をひろいだしたところ, C類・D類の皿が140点存し, そのうち小皿が97点, 受皿が2点含まれていた。それらのうちから19点を取りあげて図に掲げた。

I 155～ I 159はC₃類, I 160～ I 162はC₄類, I 163～ I 165はC₅類, I 166～ I 168はD₂類, I 169～ I 175はD₃類, I 176・ I 177はD₅類, I 178・ I 179はD₆類の土師器小皿。

中世の遺跡

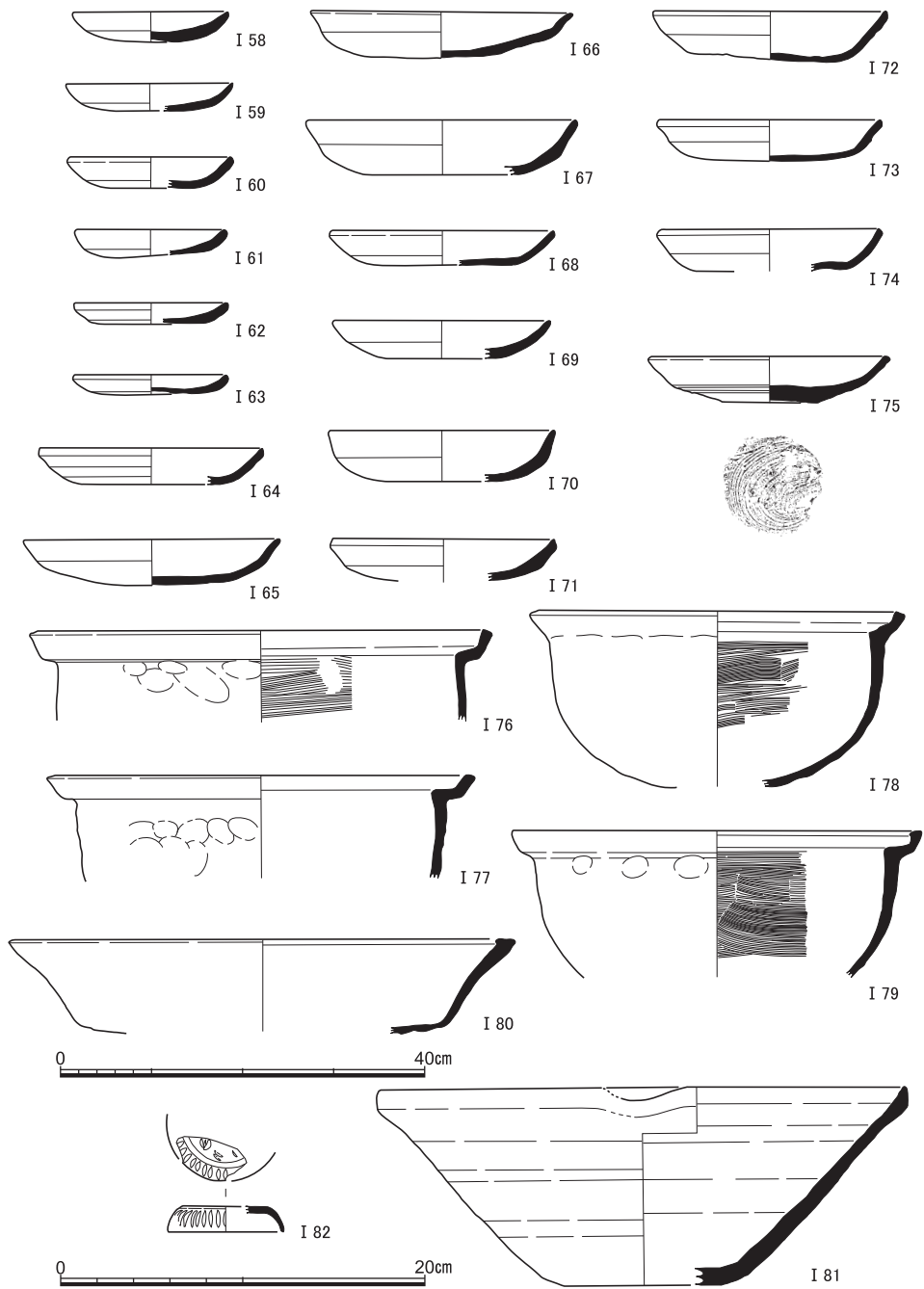


図31 SD4出土遺物（I 58～I 75土師器，I 76～I 80瓦器，I 81須恵器，I 82青白磁） I 80縮尺1/8

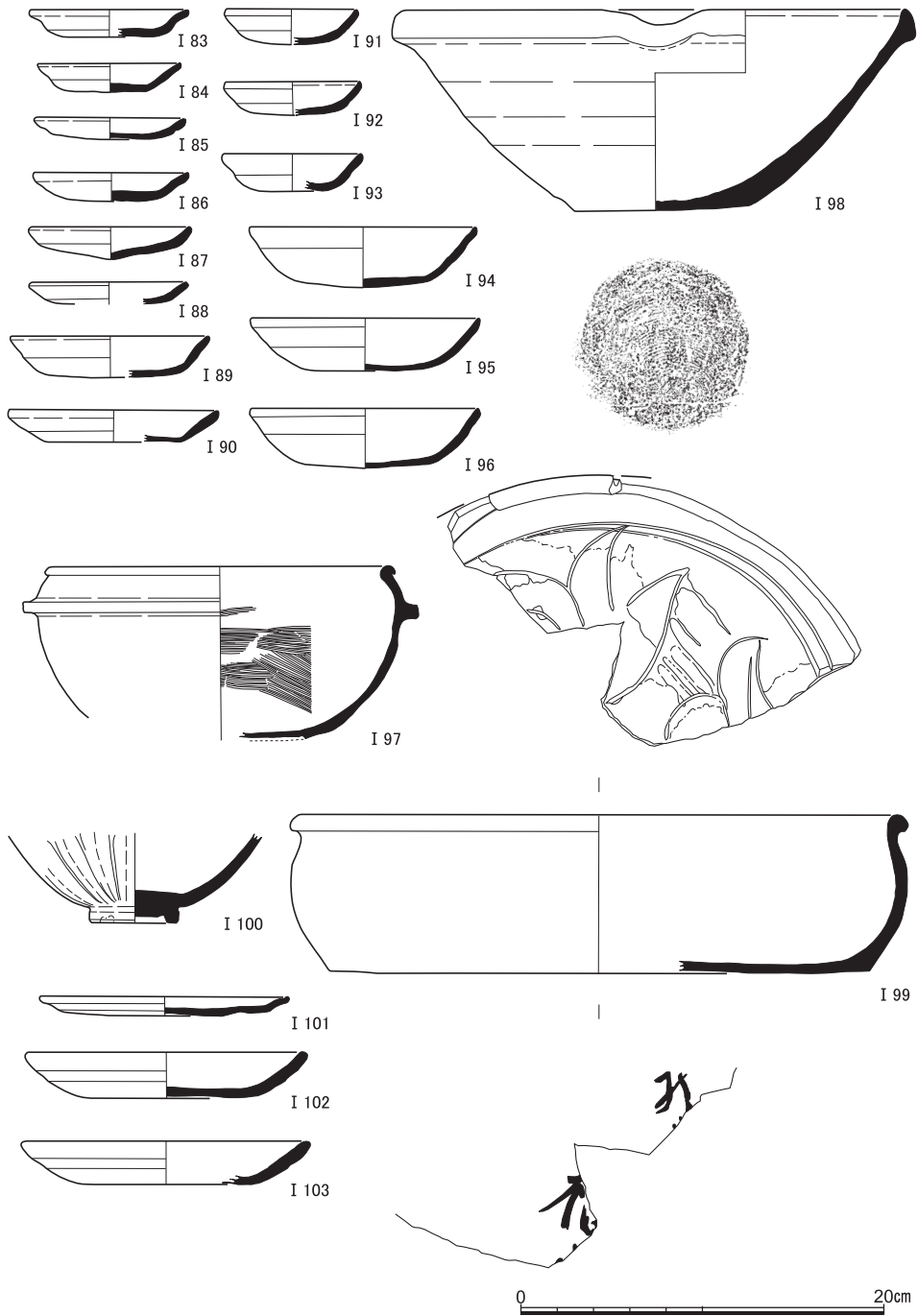


図32 SE 9 出土遺物 (I 83～I 97土師器, I 98須恵器, I 99華南三彩, I 100青磁), SE 11出土遺物 (I 101～I 103土師器)

中世の遺跡

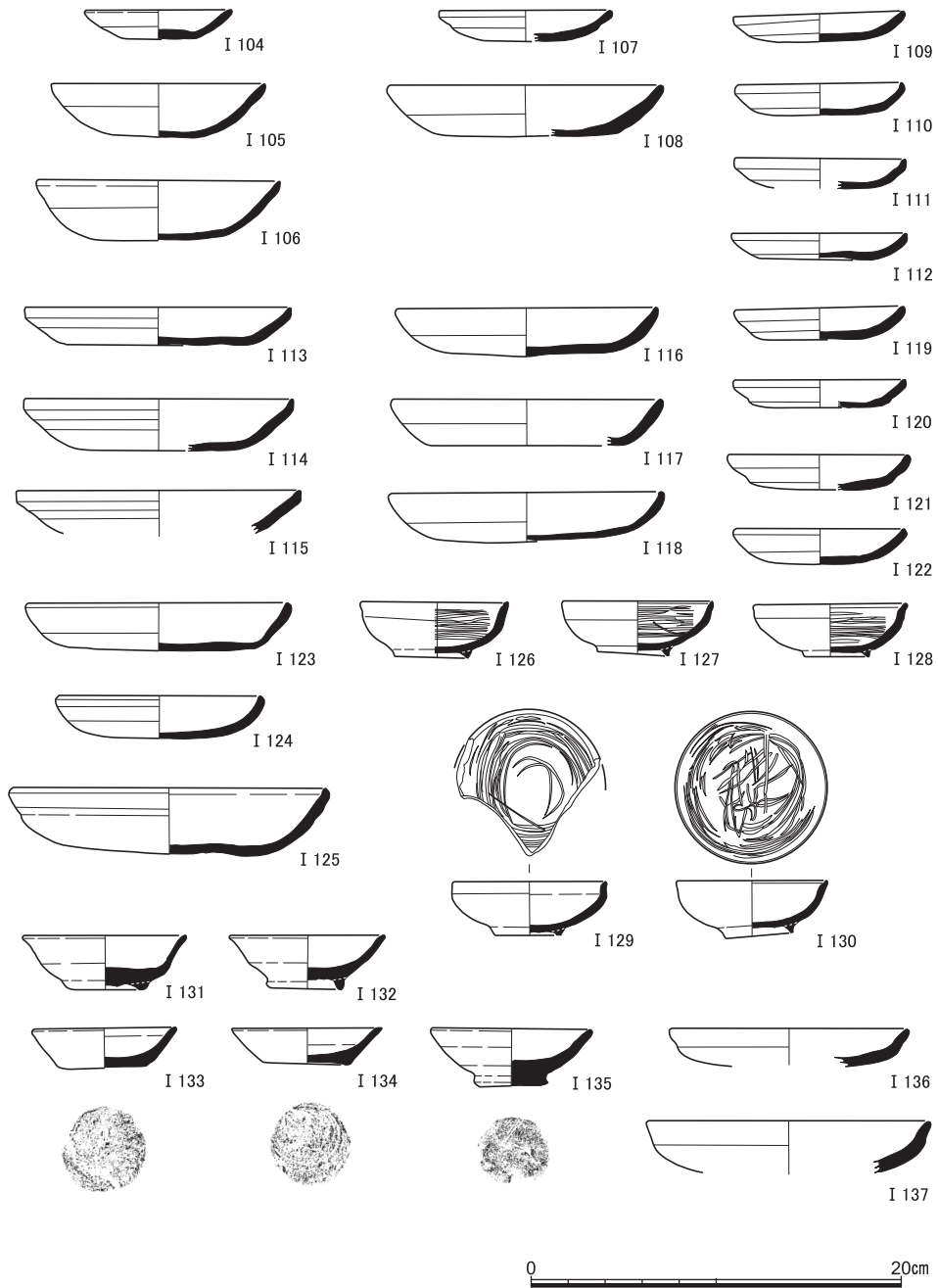


図33 S K 1 出土遺物 (I 104～I 106土師器), S K 2 出土遺物 (I 107・I 108土師器), S K 3 出土遺物 (I 109～I 118土師器), S K 10出土遺物 (I 119～I 125土師器, I 126～I 130瓦器, I 131～I 135山茶碗), S K 11出土遺物 (I 136・I 137土師器)

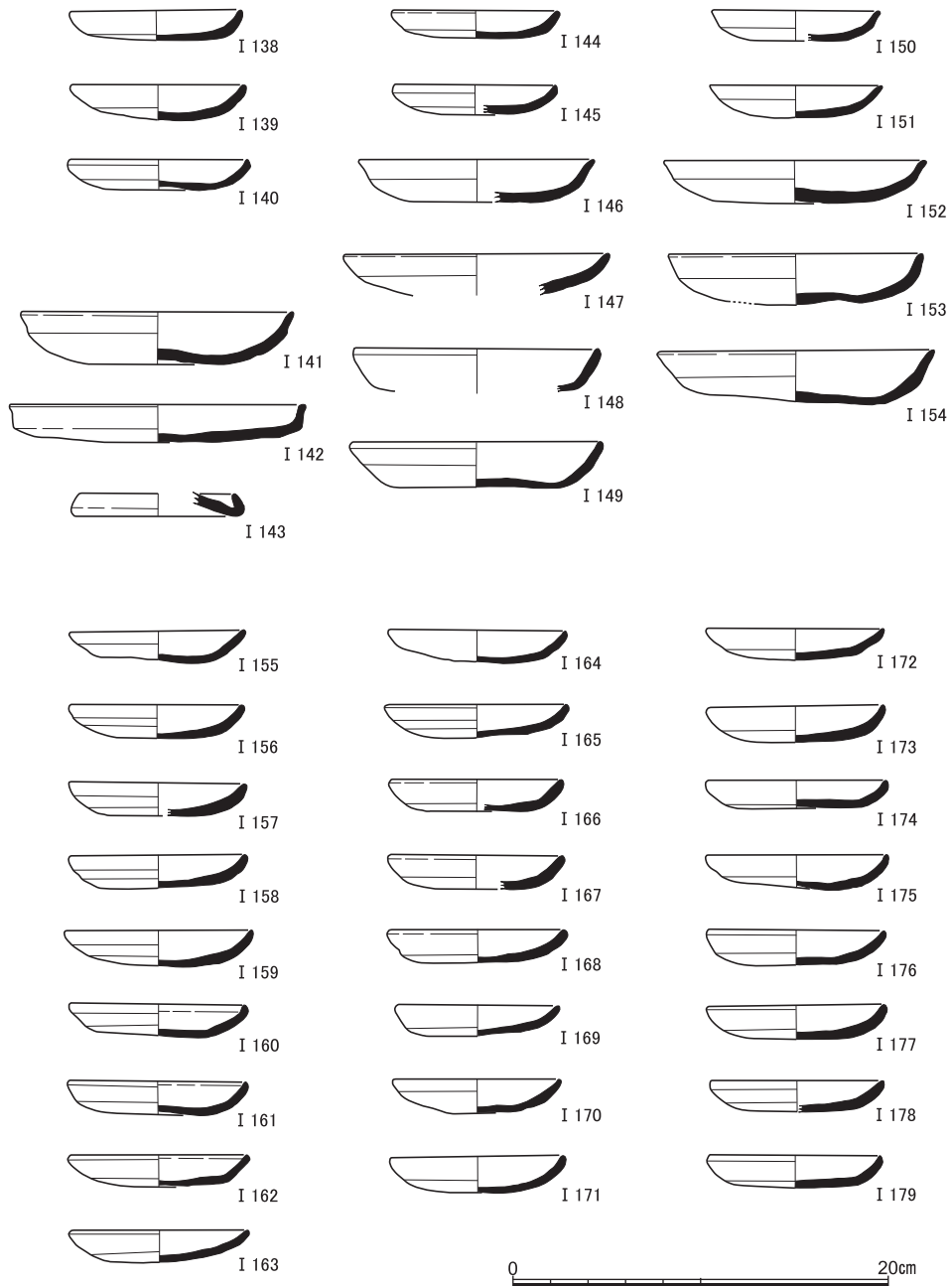


図34 S X 4 出土遺物 (I 138～I 140土師器), S X 42出土遺物 (I 141～I 143土師器), S X 43出土遺物 (I 144～I 149土師器), S X 44出土遺物 (I 150～I 154土師器), S X 46出土遺物(1) (I 155～I 179土師器)

中世の遺跡

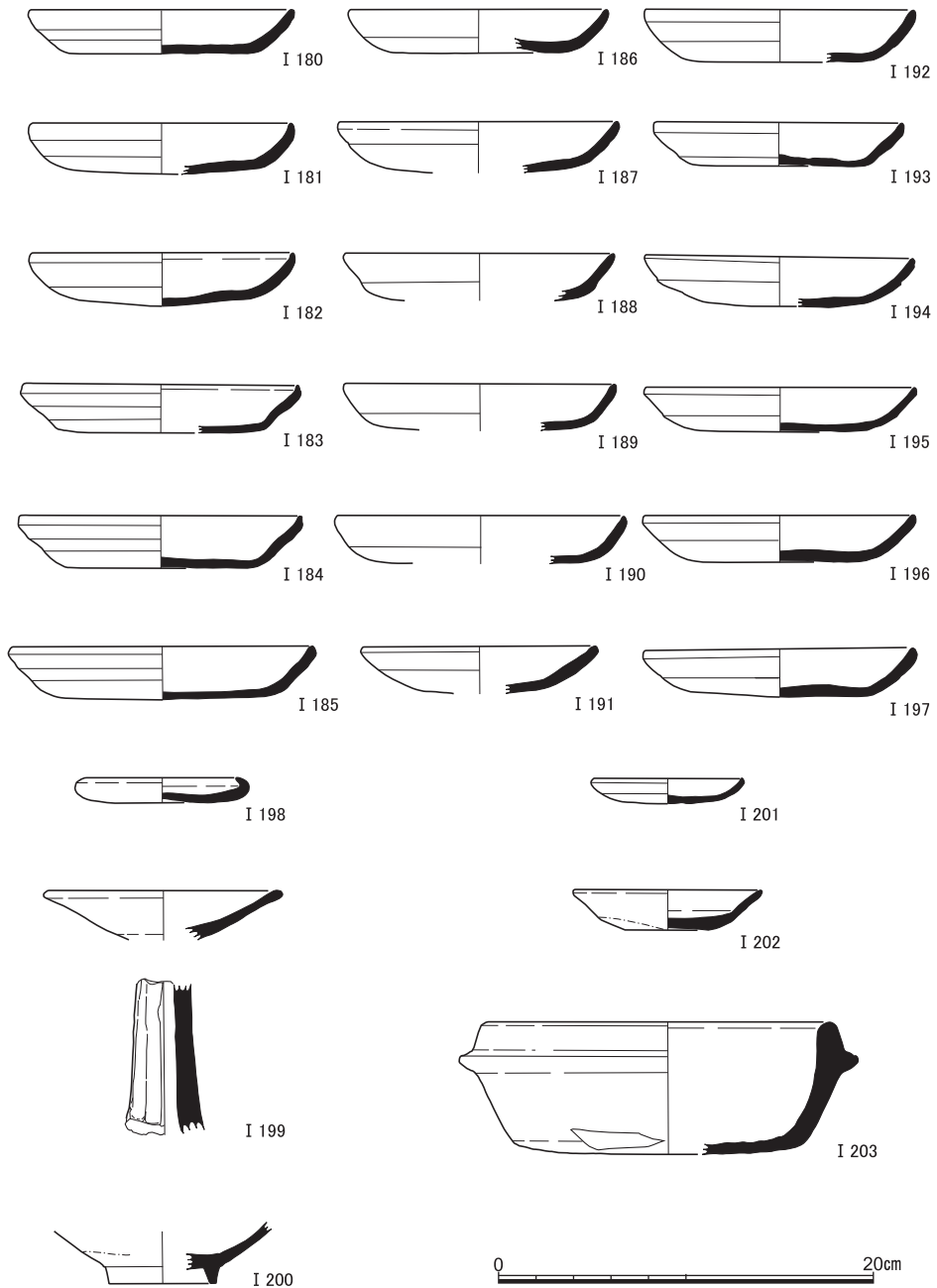


図35 S X46出土遺物(2) (I 180～I 199土師器, I 200白磁), S X45出土遺物 (I 201土師器, I 202青磁, I 203石鍋)

I 180・I 181はC₃類, I 182はC₄類, I 183～I 185はC₅類, I 186・I 187はD₂類, I 188～I 190はD₃類, I 191・I 192はD₄類, I 193～I 197はD₅類の土師器皿。I 198は土師器受皿。I 199は灰白色を呈する土師器高杯の杯部および脚部。

I 200は白磁底部片。体部下端から底部外面を露胎とし, 見込みには蛇の目釉剥ぎが認められる。

S X45出土遺物 (I 201～I 203) I 201はD₆類の土師器小皿。I 202は青磁皿。灰白色の釉がかかり, 体部下半のなかばおよび底部外面を露胎とする。体部中位で屈曲し, 口縁端部は丸みをもつ。I 203は石鍋。口縁部のすぐ下に削りだしによる鏝がめぐり, 外面には煤が厚く付着している。底部において部分的に切りとった形跡がみうけられる。

(4) 2期の遺構の遺物 (図版27・28, 図36～52)

S D 2出土遺物 (I 204～I 221) I 204・I 205はD₄類, I 206はD₆類, I 207はE₃類の土師器皿。I 208は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 209は土師器羽釜。外面に煤が付着している。I 210は瓦器鍋。口縁端部を尖らせて仕上げている。I 211は瓦器羽釜。口縁部が長く延び, 端部に面をもつ。

I 212は灰白色を呈する須恵器杯身。I 213は灰色を呈する須恵器すり鉢。底部に円形の孔があげられている。I 214は陶器底部片。外面に糸切り痕がみうけられる。I 215～I 217は青磁底部片。I 215は底部外面, I 216は畳付, I 217は底部内外面を露胎とする。I 218は白磁底部片。I 219は白磁の合子蓋。I 220は浅黄橙色, I 221は灰褐色を呈する砥石。

S D 6出土遺物 (I 222～I 228) I 222・I 223はE₁類の土師器小皿。I 224はE₂類, I 225・I 226はE₃類の土師器皿。I 227・I 228は白色系の土師器椀。

S D 7出土遺物 (I 229～I 232) I 229はE₂類, I 230はE₃類の土師器皿・小皿。I 231は土師器羽釜。口縁部は内側に折れ, その端部を玉縁状に仕上げている。外面に煤が付着している。I 232は青磁底部片。高台の内側を露胎とする。

S D 10出土遺物 (I 233～I 251) I 233・I 236は乙訓在地形, I 234はD₂類, I 235はD₃類, I 237はD₅類, I 238・I 239はD₆類の土師器小皿。I 239の見込みには, 指で撫でた痕跡が明瞭に認められる。I 240はC₅類, I 241・I 242は乙訓在地形, I 243はD₂類, I 244はD₃類, I 245はD₄類, I 246・I 247はD₅類, I 248はD₆類の土師器皿。I 249は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 250は土師器受皿。

I 251は須恵器皿。輪高台を貼り付け, 口縁部が外反ぎみに長く立ちあがる。外面に自然釉が付着している。

中世の遺跡

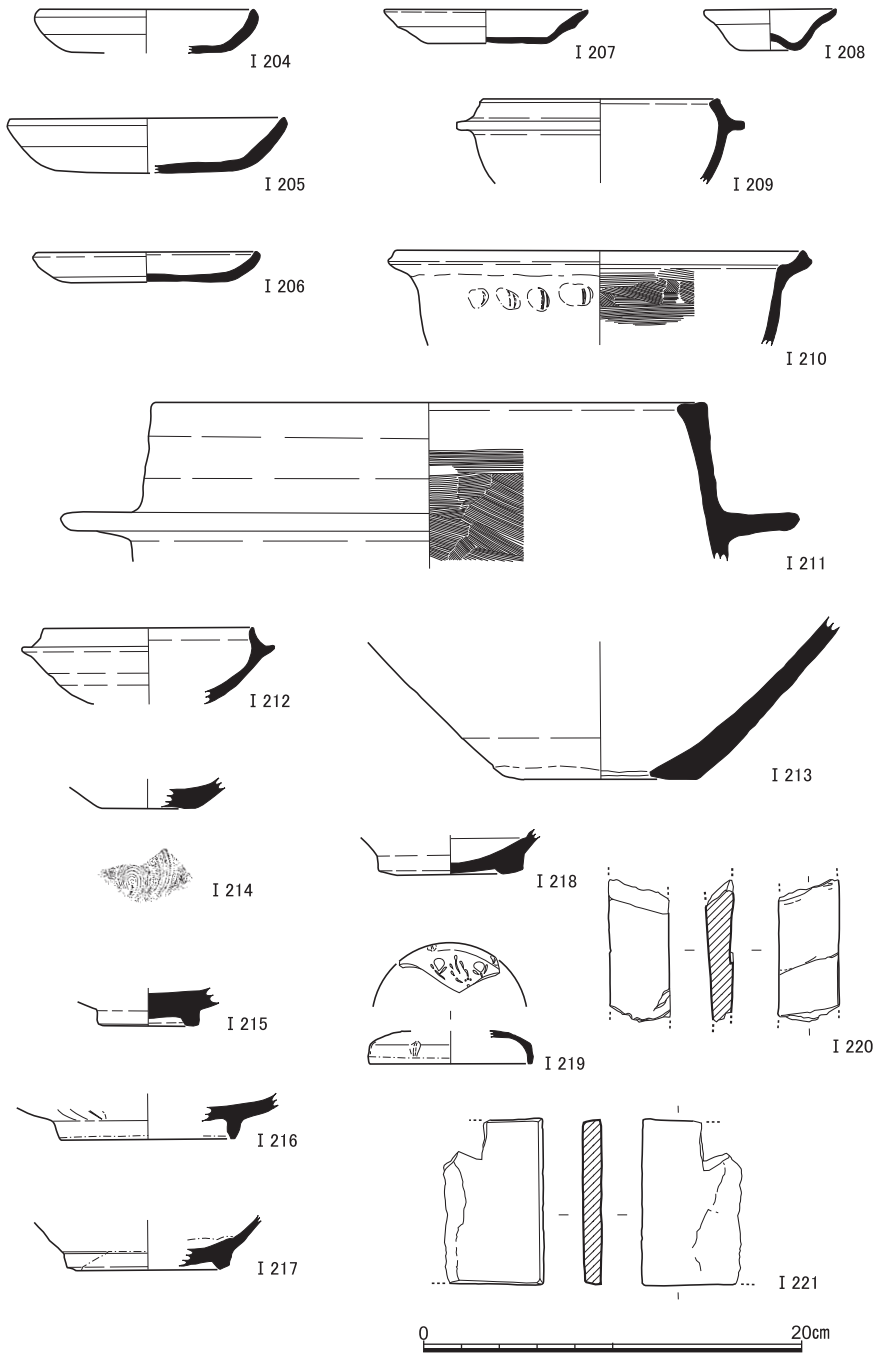


図36 S D 2 出土遺物 (I 204～I 209土師器, I 210・I 211瓦器, I 212・I 213須恵器, I 214陶器, I 215～I 217青磁, I 218・I 219白磁, I 220・I 221砥石)

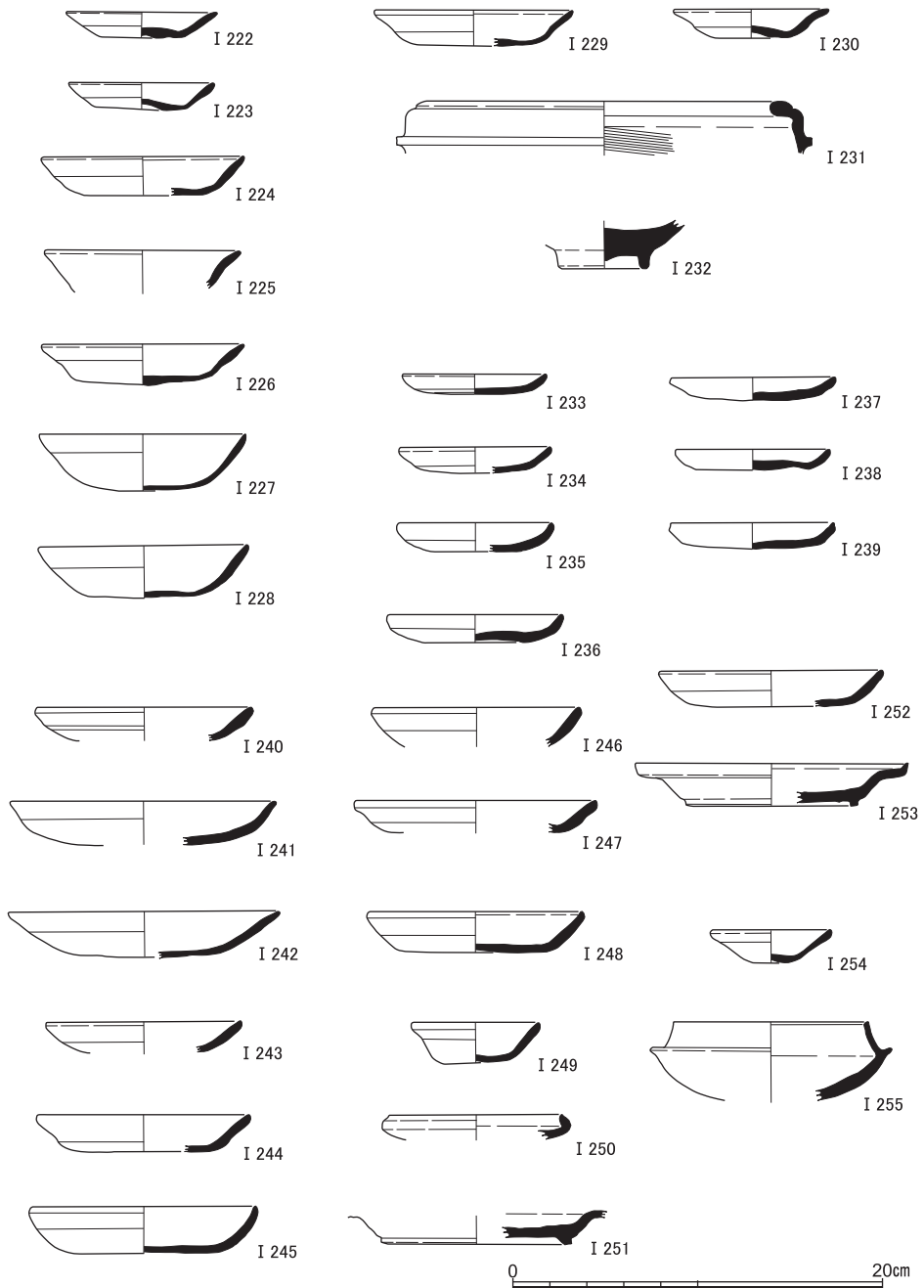


図37 S D 6 出土遺物 (I 222～I 228土師器), S D 7 出土遺物 (I 229～I 231土師器, I 232青磁), S D 10出土遺物 (I 233～I 250土師器, I 251須恵器), S D 11出土遺物 (I 252土師器, I 253須恵器), S D 12出土遺物 (I 254土師器, I 255須恵器)

中世の遺跡

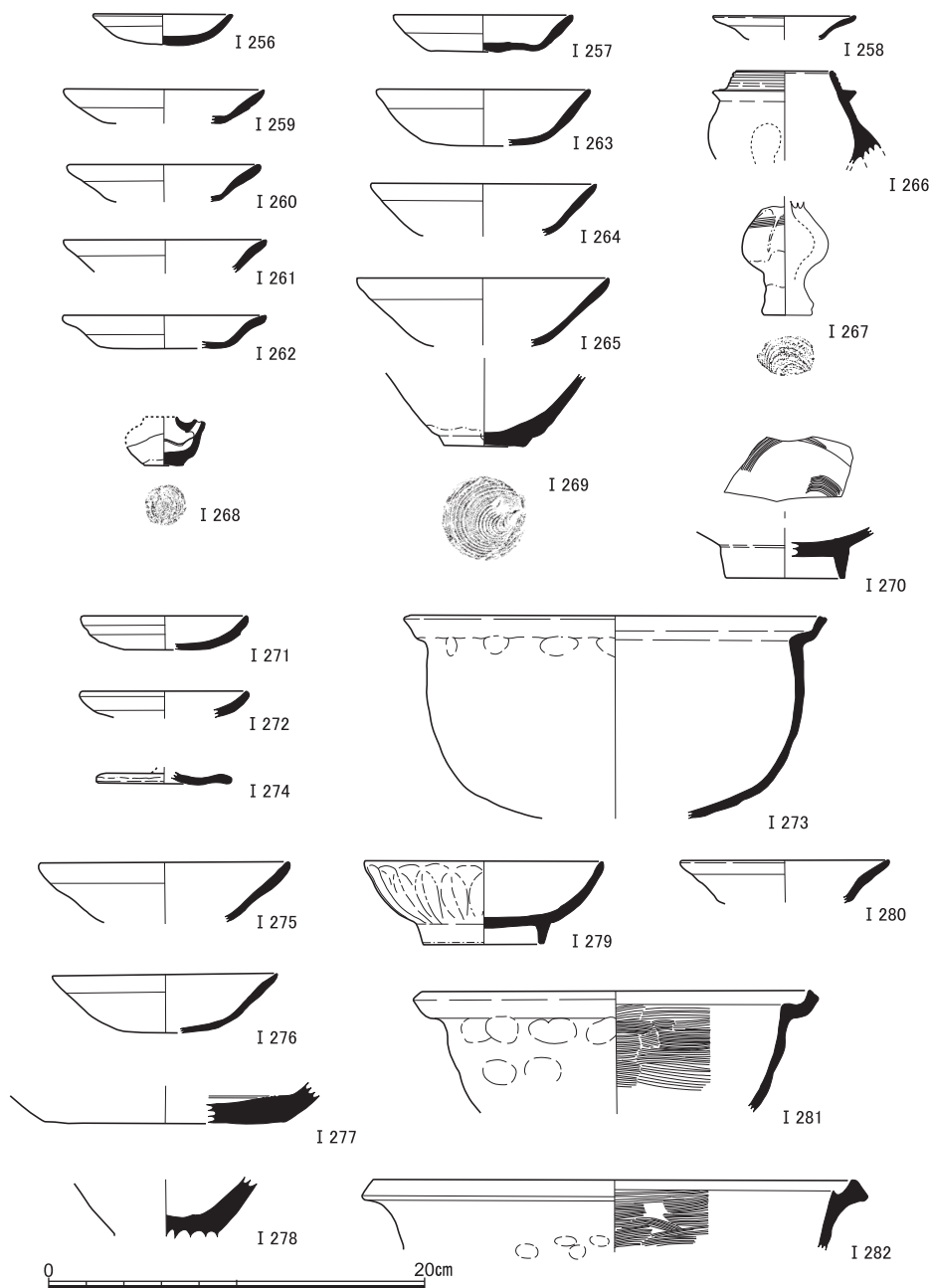


図38 S E 1 木柁内出土遺物 (I 256～I 258土師器), S E 1 石組内出土遺物 (I 259～I 265土師器, I 266瓦器, I 267～I 269古瀬戸, I 270白磁), S E 1 掘形出土遺物 (I 271・I 272土師器, I 273瓦器, I 274陶器), S E 7 木柁内出土遺物 (I 275土師器), S E 7 石組内出土遺物 (I 276土師器, I 277・I 278古瀬戸, I 279青磁), S E 7 掘形出土遺物 (I 280土師器, I 281・I 282瓦器)

S D11出土遺物（I 252・I 253） I 252はE₁類の土師器皿。I 253は須恵器皿。口縁部が外反ぎみに長く立ちあがり、その端部をつまみあげている。外面に自然釉が付着している。

S D12出土遺物（I 254・I 255） I 254は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 255は灰色を呈する須恵器杯身。

S E 1 出土遺物（I 256～I 274） I 256・I 257はE₁類の土師器小皿・皿。I 258はE₃類の土師器小皿。以上は木柾内の埋土から出土。

I 259はE₁類、I 260～I 262はE₃類の土師器皿。I 263～I 265は白色系の土師器碗。I 266はミニチュアの瓦器脚付き羽釜。口縁部外面に沈線が3条めぐっている。I 267は古瀬戸前期様式の花び I a 類（小型仏花瓶）〔藤澤2007〕。底部外面に糸切り痕がみうけられる。I 268は古瀬戸中期様式の水滴。注口の部分を貼り付け、穴を貫通させている。灰釉を漬け掛けしており、体部外面下端から底部外面にかけて露胎とする。底部外面に糸切り痕が認められる。I 269は古瀬戸の底部片。体部外面下端から底部外面にかけて露胎とする。なお、その部分には煤が付着している。底部外面に回転糸切り痕がみうけられる。I 270は白磁碗の底部片。高台は高く直立し、その先端から内側にかけて露胎とする。底部内面に櫛目文を有する。以上は石組内の埋土から出土。

I 271はC₃類、I 272はD₆類の土師器小皿。I 273は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。体部内面の刷毛調整はほとんど認められない。I 274は陶器の蓋。オモテ面に暗赤褐色の釉をほどこす。以上は掘形埋土から出土。

S E 7 出土遺物（I 275～I 282） I 275は、木柾内の埋土から出土した白色系の土師器碗。

I 276は白色系の土師器碗。I 277は古瀬戸の折縁深皿の底部片。見込みに轆轤を用いた櫛描きによる同心円文の一部がみうけられる。I 278は古瀬戸の底部片。底部内面の中心部分の周縁がわずかにくぼんでいる。底部外面を露胎とする。I 279はほぼ完形の青磁小碗。体部外面に幅の細い鎚蓮弁文を有する。高台は高く、その断面は尖り気味となる。薄萌葱色の釉を全面にほどこしたのち、高台端部のそれを搔きとっている。露胎部分は橙色を発する。胎土は緻密で、灰白色を呈している。以上は石組内の埋土から出土。

I 280はE₃類の土師器皿。I 281・I 282は瓦器鍋。前者は口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。後者は口縁端部を尖らせて仕上げている。以上は掘形埋土から出土。

S K 5 出土遺物（I 283～I 286） I 283は瓦器鍋。I 284は須恵器甕の底部片。I

中世の遺跡

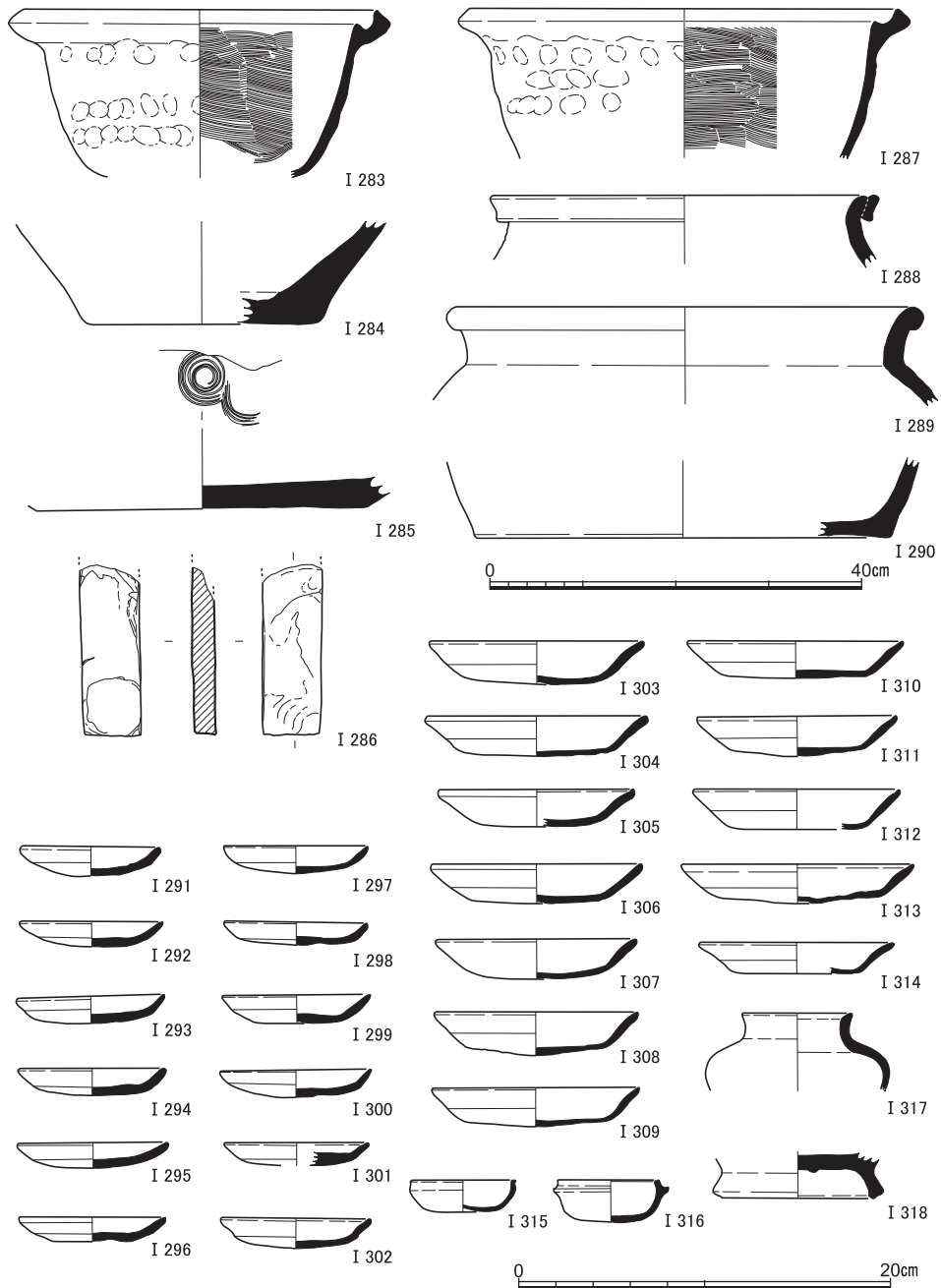


図39 S K 5 出土遺物 (I 283瓦器, I 284須恵器, I 285古瀬戸, I 286砥石), S K 7 出土遺物 (I 287瓦器, I 288常滑, I 289備前, I 290陶器), S K 9 出土遺物 (I 291~I 316土師器, I 317瓦器, I 318灰釉系陶器) I 288~I 290縮尺1/8

285は古瀬戸の折縁深皿の底部片。底部内面の灰釉は刷毛によって塗られており、その中央には轆轤を用いた櫛描きの同心円文が認められる。I 286は灰白色を呈する砥石。

S K 7 出土遺物 (I 287～I 290) I 287は瓦器鍋。口縁端部を尖らせて仕上げている。I 288は常滑焼の甕。口縁部には縁帯が成形され、横撫でによって調整がほどこされている。I 289は備前焼の甕。口縁部を外側に折り曲げ、小さな玉縁を作っている。14世紀初頭から中葉ごろのものとみなされる〔重根2005〕。I 290は外面が茶褐色を呈する陶器底部片。その色からすると、備前焼の可能性が高いと思われる。外面は刷毛目によって最終調整がほどこされている。

S K 9 出土遺物 (I 291～I 318) S K 9の埋土からは多くの土師器が出土している。口縁部が1/6以上残るものはあわせて118点で、そのうちD類・E類の小皿・皿は53点と57点、白色系の碗は8点をかぞえる。それらのなかから24点をえらんで図に示した。

I 291～I 295はD₂類、I 296はD₆類、I 297～I 300はE₁類、I 301・I 302はE₂類の土師器小皿。I 294は見込みに指で撫でた痕跡が明瞭にみうけられる。I 303はD₂類、I 304はD₅類、I 305・I 306はD₆類、I 307～I 310はE₁類、I 311～I 313はE₂類、I 314はE₃類の土師器皿。I 315はミニチュアの土師器碗。I 316はミニチュアの土師器羽釜。口縁部外面には横撫でをほどこし、面をもつその端部には1条の沈線がめぐっている。鋳部は貼り付けられており、横撫でによって整えられている。I 317は瓦器壺。口径6.0cm、胴部最大10cmをはかる。口縁端部に面取りをほどこす。I 318は灰釉系陶器の底部片。高台は高く、その先端が内側にやや曲がっている。

S X 1 出土遺物 (I 319～I 331) I 319・I 320はE₁類の土師器小皿。前者の見込みに指で撫でた痕跡がはっきりとみうけられる。I 321はE₂類、I 322はE₃類の土師器皿。I 323～I 328は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 329～I 331は白色系の土師器碗。

S X 2 出土遺物 (I 332～I 393) S X 2からは土師器が少なからず出土している。口縁部が1/6以上残るものはあわせて231点で、そのうちE類の小皿・皿が35点・109点、白色系のくぼみ底小碗・碗が24点・63点となる。それらのなかから完形を保っていたものおよび完形に接合できたものをとりあげて図に掲げた。

I 332～I 346はE₁類、I 347はE₃類の土師器小皿。I 339・I 340・I 342・I 346は見込みに指で撫でた痕跡が認められる。また、I 332は底部内面から体部内面の一部にかけて、I 336は内面全体に煤が付着する。I 348～I 362はE₁類、I 363～I 367はE₃類の土師器皿。I 354・I 362は見込みに指で押さえた痕跡がみうけられる。I 368～I 377は白色系の土師

中世の遺跡

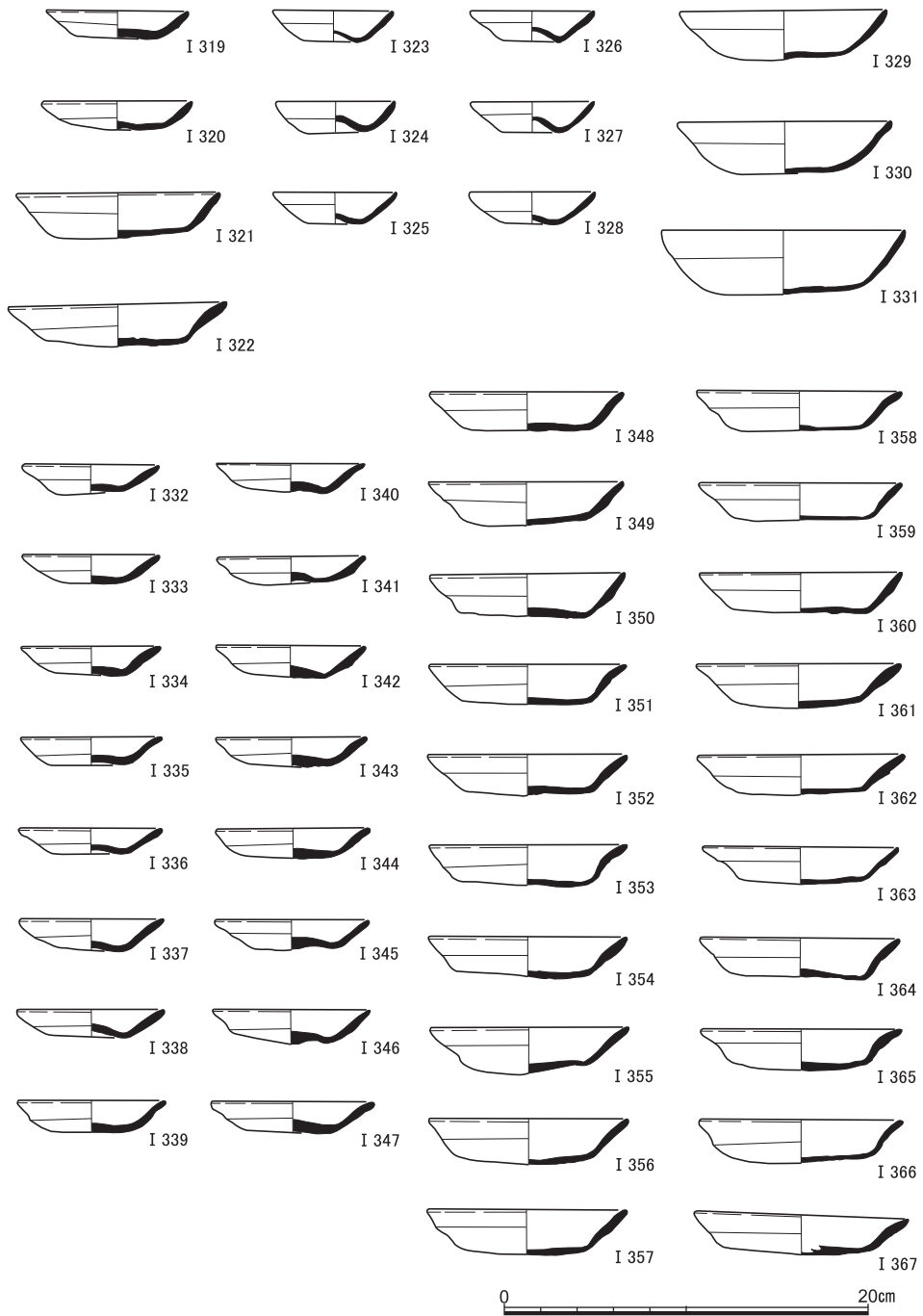


図40 S X 1 出土遺物 (I 319~ I 331土師器), S X 2 出土遺物(1) (I 332~ I 367土師器)

器くぼみ底小椀。I 370・I 373は口縁端部をつまみあげている。I 378～I 393は白色系の土師器椀。I 379・I 381・I 385・I 387・I 390は口縁端部をつまみあげている。

S X 3 出土遺物 (I 394～I 402) I 394・I 395はE₁類, I 396はE₂類の土師器小皿。I 395は口縁端部の2ヵ所に煤が付着している。I 397～I 401はE₃類の土師器皿。I 402は白色系の土師器椀。

S X 5 出土遺物 (I 403～I 410) I 403～I 407はE₁類, I 408はE₃類の土師器小皿。I 403は見込みに指で撫でた痕跡がはっきりと認められる。I 409はE₁類の土師器皿。I 410は白磁小壺。胴部下半に文様がみうけられる。

S X 6 出土遺物 (I 411～I 418) I 411～I 414はE₁類の土師器小皿。I 415・I 416はE₂類の土師器皿。I 417は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 418は白色系の土師器椀。両者はともに口縁端部をつまみあげている。

S X 11 出土遺物 (I 419～I 427) S X 11から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて51点で、そのうちE類の皿が33点、白色系のくぼみ底小椀・椀が6点・12点をかぞえる。それらのなかから12点をひろいあげて図に示した。

I 419はE₁類, I 420～I 422はE₃類の土師器皿。I 419は口縁端部の大半に煤が付着している。I 423～I 425は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 426・I 427は白色系の土師器椀。I 426は口縁端部をつまみあげている。

S X 22 出土遺物 (I 428～I 437) I 428～I 430はE₁類, I 431はE₃類の土師器皿。I 428は見込みに指で押さえた痕跡が明瞭に認められる。I 429は口縁端部にわずかに、I 430はその四半分に煤が付着している。I 432は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 433～I 435は白色系の土師器椀。I 434は口縁部内面から見込みにかけて、幅3cmほどの煤が付着している。I 435は口縁端部をつまみあげている。

I 436は瓦器風炉の体部片。その上方には窓が開けられているのが確認される。また、2条の凸帯がめぐらされ、そのあいだに珠文、その下に断面三角形の連子がほどこされている。I 437は古瀬戸の底部片。中期様式の折縁深皿であろう。体部外面の灰釉は刷毛塗りされている。見込みに轆轤を用いた櫛描きによる同心円文の一部が認められる。

S X 23 出土遺物 (I 438～I 447) I 438はE₁類の土師器小皿。I 439・I 440はE₁類, I 441・I 442はE₃類の土師器皿。I 443は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 444～I 446は白色系の土師器椀。I 447は土師器羽釜。口縁部が内側に傾き、その端部は外側に折り曲げられている。鋳部は貼り付けられ、横撫でで仕上げられている。

中世の遺跡

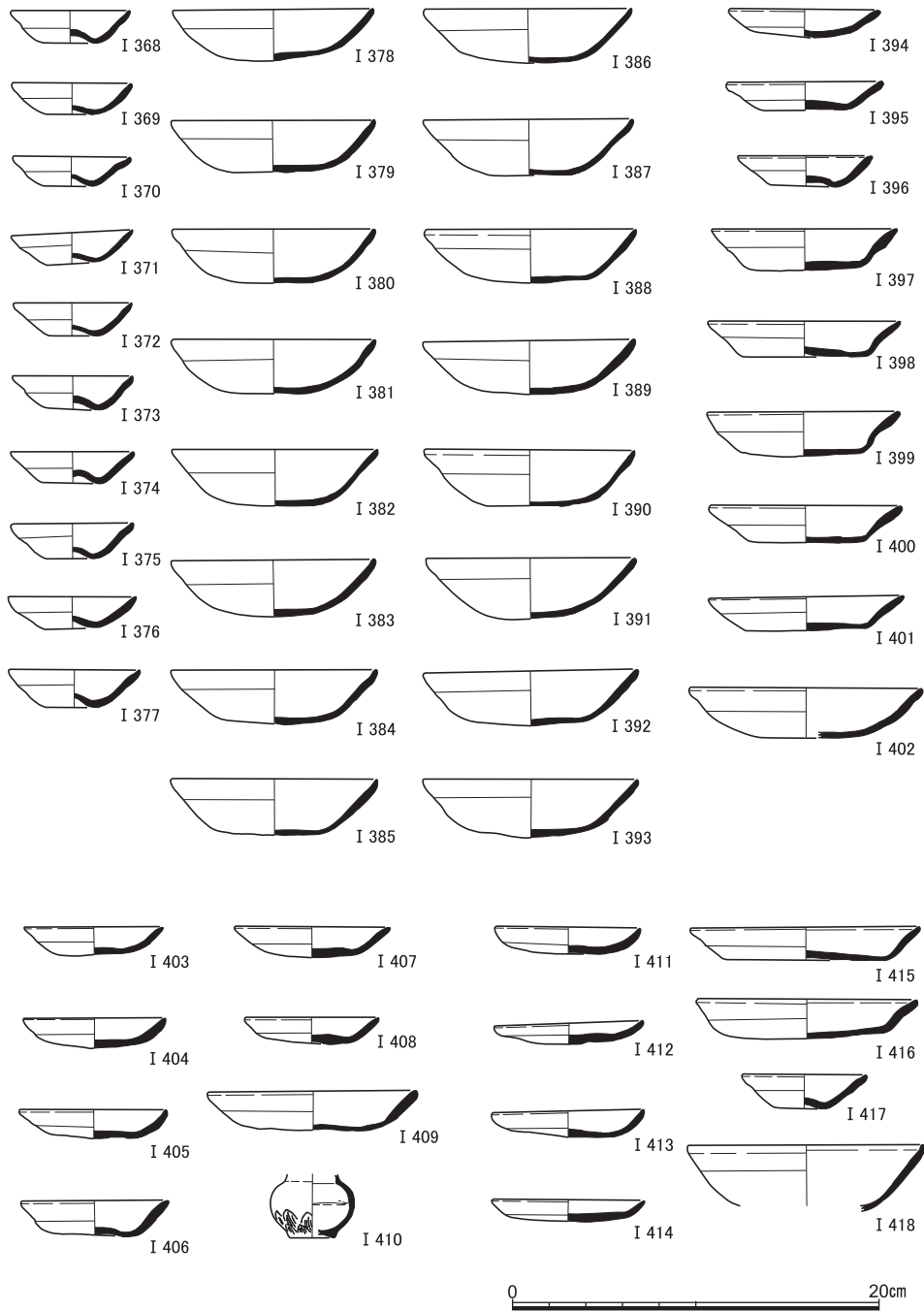


図41 S X 2 出土遺物(2) (I 368～I 393土師器), S X 3 出土遺物 (I 394～I 402土師器), S X 5 出土遺物 (I 403～I 409土師器, I 410白磁), S X 6 出土遺物 (I 411～I 418土師器)

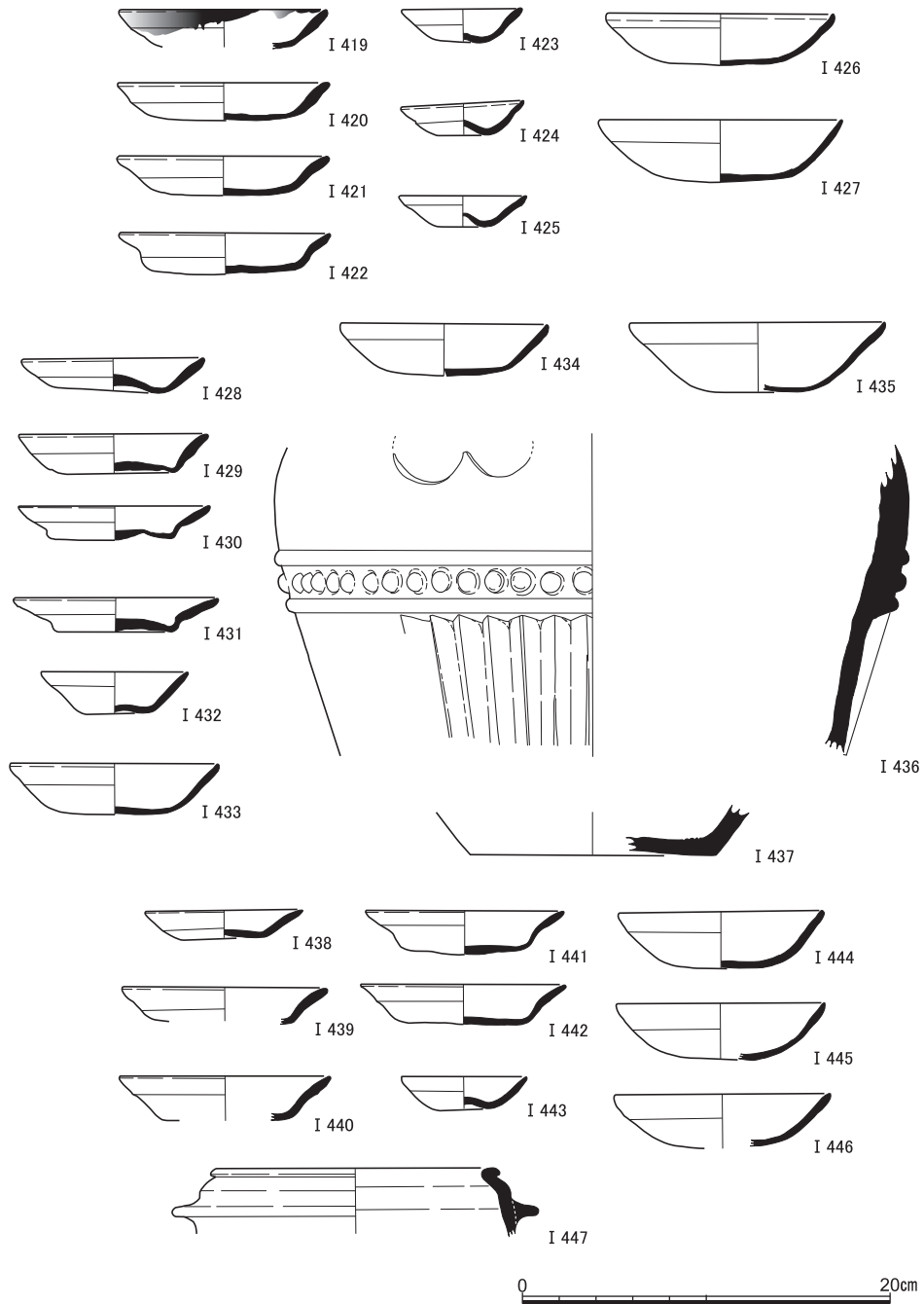


図42 S X11出土遺物 (I 419～I 427土師器), S X22出土遺物 (I 428～I 435土師器, I 436瓦器, I 437古瀬戸), S X23出土遺物 (I 438～I 447土師器)

S X28出土遺物 (I 448～I 468) S X28から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて55点で、そのうちE類の小皿・皿が7点・21点、白色系のくぼみ底小椀・椀が8点・19点となる。それらのなかか21点をえらんで図に掲げた。

I 448・I 449はE₁類, I 450はE₃類の土師器小皿。I 451～I 453はE₁類, I 454はE₂類, I 455はE₃類の土師器皿。I 456～I 461は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 457は口縁端部をつまみあげている。I 462～I 468は白色系の土師器椀。

S X30出土遺物 (I 469～I 495) S X30から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて111点で、そのうちE類の小皿・皿が9点・50点、白色系のくぼみ底小椀・椀が13点・39点をかぞえる。それらのなかから27点を取りあげて図に示した。

I 469～I 472はE₁類の土師器皿。I 470は口縁端部の約2/3に煤が付着する。I 471は底部中央に直径3mmほどの孔が存している。I 473～I 478はE₁類, I 479～I 481はE₃類の土師器皿。I 478は口縁端部の大半および口縁部から体部内外面の半分くらいに煤が付着する。I 482～I 487は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 488～I 495は白色系の土師器椀。

S X32出土遺物 (I 496～I 502) I 496～I 500はE₁類の土師器小皿。I 501は白色系の土師器小椀。I 502はにぶい橙色を呈する土師器。口縁端部は面をもち、その中央は浅くくぼんでいる。外面には指で押さえた痕跡が認められ、内面には横撫でがほどこされている。

S X34出土遺物 (I 503～I 543) S X34から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて180点で、そのうちE類の小皿・皿が22点・119点、白色系の小椀・くぼみ底小椀・椀が4点・5点・30点となる。それらのなかから41点をひろいあげて図に掲げた。

I 503・I 504はE₁類, I 505～I 512はE₂類, I 513はE₃類の土師器小皿。I 514～I 516はE₁類, I 517～I 520はE₂類, I 521～I 528はE₃類の土師器皿。I 529・I 530は白色系の土師器小椀。I 531～I 534は白色系の土師器くぼみ底小椀。I 535～I 543は白色系の土師器椀。

S X36出土遺物 (I 544～I 547) I 544はE₁類の土師器小皿。I 545はE₁類, I 546はE₂類の土師器皿。I 547は白色系の土師器椀。

S X37出土遺物 (I 548～I 554) I 548・I 549はE₁類の土師器小皿。I 550はE₁類, I 551はE₃類の土師器皿。I 552は白色系の土師器小椀。I 553は白色系の土師器くぼみ底小椀。口縁端部をつまみあげている。I 554は白色系の土師器椀。

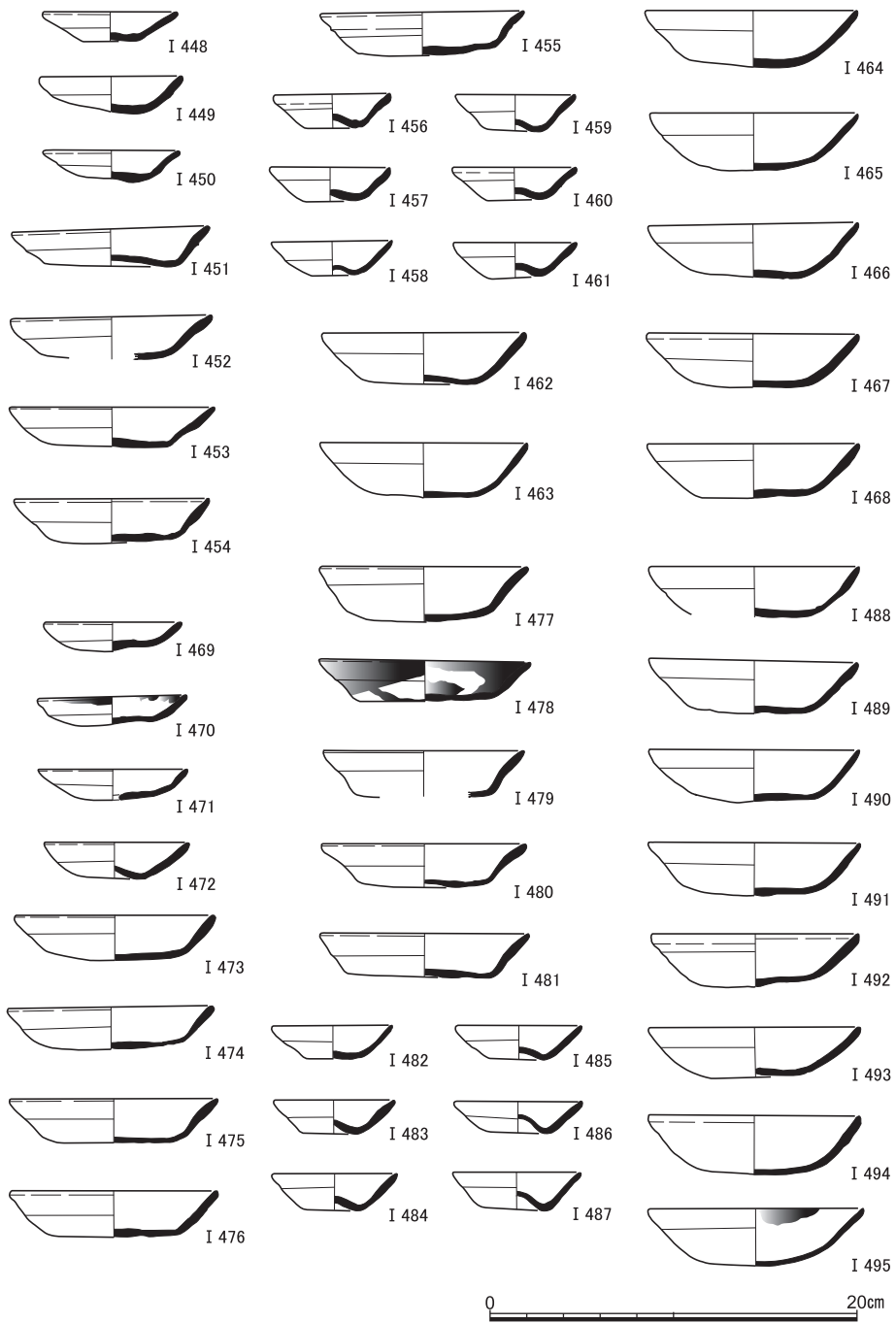


図43 S X28出土遺物 (I 448～I 468土師器), S X30出土遺物 (I 469～I 495土師器)

中世の遺跡

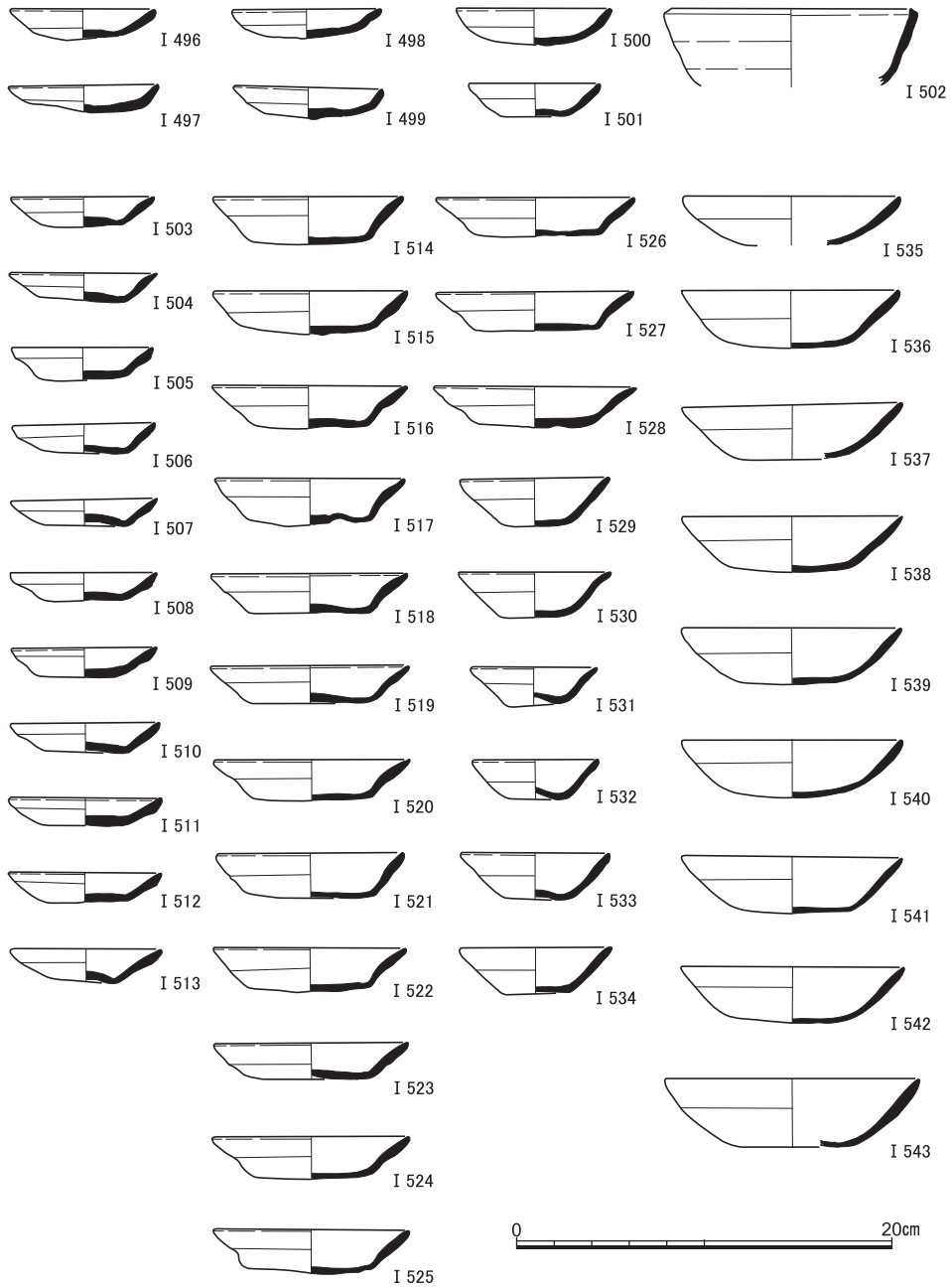


図44 S X 32出土遺物 (I 496～I 502土師器), S X 34出土遺物 (I 503～I 543土師器)

なお、この遺構には、直線と思われる墨書が外面に7本認められる横4cm、縦2cmほどのE類の土師器皿の体部片が含まれていた。

S X41出土遺物 (I 555～I 576) S X41から出土した土師器のうち、口縁部が1/6以上残るものはあわせて67点で、そのうちE類の小皿・皿が21点・24点、白色系のくぼみ底小椀・椀が2点・19点、受皿が1点をかぞえる。それらのなかから18点をえらんで図に示した。

I 555～I 558はE₁類、I 559はE₂類、I 560はE₃類の土師器小皿。I 556は口縁端部の大半、I 558はそこにわずかに煤が付着している。I 561はE₁類、I 562～I 564はE₂類、I 565はE₃類の土師器皿。I 566・I 567は白色系の土師器小椀。I 568～I 571は白色系の土師器椀。I 572は土師器受皿。

I 573は瓦器椀。口径は13cm、器高は4cmほどとなる。体部内面には圈線状の篋磨きがまばらにほどこされ、見込みにはジグザグ状の暗文が認められる。樟葉型Ⅲ－3期のものに相当しよう。I 574は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲し、端部に面をもつ。I 575は瓦器羽釜。体部はわずかに湾曲し、口縁部は短く直立する。口縁部内面は横撫でによって浅くぼんでいる。

I 576は灰色を呈する須恵器すり鉢。体部は厚みを減らしながら直線的に斜め上方に伸び、口縁部は玉縁状に肥厚している。

S X10出土遺物 (I 577) I 577は常滑焼の甕。頸部が大きく外反して口縁部へといたっている。口縁端部は面取りされ、平坦面が形作られている。頸部外面から肩部外面にかけて自然釉が付着している。第1段階1b型式期〔愛知県史編さん委員会編2012 「編年表」〕のものにあてうると思われ、12世紀半ばごろの作と考えられよう。

S X12出土遺物 (I 578) I 578は備前焼の甕。口縁部を外側に大きく折り曲げ、断面円形の玉縁を作っている。頸部外面の下半から肩部外面の上端にかけて自然釉が付着する。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が落ちているのが認められる。14世紀前葉から中葉のものとみなされる。

S X15出土遺物 (I 579・I 580) I 579は備前焼の甕。口縁端部を玉縁とする。頸部の下半から肩部の上半にかけて自然釉が付着している。頸部内面の表面が欠けているのがみうけられる。14世紀前葉から中葉のものと考えられる。I 580は甕の底部片。胴部外面および底部外面は茶褐色を呈する。その色からすると、備前焼の公算が大きい。胴部外面に縦方向の刷毛目が認められる。底部内面には自然釉が付着する。I 579と同一個体で

中世の遺跡

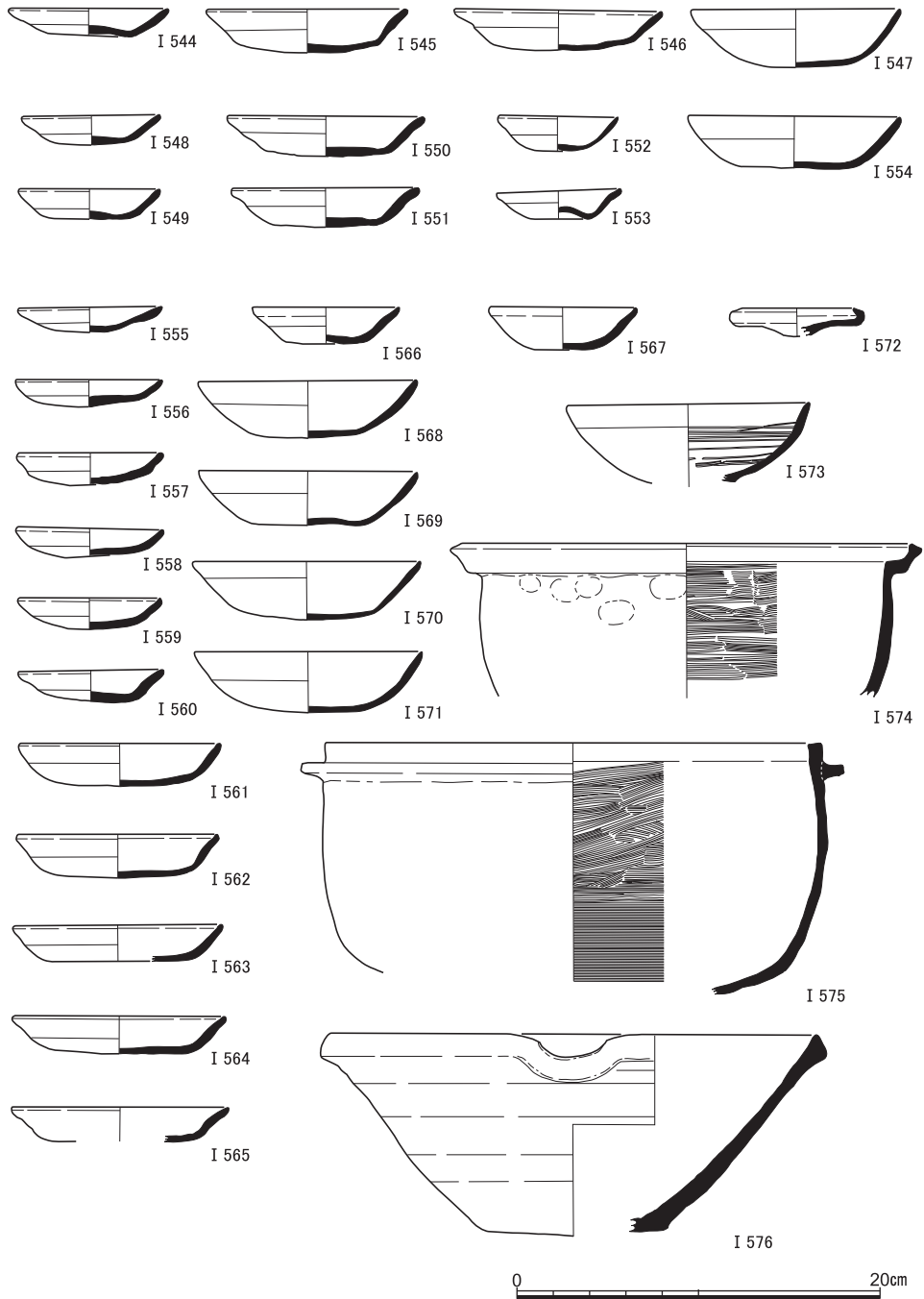


図45 S X36出土遺物 (I 544～I 547土師器), S X37出土遺物 (I 548～I 554土師器), S X41出土遺物 (I 555～I 572土師器, I 573～I 575瓦器, I 576須恵器)

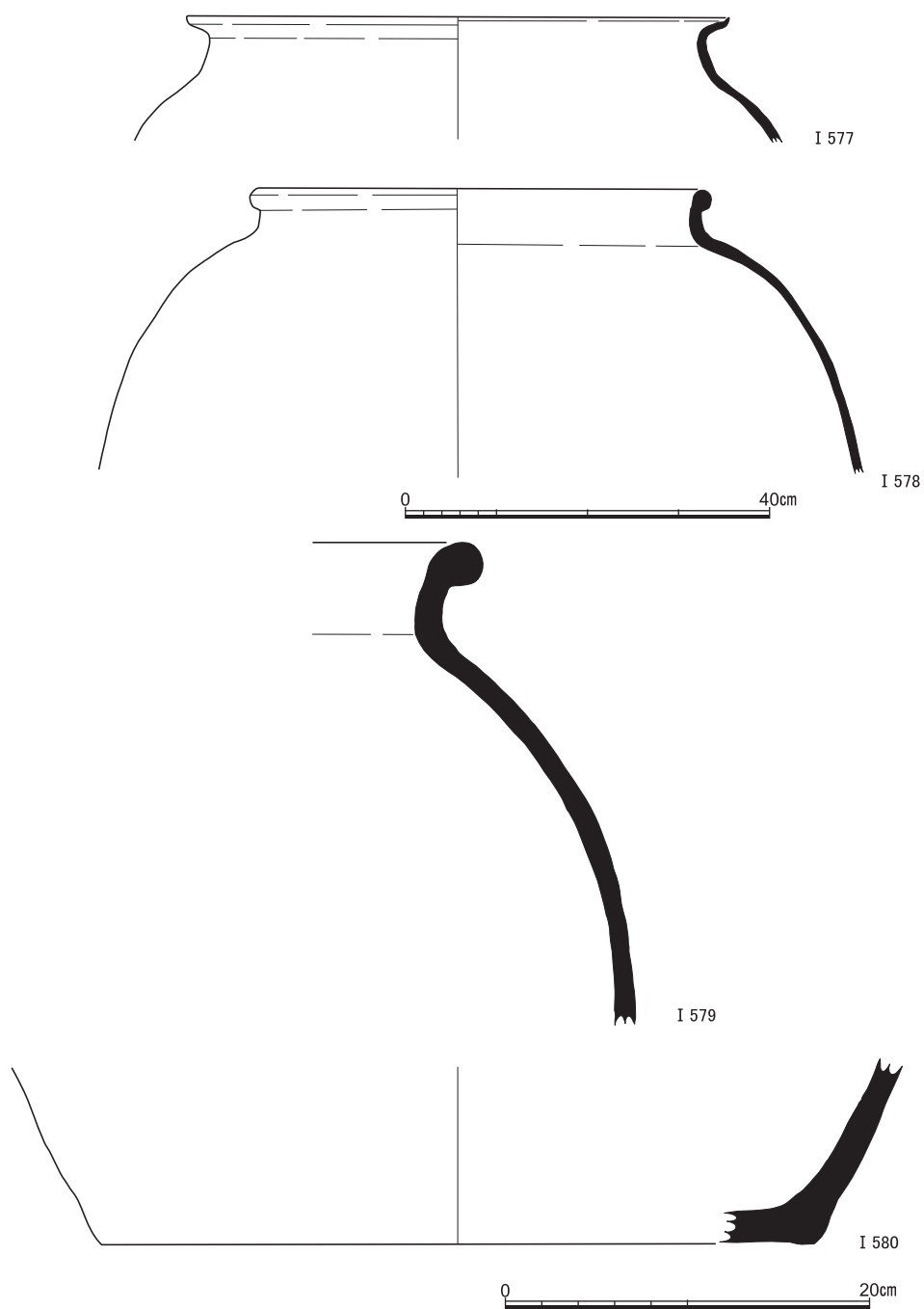


図46 S X10出土遺物 (I 577常滑), S X12出土遺物 (I 578備前), S X15出土遺物 (I 579備前, I 580陶器) I 577・I 578縮尺1/8

中世の遺跡

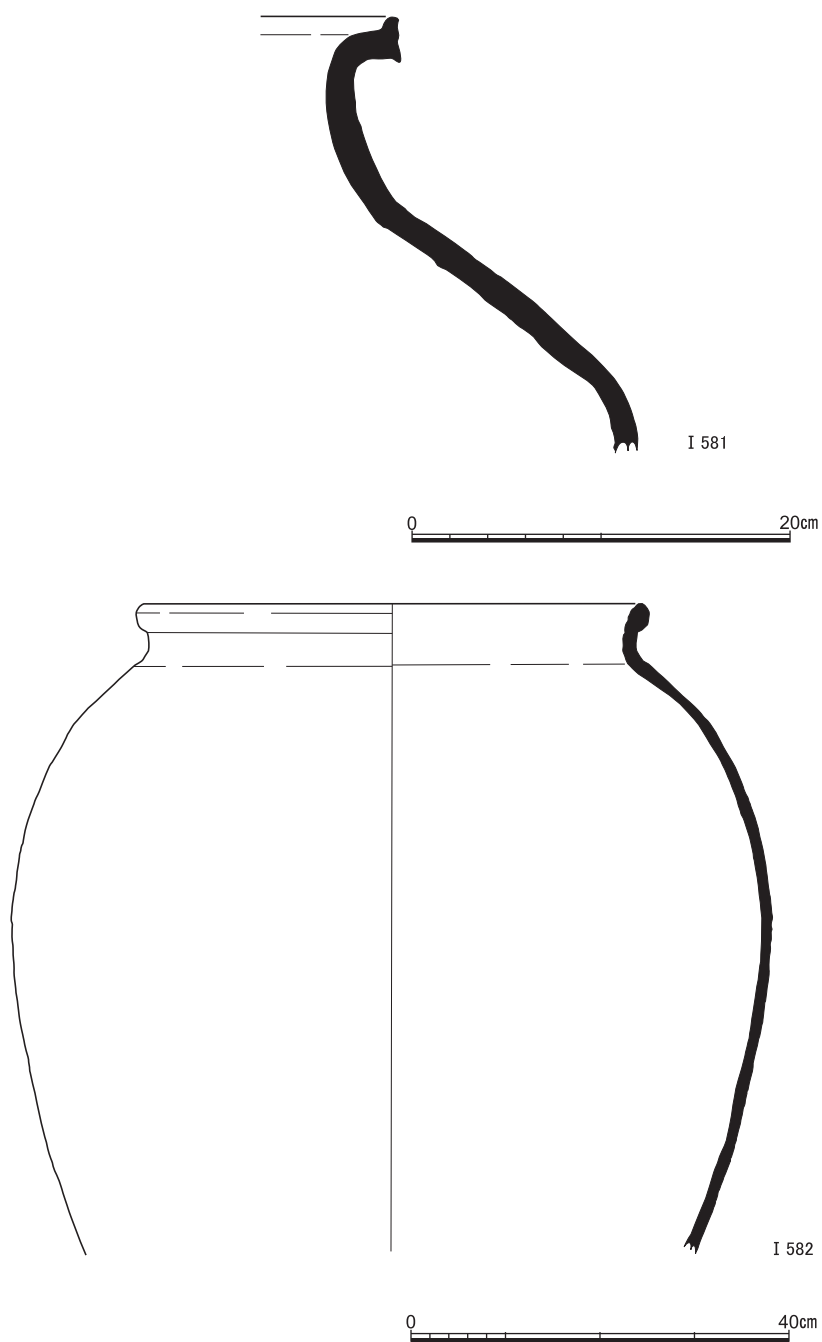


図47 S X17出土遺物 (I 581常滑), S X20出土遺物(1) (I 582備前) I 582縮尺1/8

ある可能性が存する。

S X17出土遺物 (I 581) I 581は常滑焼の甕。口縁部に縁帯が形作られる。第2段階5型式期のものにあたり、13世紀半ばに作られたと考えられる。口縁部内面および頸部外面から肩部外面にかけて自然釉が付着している。

S X20出土遺物 (I 582～I 584) I 582は備前焼の甕。頸部は短く、口縁部を外側に大きく折り曲げて、断面長楕円形の玉縁を作っている。肩部外面から胴部外面にかけて横方向の刷毛目が多く認められる。口縁部内面から頸部内面上半にかけて表面が落ちているのがみうけられる。頸部外面に自然釉が薄く付着している。中世3期のものと考えられ、14世紀中葉から15世紀前葉ごろに作られたと判断される〔乗岡2005〕。

I 583は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁は断面長楕円形の玉縁となっている。頸部外面から胴部外面にかけて刷毛目による調整がほどこされている。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が点々と欠けているのが認められる。頸部外面から肩部外面上半の一部に自然釉が付着している。

I 584は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁部を外側に大きく折り曲げて、断面長楕円形の玉縁を作っている。頸部外面下半から肩部外面上半にかけて自然釉が付着しており、肩部外面下半には横方向の刷毛目が見うけられる。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が落ちているのが認められる。

S X35出土遺物 (I 585・I 586) I 585は中世3期の備前焼の甕。頸部は短く、口縁は断面長楕円形の玉縁となっている。肩部外面上端に自然釉が薄く付着しており、胴部外面には横および斜め方向の刷毛目が見うけられる。口縁部内面から頸部内面にかけて表面が欠けているのが認められる。I 586は備前焼の甕の底部片。胴部外面に縦方向の刷毛目が見うけられる。I 585と同一個体である可能性が存する。

S X24出土遺物 (I 587～I 596) I 587はE₁類、I 588はE₃類の土師器皿。I 589は白色系の土師器小碗。

I 590は瓦器碗。I 591は外面上半が橙色、外面下半および内面が灰白色を呈する瓦器火鉢。体部が内湾する浅い鉢となる。体部外面に花文のスタンプを押印する。こうした器形のは14世紀半ばには出現していたと指摘されている〔立石2007〕。

I 592は備前焼の甕。口縁部を外側に折り曲げ、小さな玉縁を作っている。肩部外面に自然釉が付着する。頸部内面の表面が点々と欠けているのが認められる。14世紀初頭から中葉に作られたものと考えられる。

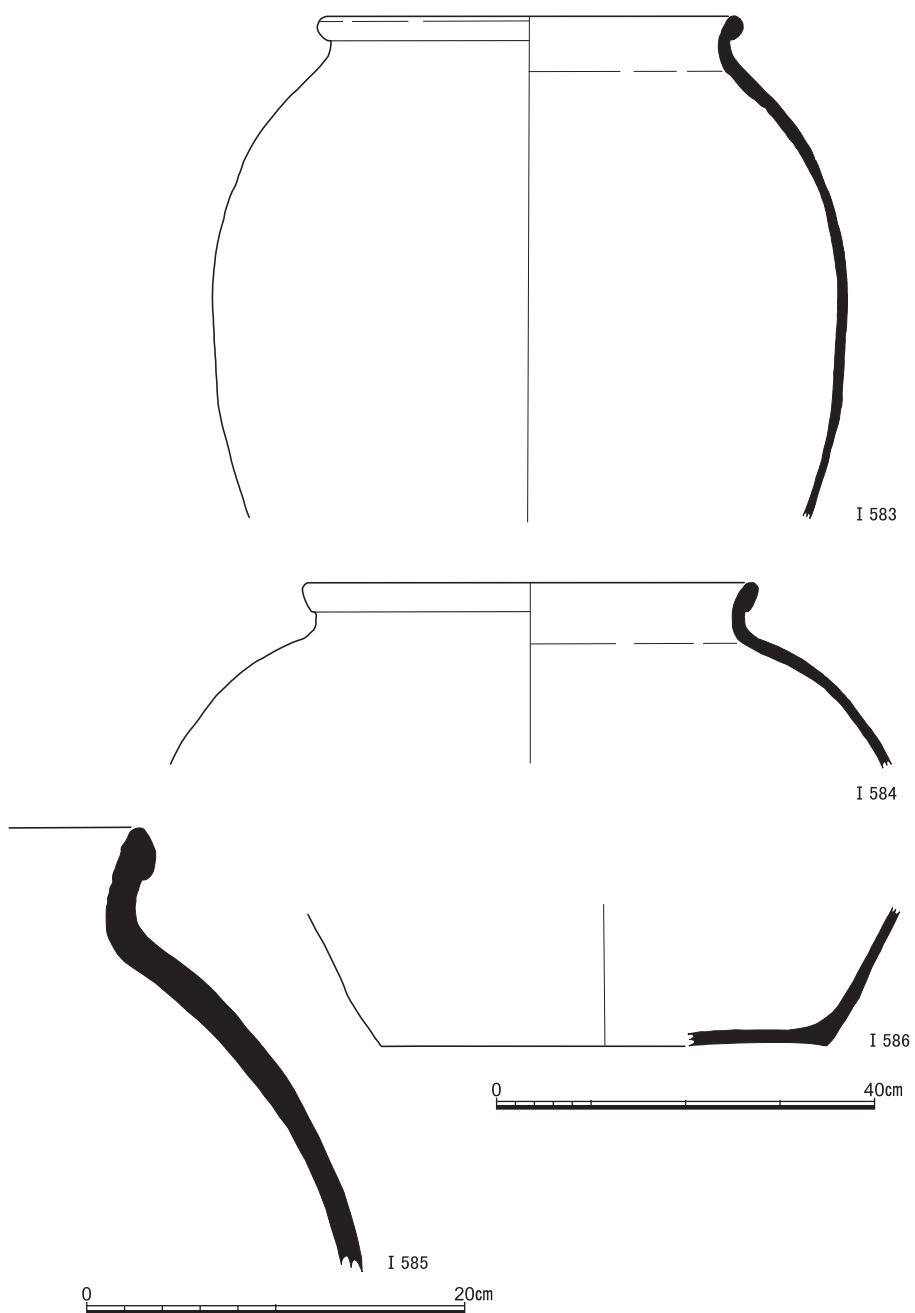


図48 S X20出土遺物(2) (I 583・I 584備前), S X35出土遺物 (I 585・I 586備前) I 583・I 584
・I 586縮尺1/8

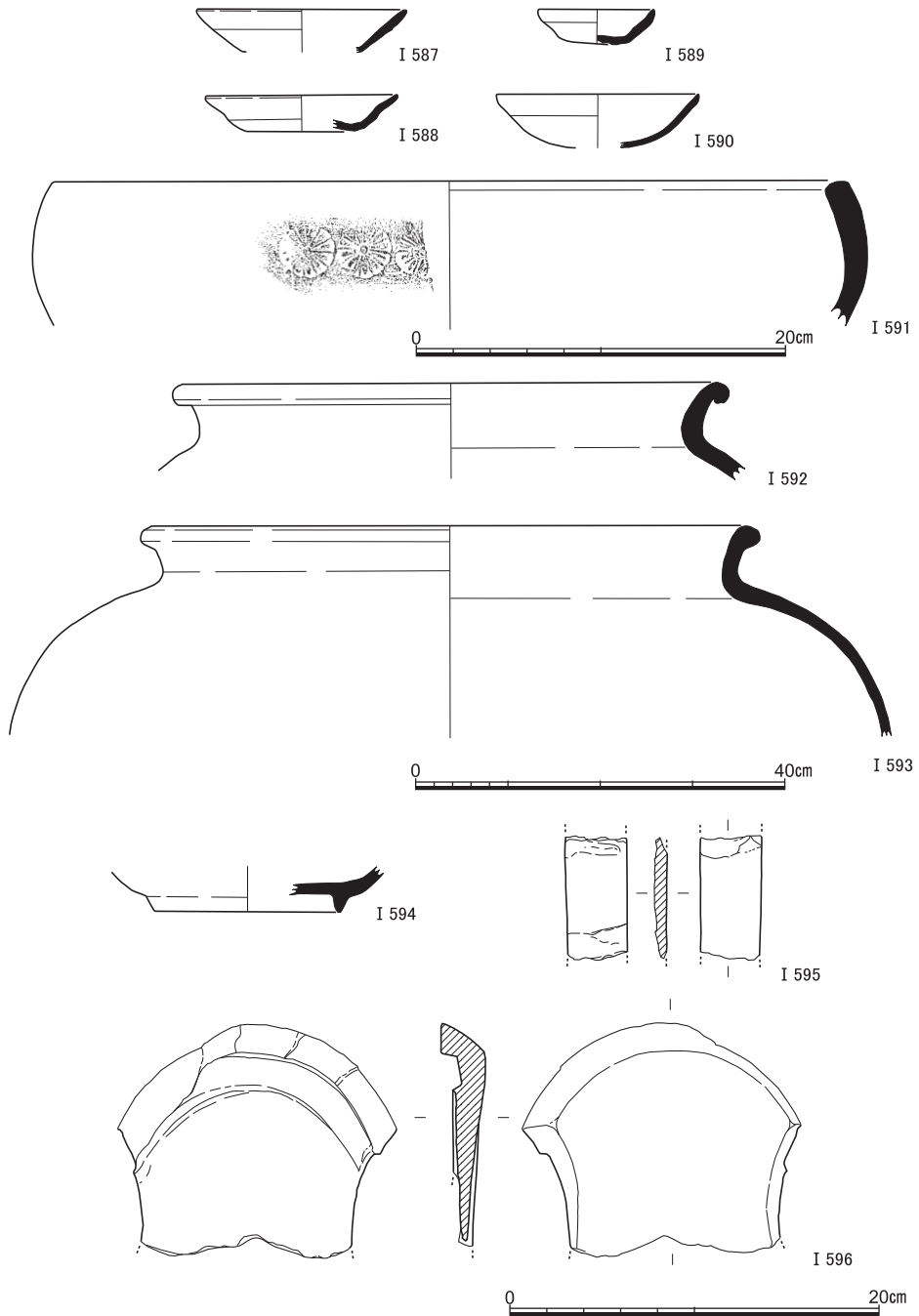


図49 S X24出土遺物（I 587～I 589土師器，I 590・I 591瓦器，I 592・I 593備前，I 594青磁，I 595砥石，I 596石製品）I 592・I 593縮尺1/8

中世の遺跡

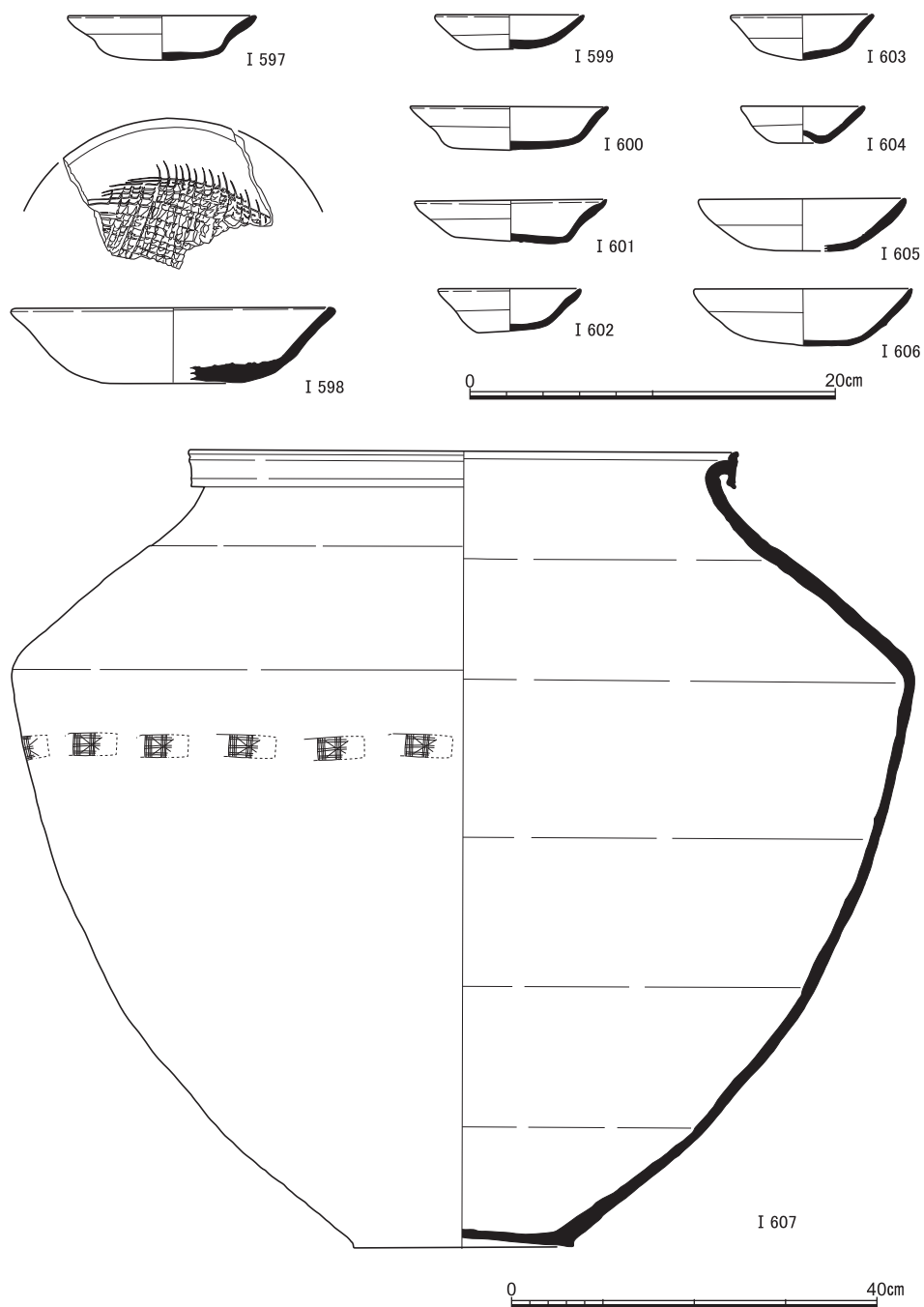


図50 S X13石敷出土遺物（I 597土師器，I 598古瀬戸），S X13土師器溜出土遺物（I 599～I 606土師器），S X13埋甕（I 607常滑） I 607縮尺1/8

I 593は備前焼の甕。口縁は断面円形の玉縁となっている。肩部外面上端に自然釉が薄く付着しており、頸部外面から肩部外面にかけて刷毛目による調整がおこなわれている。14世紀前葉から中葉のものとみなされる。

I 594は青磁底部片。畳付を露胎とする。I 595は灰赤色を呈する砥石。I 596は下部を失った用途不明の石製品。内面以外は原形を保ち、なめらかに仕上げられている。内面には、一部を欠くものの、弧状の溝が存し、それにもまた同様の作業がほどこされている。そのほかの部分にかんしては、割れ落ちた痕跡が認められる。

S X13出土遺物 (I 597～I 607) I 597はE₃類の土師器皿。I 598は古瀬戸の卸皿。中期様式のものであろう。底部から体部へ丸みをもって立ちあがり、口縁端部に面をもつ。灰釉を漬け掛けしており、底部外面を露胎とする。そこには回転糸切り痕が認められる。以上は石敷より出土。

I 599はE₁類の土師器小皿。I 600はE₁類、I 601はE₂類の土師器皿。I 602・I 603は白色系の土師器小碗、I 604は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 605・I 606は白色系の土師器碗。以上は土器溜より出土。

I 607は正位で埋められていた常滑焼の甕。口縁の一部を欠いている。口径60cm、器高87cmをはかる。口縁部に4cmの縁帯が形作られる、いわゆるN字状口縁となる。上胴部に押印文がめぐっている。第2段階7型式期のものに相当し、14世紀前半の作と考えられる。

S X21出土遺物 (I 608～I 620) I 608～I 611はE₁類の土師器小皿。I 612はE₃類の土師器皿。I 613は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 614・I 615は白色系の土師器碗。I 616・I 617は土師器受皿。

I 618は瓦器碗。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部内面下半から見込みにかけて暗文が認められる。和泉型IV－4期のものに相当しよう。

I 619は灰釉系陶器の底部片。I 620は白磁の底部片。高台の外面下半から底部外面を露胎とし、橙色を発している。胎土は灰白色を呈し、硬質・緻密となる。

S X14出土遺物 (I 621～I 627) I 621はE₁類の土師器皿。I 622～I 624は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 622・I 624は口縁端部をつまみあげている。I 625は白色系の土師器碗。

I 626・I 627は瓦器鍋。いずれも口縁端部を尖らせて仕上げています。

S X40出土遺物 (I 628～I 630) I 628はE₁類の土師器小皿。I 629は瓦器鍋。I 630は陶器碗の底部片。小さな輪高台が貼り付けられ、体部外面下端から底部外面を露胎

中世の遺跡

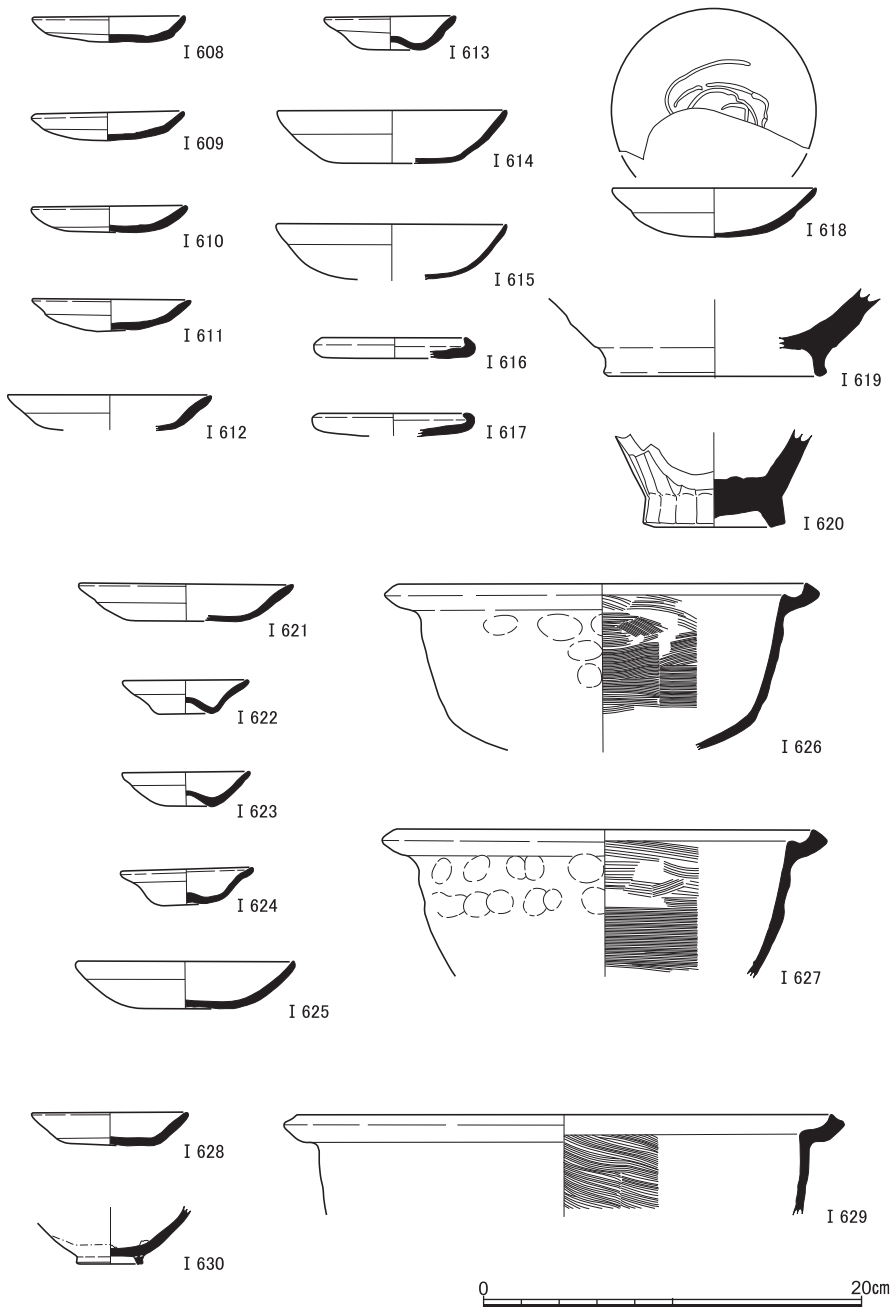


図51 S X21出土遺物（I 608～I 617土師器，I 618瓦器，I 619灰釉系陶器，I 620白磁），S X14出土遺物（I 621～I 625土師器，I 626・I 627瓦器），S X40出土遺物（I 628土師器，I 629瓦器，I 630陶器）

とする。底部内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

ピット出土遺物(I 631～I 660) I 631はC₄類, I 632～I 634はD₂類, I 635はD₄類, I 636はD₆類, I 637はE₁類, I 638はE₃類の土師器小皿。I 637は見込みに指で撫でた痕跡が明瞭に認められる。I 639はD₂類, I 640はD₃類, I 641は乙訓在地形, I 642～I 645はE₁類, I 646・I 647はE₂類, I 648はE₃類の土師器皿。I 649～I 653は白色系の土師器碗。I 654は断面が円形となる白色系の土師器高杯脚部。

I 655は瓦器羽釜。口縁端部が内側にわずかに出ている。I 656は瓦器鍋。口縁端部をつまみあげている。I 657は須恵器杯の底部片。I 658は青磁壺。口縁端部を外側に折り曲げている。I 659は白磁の底部片。底部外面を露胎とする。I 660は浅黄橙色を呈する砥石。

(5) 茶褐色土落ち込みの遺物(I 661～I 725, 図版28, 図53～55)

本調査区では、図28に示したように、茶褐色土を埋土とする不定形のくぼみが処々にみうけられた。それらは浅いものもあれば深いものもあった。ここでは、茶褐色土落ち込みという名称を付し、そこから出土した遺物にかんして紹介していくことにする。

I 661はD₂類, I 662はD₃類, I 663はD₅類, I 664～I 669はE₁類の土師器小皿。I 670はC₅類, I 671はD₁類, I 672・I 673はD₅類, I 674・I 675はE₁類, I 676はE₂類の土師器皿。I 677・I 678は白色系の土師器小碗。I 679～I 688は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 679・I 681は口縁端部をつまみあげている。I 687は口縁端部のあちこちに煤が付着している。I 689～I 695は白色系の土師器碗。I 696・I 697は土師器受皿。I 696は灰白色を呈する。

なお、E₃類の土師器皿、白色系の土師器碗の破片それぞれ1点に墨書が認められた。前者は口縁部内面から体部内面、後者は底部内面にそれがおこなわれている。前者は横棒に縦棒が3本ほぼ直交している。後者は文字である可能性が高い。

I 698～I 704は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲したもの、その端部がつまみあげられているものとなる。I 705は瓦器羽釜。口縁部が短く、内側にやや傾いている。

I 706は須恵器皿。口縁部が外反ぎみに長く立ちあがり、その端部をつまみあげている。I 707は須恵器杯の底部片。I 708・I 709は須恵器杯蓋。I 708はつまみが浅くへこむ。外面に自然釉が付着する。I 709は口縁端部が下方に伸び、その断面を三角形にしている。

I 710は山茶碗の小皿。口縁部がわずかに外反し、その端部を丸くおさめている。底部外面に糸切り痕が認められる。I 711は調査区南東部から出土した常滑焼の甕。口縁部に縁帯が形作られ、その断面はN字状を呈している。肩部外面上半に自然釉が付着する。第

中世の遺跡

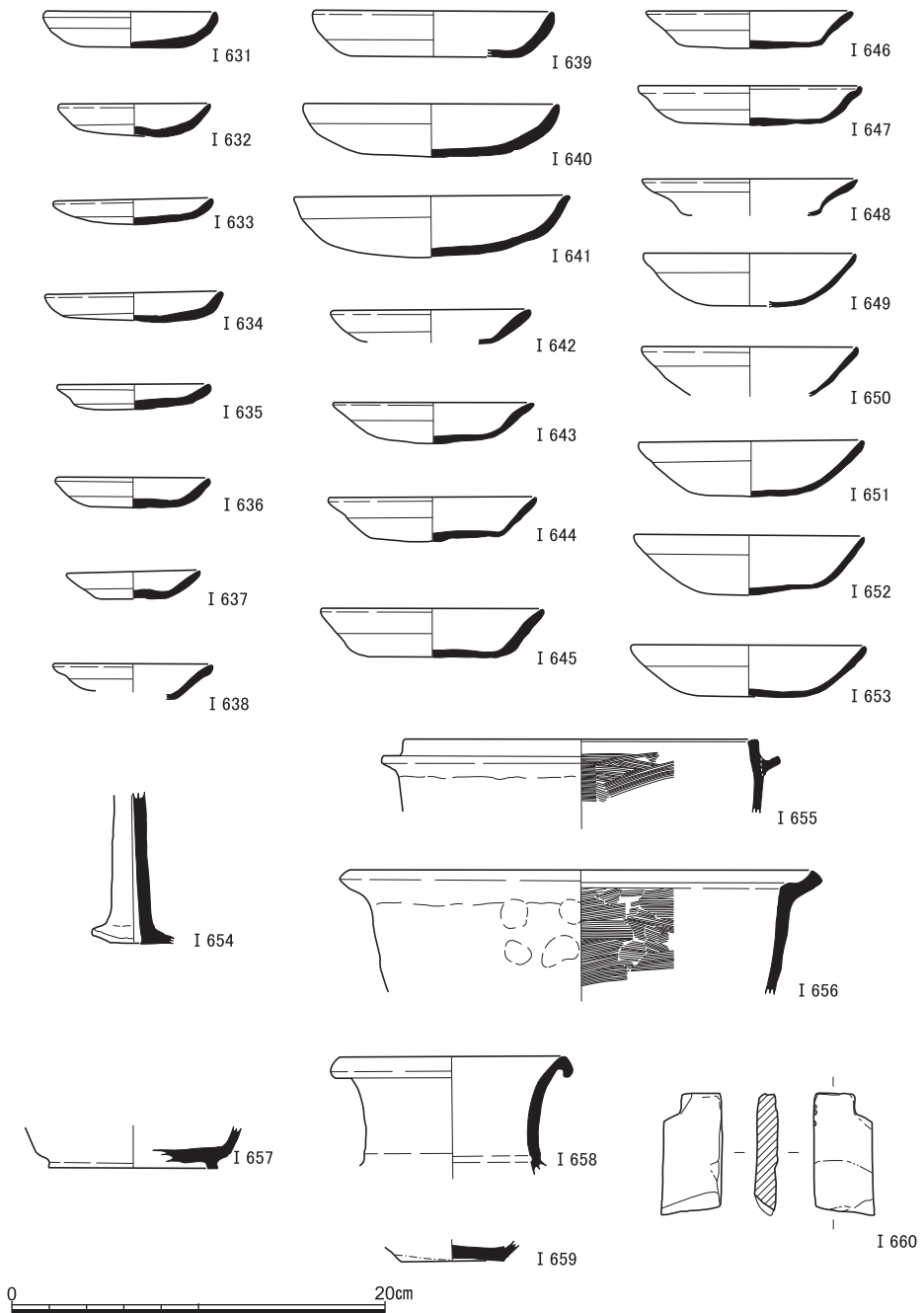


図52 ピット出土遺物（I 631～I 654土師器，I 655・I 656瓦器，I 657須恵器，I 658青磁，I 659白磁，I 660砥石）

2段階6 a型式期のものに相当し、13世紀第3四半期に作られたと判断される。

I 712は古瀬戸の卸皿。灰釉を漬け掛けしており、底部外面を露胎とする。そこには糸切りの痕跡がみうけられる。中期様式I期のものに一致すると思われ、1300年前後の作と推定される。I 713は緑釉陶器盤。体部は丸みをおび、口縁端部は折り曲げて玉縁状に作っている。体部内面下端に2条の沈線がめぐっている。底部外面を露胎とする。I 714は緑釉が薄くほどこされている陶器壺の底部片。低い高台が削りだされている。

I 715・I 716は青磁皿。体部中位で屈曲し、口縁端部は丸みをもつ。体部外面下半から底部外面を露胎とする。I 717は青磁碗の底部片。高台は断面四角で、その内部はえぐりがやや浅い。畳付およびその内部を露胎とする。内面に幾何学花文を描く。I 718は青磁浅形碗。体部は丸みをおび、内湾気味に立ちあがる。体部外面に鐫のない蓮弁文を有する。見込みには1条の浅い沈線がめぐっている。釉は鶯色を呈する。畳付およびその内部を露胎とする。I 719は青磁碗。体部は丸みもち、口縁端部がわずかに外反する。体部外面に蓮弁文を有する。高台は低く、その内面を浅くえぐっている。釉は夏虫色を呈する。畳付およびその内部は露胎となり、橙色を発する。胎土は緻密で、灰白色を呈する。

I 720は白磁皿。口縁端部はわずかに外反し、口禿げとする。釉は灰白色を呈し、全面にほどこされている。I 721は白磁皿。口縁部が外反し、その端部を口禿げとする。灰白色の釉が全面にほどこされているものの、底部外面のそれは板状の工具によって伸ばされている。I 720・I 721ともに13世紀後半から14世紀前半に増加するものとなる〔山本2000〕。

I 722は青銅製の金具。取っ手であろう。

I 723は硯。平面は長方形で、縁がすべて欠損する。裏面は断面を弧状に仕上げている。石材は黒色の粘板岩となる。I 724は灰黄色を呈する砥石。I 725は石臼。下臼で、下部周辺が鐫状に大きくひろがる茶臼となる。すり面および鐫部の多くは欠失し、臼目はわずかにしか確認できない。

(6) 茶褐色土の遺物 (I 726～I 756, 図版28, 図56・57)

中世の遺物包含層である茶褐色土から出土したものについて説明をくわえていく。

I 726・I 727はD₃類, I 728～I 730はE₁類の土師器小皿。I 731は乙訓在地形の土師器皿。I 732は白色系の土師器小碗。I 733～I 739は白色系の土師器くぼみ底小碗。I 734・I 737・I 738は口縁端部をつまみあげている。I 736は器壁が厚い。I 740は推定口径が23cmの橙褐色を呈する土師器皿。口縁部を横撫でで仕上げており、体部外面には指押さえ、体部内面には削りの痕跡が認められる。

中世の遺跡

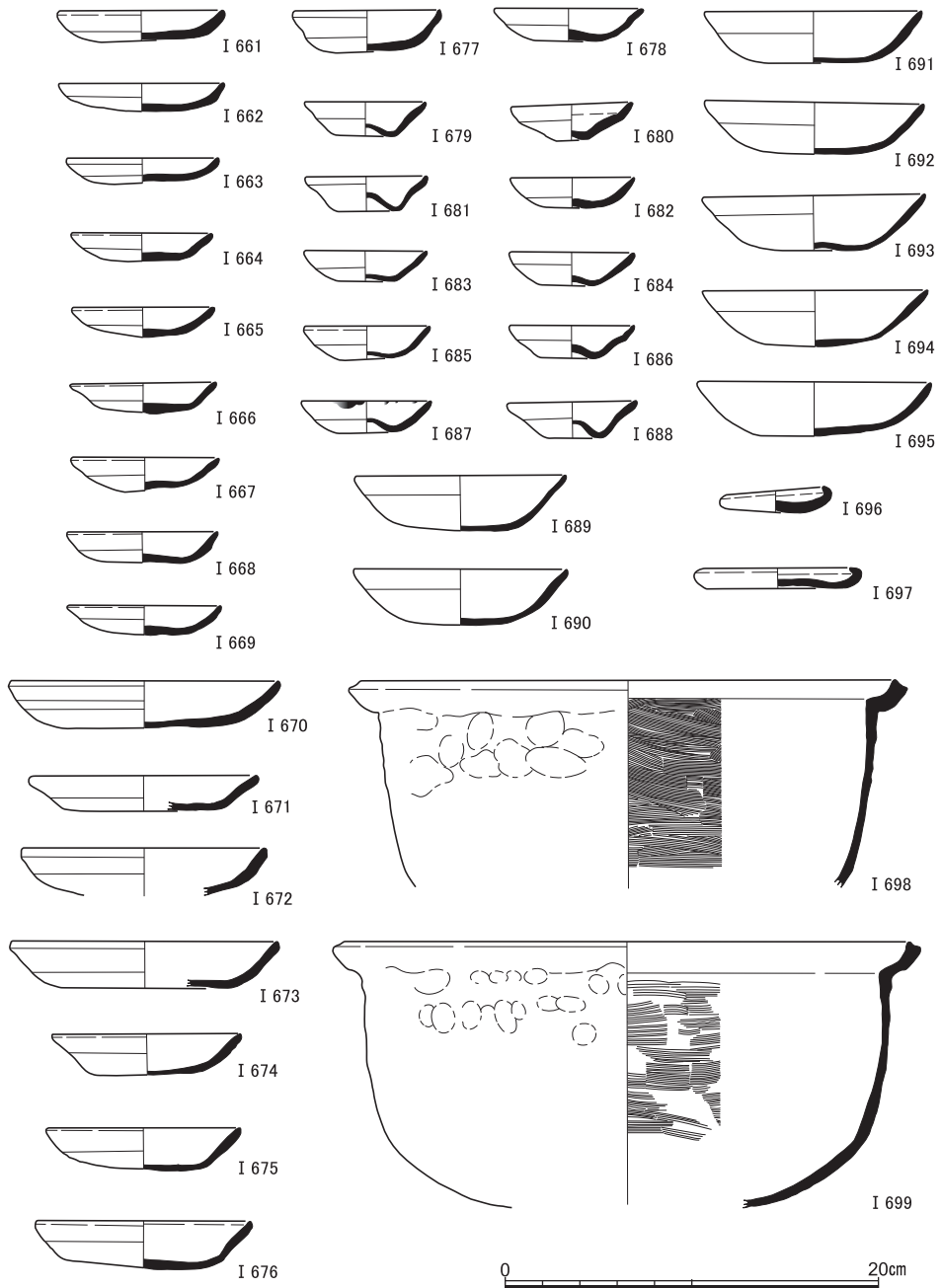


図53 茶褐色土落ち込み出土遺物(1) (I 661～I 697土師器, I 698・I 699瓦器)

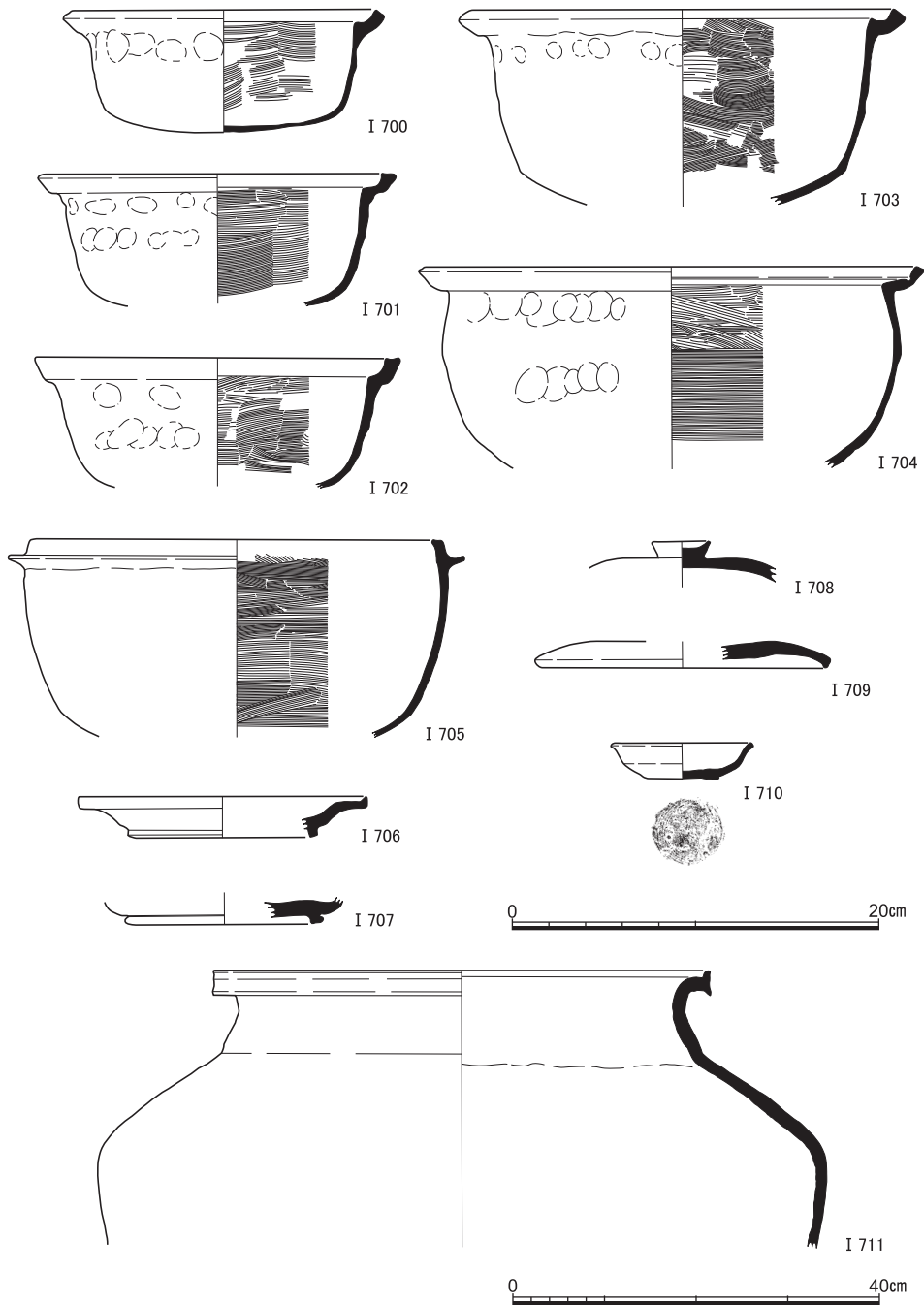


図54 茶褐色土落ち込み出土遺物(2) (I 700～I 705瓦器, I 706～I 709須恵器, I 710山茶碗, I 711常滑) I 711縮尺1/8

中世の遺跡

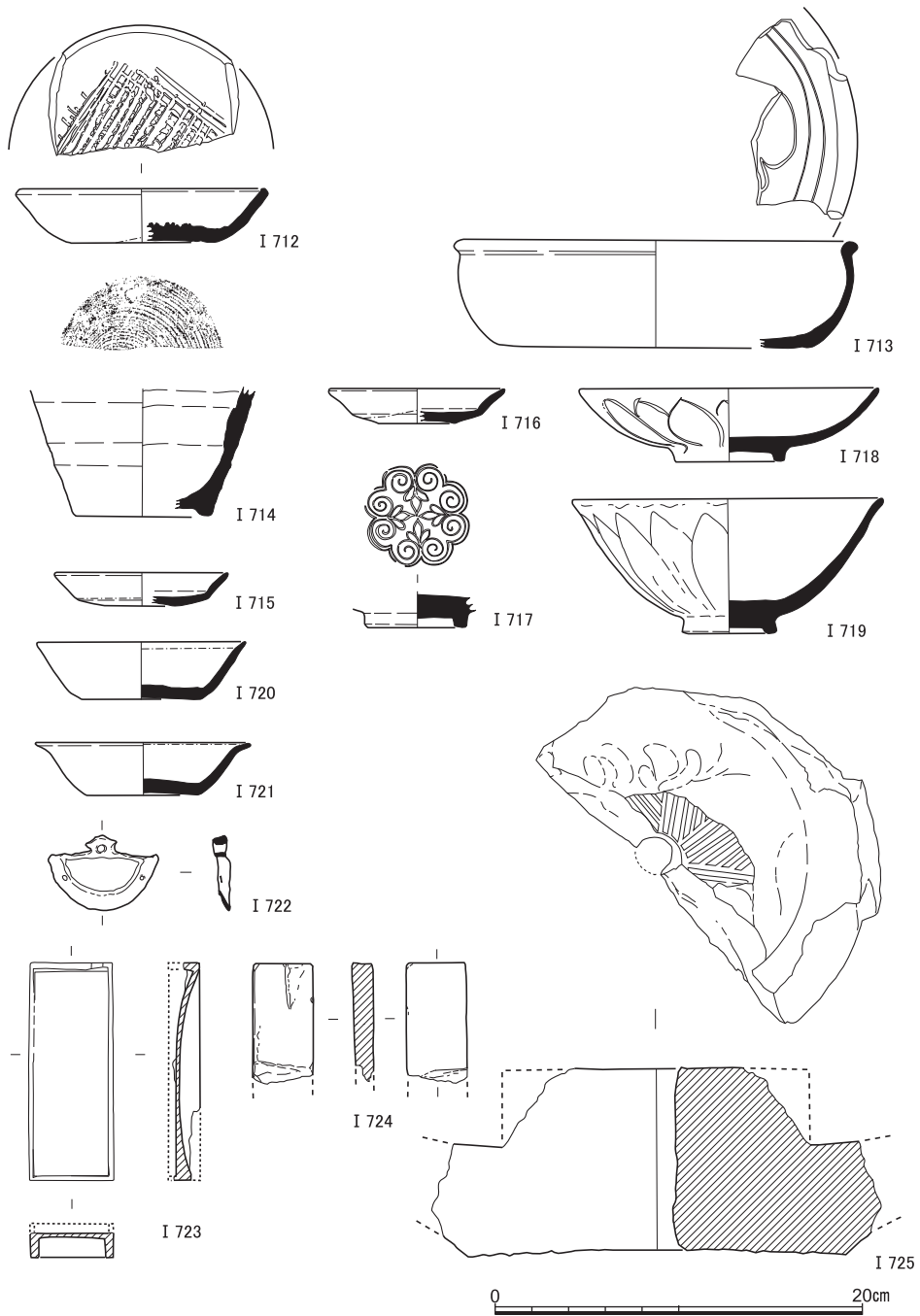


図55 茶褐色土落ち込み出土遺物(3) (I 712古瀬戸, I 713緑釉陶器, I 714陶器, I 715~I 719青磁, I 720・I 721白磁, I 722青銅製品, I 723硯, I 724砥石, I 725石臼)

I 741は瓦器羽釜。口径が推定で30cmほどとなる大型品。口縁部が長く延び、内側に傾いている。

I 742は古瀬戸の折縁深皿。底部内面に轆轤を用いた櫛描きによる同心円文がみうけられる。底部外面を露胎とし、体部外面から口縁部外面にかけて灰釉が刷毛により薄く塗られている。中期様式Ⅲ期のものに相当し、14世紀中葉ごろに作られたと考えられる。I 743は古瀬戸の瓶子。胴部外面には刷毛によって灰釉が薄く塗られている。胴部内面には粘土紐を輪積みにした痕跡が認められる。

I 744は完形の古瀬戸の四耳壺。本調査区の中央付近、図28の×印を付したところから出土した。口縁端部を玉縁状にし、強く張った肩部をへて、ゆるやかなふくらみをもつ胴部へと連なっている。肩部には型作りの耳が4つ貼り付けられている。向かい合う2つの耳にはそれぞれ3本・4本の筋目がみうけられる。くわえて、耳と耳のあいだに、それらをつなぐように沈線が存している。口縁部から貼り付けられた高台にかけて、おおよそ半分の箇所自然釉が付着している。ただし、肩部にはそれが全面に認められる。前期様式（13世紀）のものであり、完形である点、各地の出土事例などをふまえると、火葬蔵骨器として使われた可能性が高い。ちなみに、本調査区の北に位置する111地点からは、褐釉陶器四耳壺を用いた土壇墓S K 246・502が検出されている〔五十川・飛野1984〕。

I 745は古瀬戸の卸皿。糸切り未調整の平底から、体部は大きく開き、口縁端部は平坦に仕上げている。体部内面から底部外面にかけて灰釉が刷毛で塗られている。中期様式Ⅳ期のものにあたり、14世紀半ばに作られたとみなされる。I 746・I 747はいずれも橙色を呈する陶器卸皿。

I 748は青磁壺の口縁部片。口縁端部を外側に折り曲げ、玉縁状にしている。I 749は青白磁の合子身。体部上半および内面に釉がかけられている。

I 750～I 752は石鍋。いずれも口縁直下に削りだされた鐔がめぐっている。I 753は硯。平面形は海の側が少し狭くなる台形となる。裏面には剥離痕が認められる。縁の部分の大半が欠損する。黒色の粘板岩を材料とする。I 754～I 756はいずれも灰白色を呈する砥石。

(7) 銭 貨（I 757～I 846, 図58～60）

本調査区からはあわせて160点の渡来銭が出土している。北宋銭がその大部分を占める。それらのうち中世の遺構、茶褐色土落ち込み、茶褐色土からみつきり、かつ文字が割合に明瞭なものをえらんで図に掲げた。

I 757～I 802は、S K 8の埋土から出土した。先に述べたように、そこからは61枚の銭

中世の遺跡

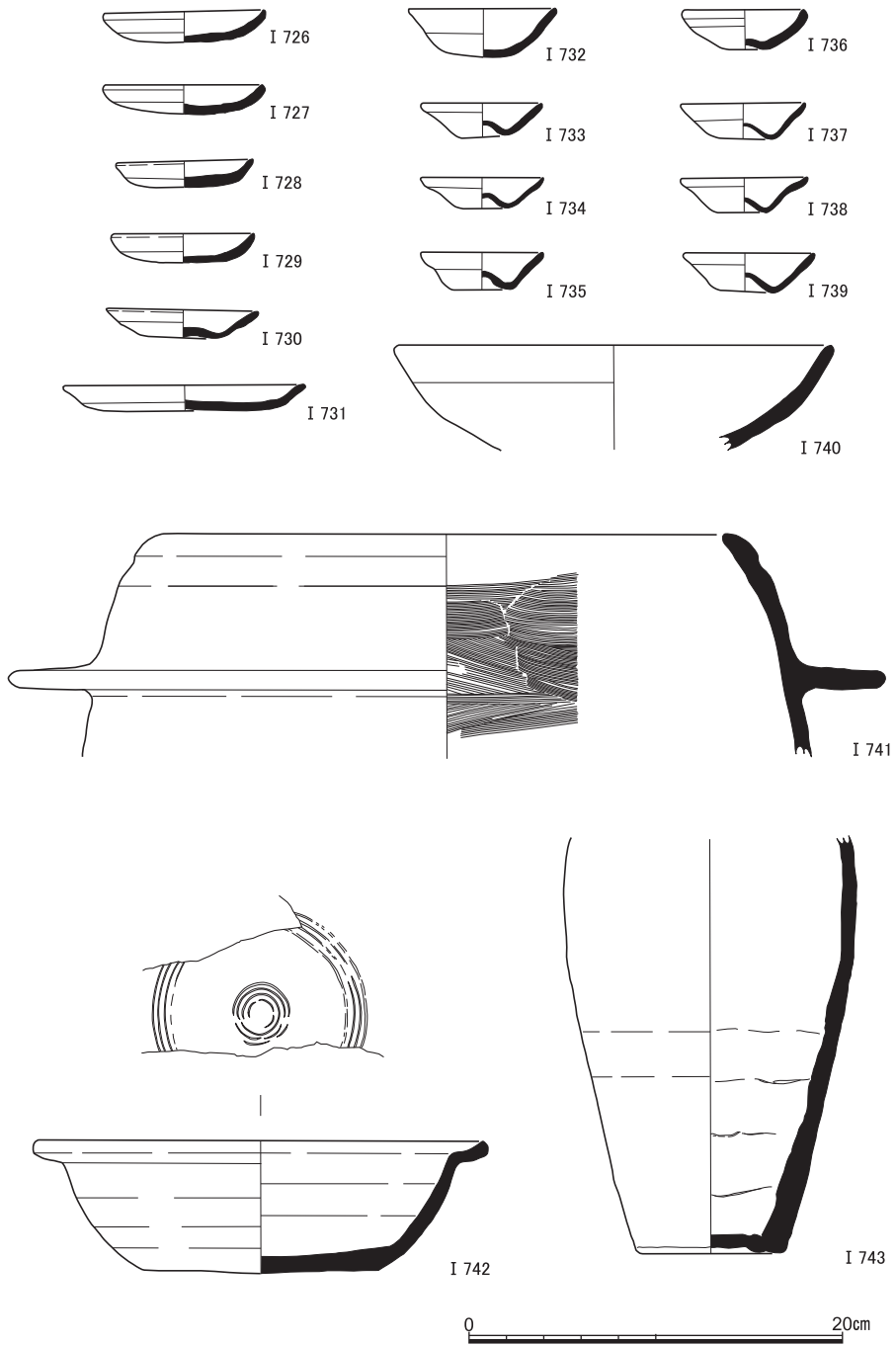


図56 茶褐色土出土遺物(1) (I 726～I 740土師器, I 741瓦器, I 742・I 743古瀬戸)

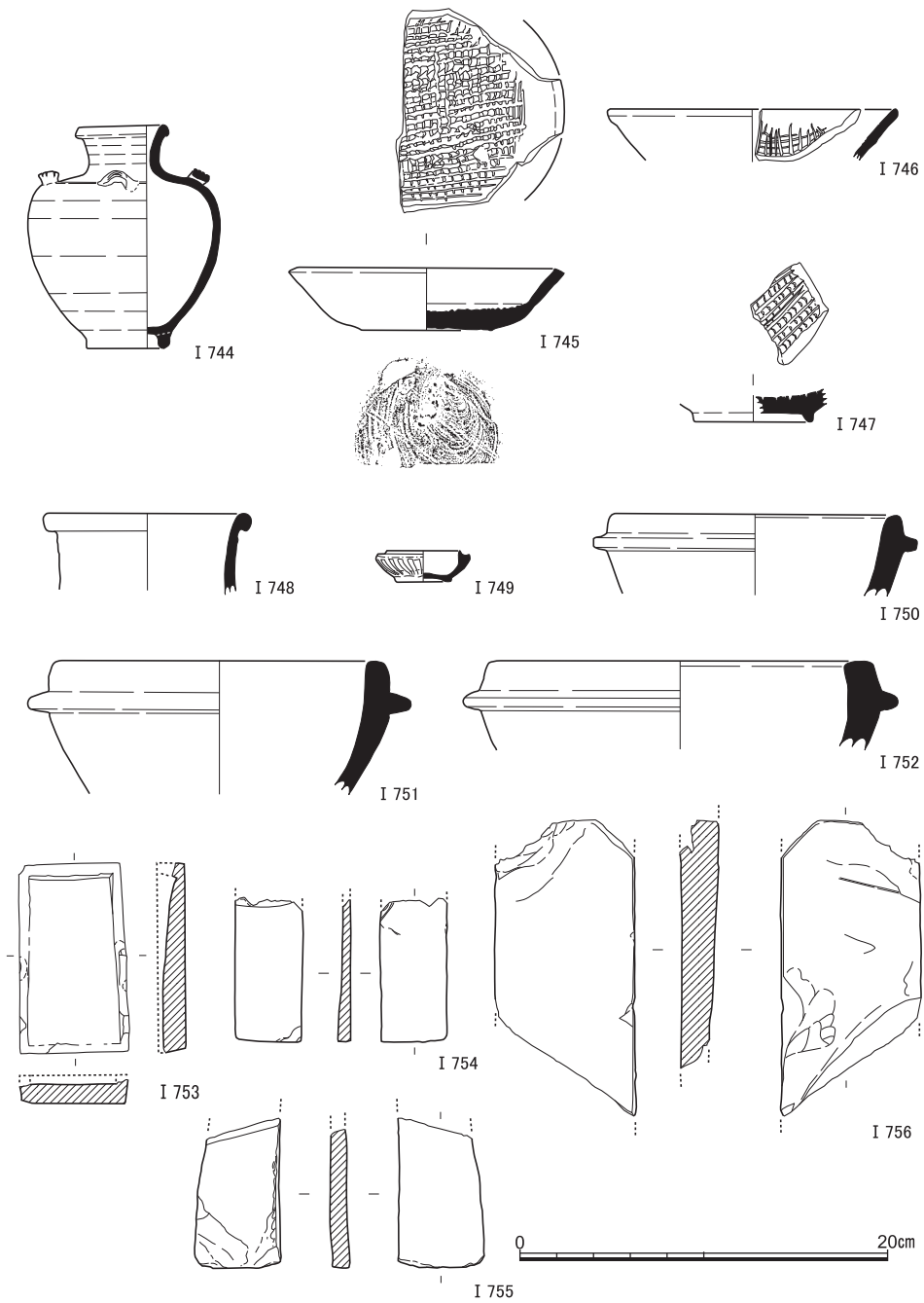


図57 茶褐色土出土遺物(2) (I 744・I 745古瀬戸, I 746・I 747陶器, I 748青磁, I 749青白磁, I 750～I 752石鍋, I 753硯, I 754～I 756砥石)

中世の遺跡

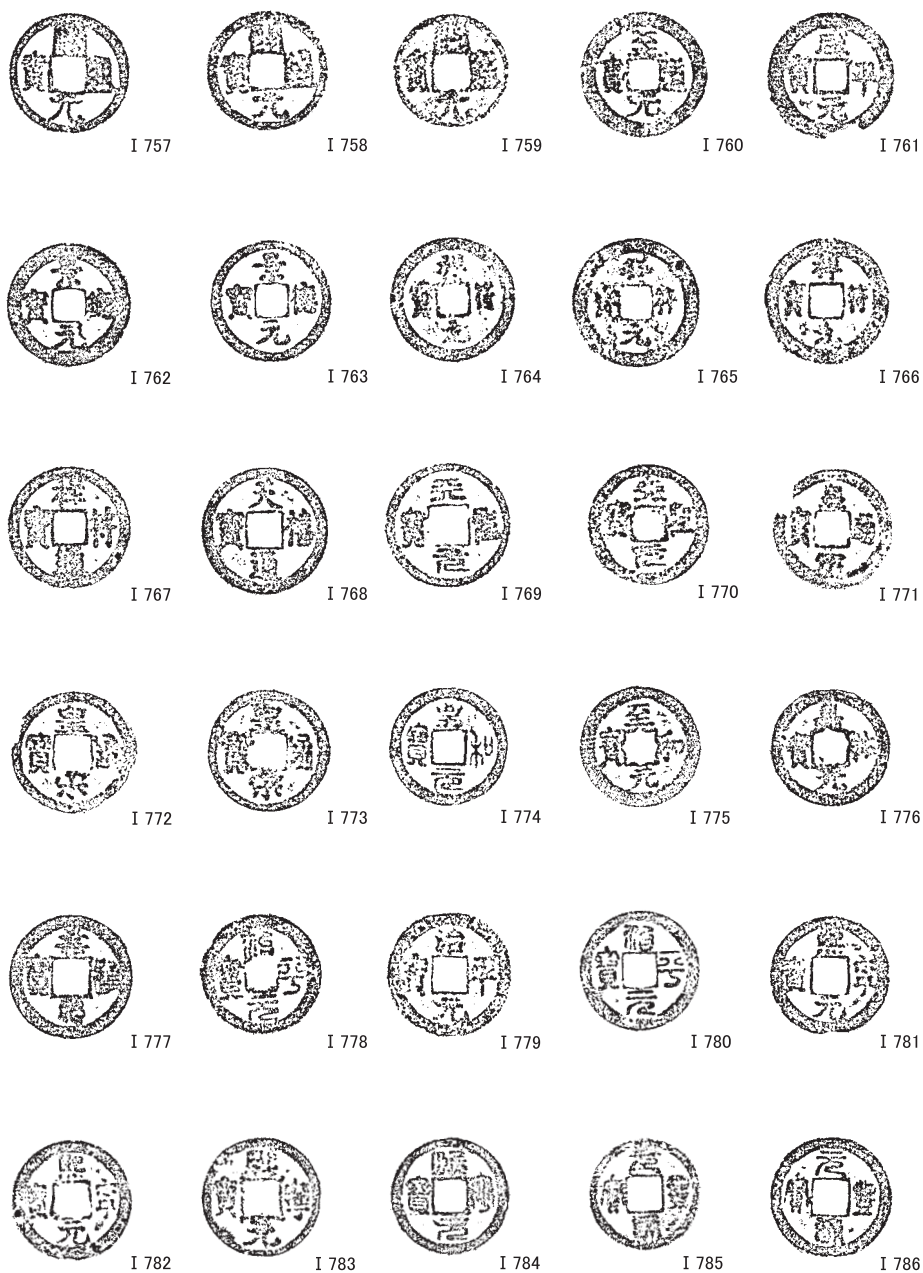


図58 銭貨(1) (I 757~I 786) 縮尺2/3

貨がみついている。ただし、そのうちの6枚にかんしては、文字の一部ないしはすべてを読みとることができない。

I 757～I 759は、唐銭の開元通宝で、武徳4年(621)および会昌5年(845)が初鑄となる。これらのほか2枚のそれが出土している。

I 760～I 802は北宋銭。I 760は、至道元年(995)初鑄の至道元宝。I 761は、咸平元年(998)初鑄の咸平元宝。I 762・I 763は、景德元年(1004)初鑄の景德元宝。I 764～I 766は、大中祥符元年(1008)初鑄の祥符元宝。I 767は、大中祥符元年初鑄の祥符通宝。I 768は、天禧元年(1017)初鑄の天禧通宝。このほか1枚のそれがみついている。I 769・I 770は、天聖元年(1023)初鑄の天聖元宝。I 771～I 773は、宝元2年(1039)初鑄の皇宋通宝。これらのほか2枚のそれが出土している。I 774・I 775は、至和元年(1054)初鑄の至和元宝。I 776は、嘉祐元年(1056)初鑄の嘉祐元宝。このほか1枚のそれがみついている。I 777は、嘉祐元年初鑄の嘉祐通宝。I 778～I 780は、治平元年(1064)初鑄の治平元宝。I 781～I 784は、熙寧元年(1068)初鑄の熙寧元宝。I 785～I 788は、元豊元年(1078)初鑄の元豊通宝。これらのほか1枚のそれが出土している。I 789～I 793は、元祐元年(1086)初鑄の元祐通宝。I 794～I 797は、紹聖元年(1094)初鑄の紹聖元宝。I 798は、元符元年(1098)初鑄の元符通宝。I 799は、建中靖国元年(1101)初鑄の聖宋元宝。このほか1枚のそれがみついている。I 800は、大觀元年(1107)初鑄の大觀通宝。I 801・I 802は、政和元年(1111)初鑄の政和通宝。これらのほか1枚のそれが出土している。

I 803は、S X24からみつかった元祐通宝。

I 804・I 805は、S X13の埋甕底部直下から出土した元豊通宝・元祐通宝、I 806は、埋甕の掘形埋土からみつかった開元通宝。

I 807～I 829は、茶褐色土落ち込みから出土した。

I 807は開元通宝。I 808は至道元宝。I 809は祥符元宝。I 810は祥符通宝。I 811・I 812は天聖元宝。I 813～I 815は皇宋通宝。I 816・I 817は熙寧元宝。I 818・I 819は元豊通宝。I 820・I 821は元祐通宝。I 822は紹聖元宝。I 823は元符通宝。I 824～I 826は聖宋元宝。I 827・I 828は政和通宝。I 829は、宣和元年(1119)初鑄の北宋銭・宣和通宝。

I 830～I 846は、茶褐色土からみつかった。

I 830は開元通宝。I 831は至道元宝。I 832は咸平元宝。I 833は天聖元宝。I 834・I 835は皇宋通宝。I 836・I 837は嘉祐通宝。I 838は治平元宝。I 839は熙寧元宝。I 840・

中世の遺跡

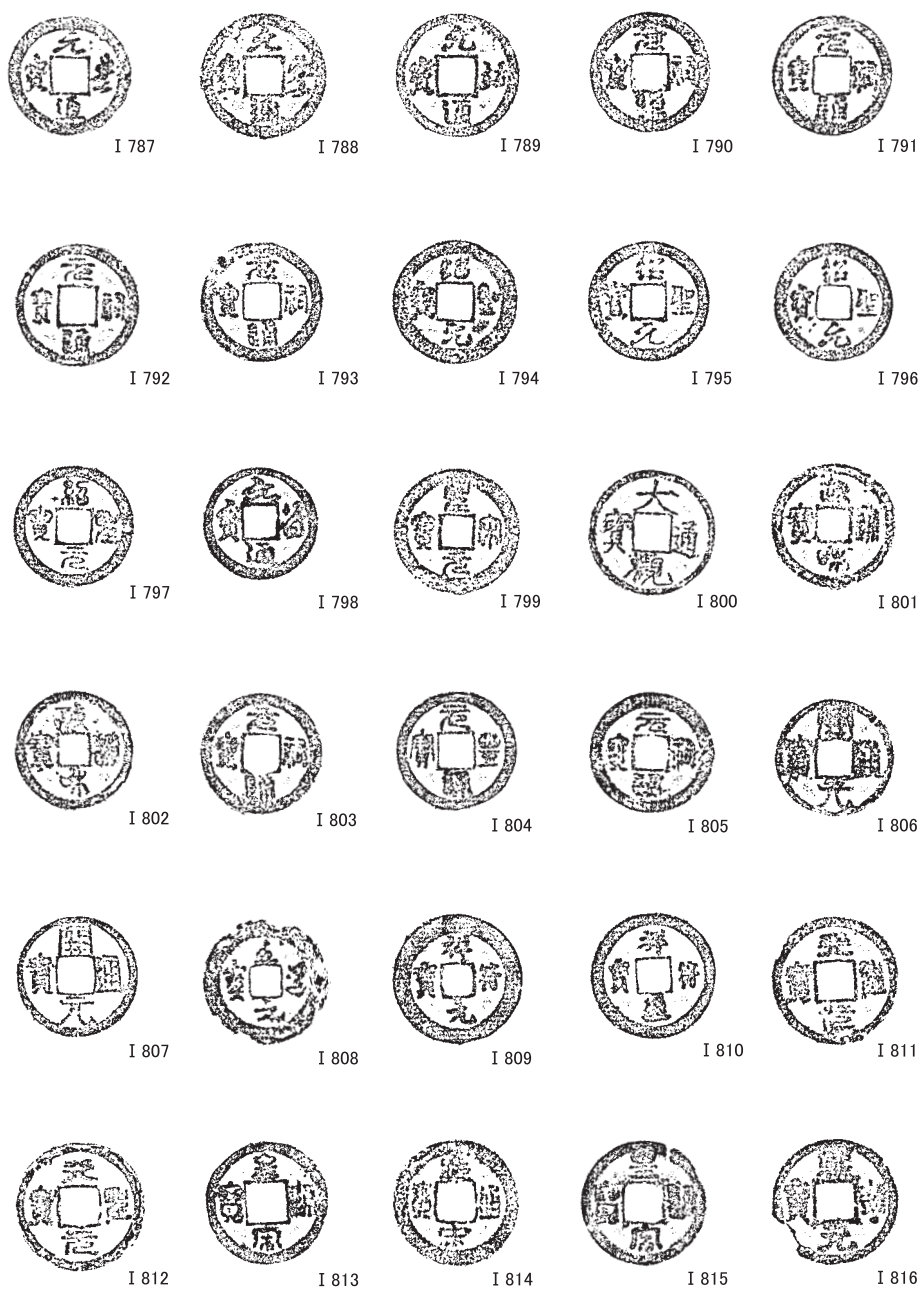
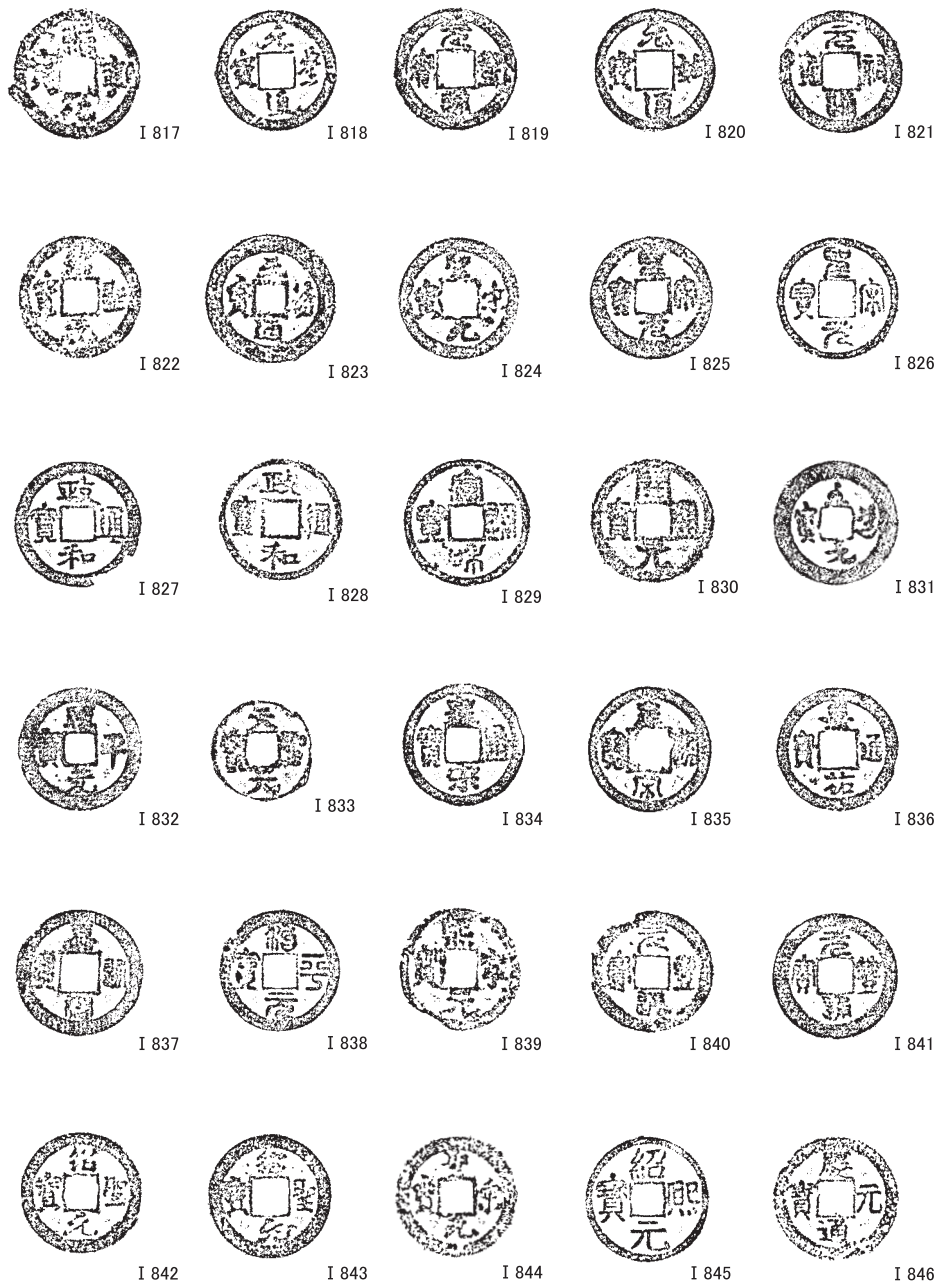


図59 銭貨(2) (I 787～I 816) 縮尺2/3



0 5cm

図60 銭貨(3) (I 817~I 846) 縮尺2/3

I 841は元豊通宝。I 842・I 843は紹聖元宝。I 844は聖宋元宝。I 845は、紹熙元年（1190）初鑄の紹熙元宝、I 846は、慶元元年（1195）初鑄の慶元通宝で、いずれも南宋銭。

(8) 古代・中世の瓦磚類（I 847～I 877, 図版29・30, 図61～64）

軒丸瓦（I 847～I 854） I 847は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房に4 + 1の蓮子をもつ。S X 46より出土。I 848は単弁推定十八葉蓮華文軒丸瓦。蓮弁は細長く尖り気味で、子葉は突線であらわされている。外区に圈線を1条めぐらせている。S X 21より出土。I 849は複弁八葉蓮華文軒丸瓦。一段高い中房に「卍」をおき、外区に珠文と圈線をもつ。裏面に指の圧痕を残す。茶褐色土より出土。I 850は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房に1 + 8の蓮子をおき、その周囲に雄蕊帯をめぐらせている。雄蕊帯には25本の放射状突線が認められる。蓮弁は丸みをおび、その突端を尖らせている。外区に圈線を1条もつ。外周上部から丸瓦凸面および瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて縦方向の撫でがほどこされている。茶褐色土より出土。

I 851は右卷三巴文軒丸瓦。範の打ち込みは浅く、全体的に摩滅している。外周上部は縦方向の篋削り、瓦当裏面は横方向の撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土より出土。I 852は外区に珠文帯を有する左卷三巴文軒丸瓦。ただし、内区に1個の珠文が認められる。外周上部から丸瓦凸面にかけて縄叩き、瓦当裏面には横方向の撫でがほどこされている。茶褐色土より出土。I 853は左卷三巴文軒丸瓦。外区内縁に珠文をもち、外縁が突出している。外周から丸瓦凸面および瓦当裏面は撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土落ち込みより出土。I 854は外区に珠文帯を有する左卷三巴文軒丸瓦。全体的に摩滅しており、調整の仕方は判然としない。茶褐色土落ち込みより出土。

軒平瓦（I 855～I 869） I 855・I 856は均整唐草文軒平瓦。肉厚な唐草がゆるやかに伸びている。I 855は凹面に布目圧痕が残る。I 856は瓦当裏面に横方向の撫でがほどこされている。前者はピット、後者は茶褐色土落ち込みより出土。I 857は唐草文軒平瓦。硬化した唐草文を配する。瓦当折り曲げ式で、その裏面に指頭圧痕がみうけられる。凸面は撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土より出土。I 858は唐草文軒平瓦。唐草文がくずれ波状をなしている。瓦当折り曲げ式で、瓦当面に布目痕が残る。また、その裏面には縄叩き痕が認められる。茶褐色土より出土。I 859は均整唐草文軒平瓦。中心飾りに蓮華文をおき、6反転する簡略化した唐草を左右に配する。外区上部および脇区に珠文帯をもつ。凹面は布目痕の大部分を撫で消している。顎には横撫で、瓦当裏面から凸部にかけて縦方向の撫でがほどこされている。茶褐色土落ち込みより出土。

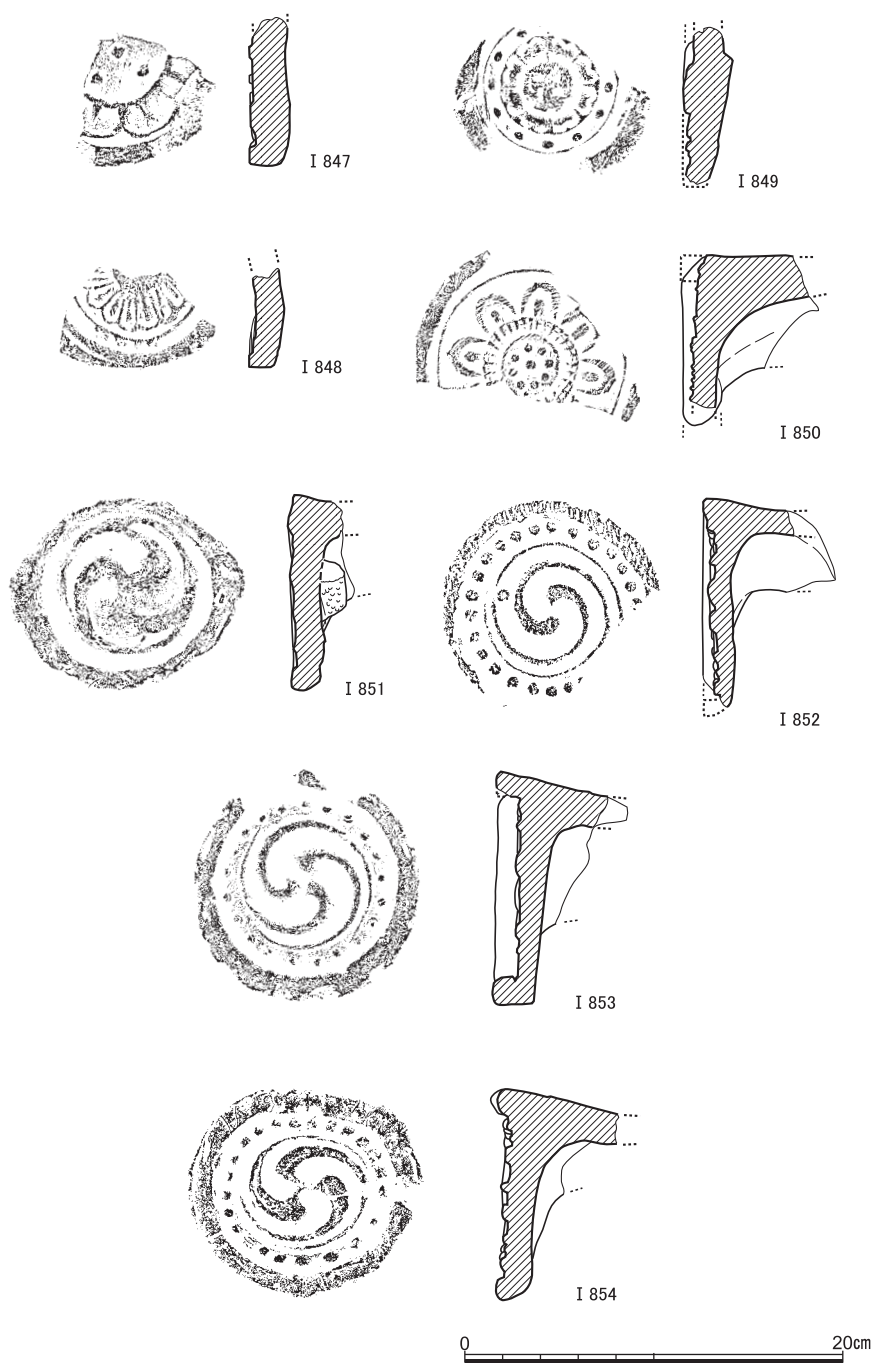


図61 軒丸瓦 (I 847～I 854)

中世の遺跡

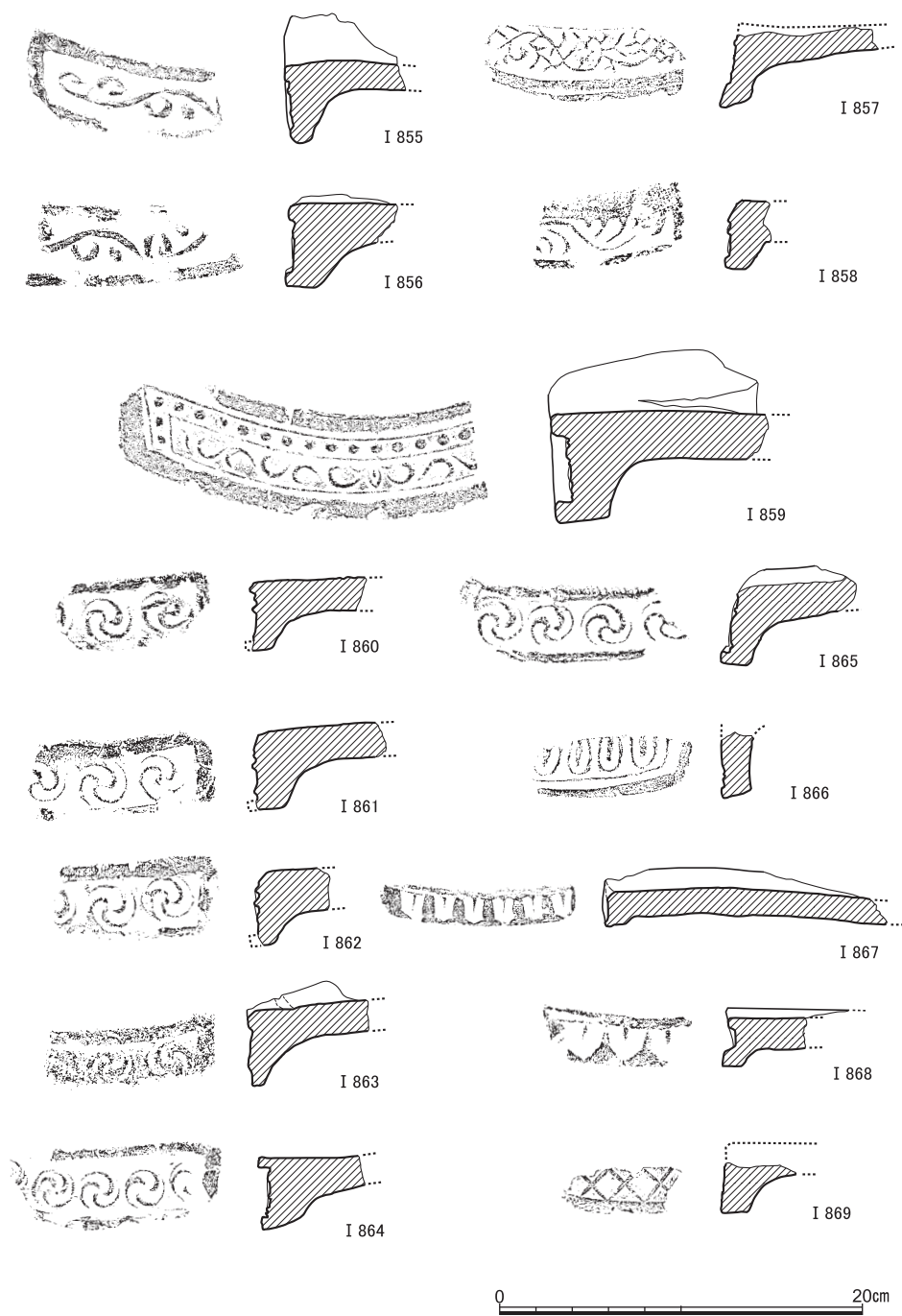


図62 軒平瓦 (I 855～I 869)

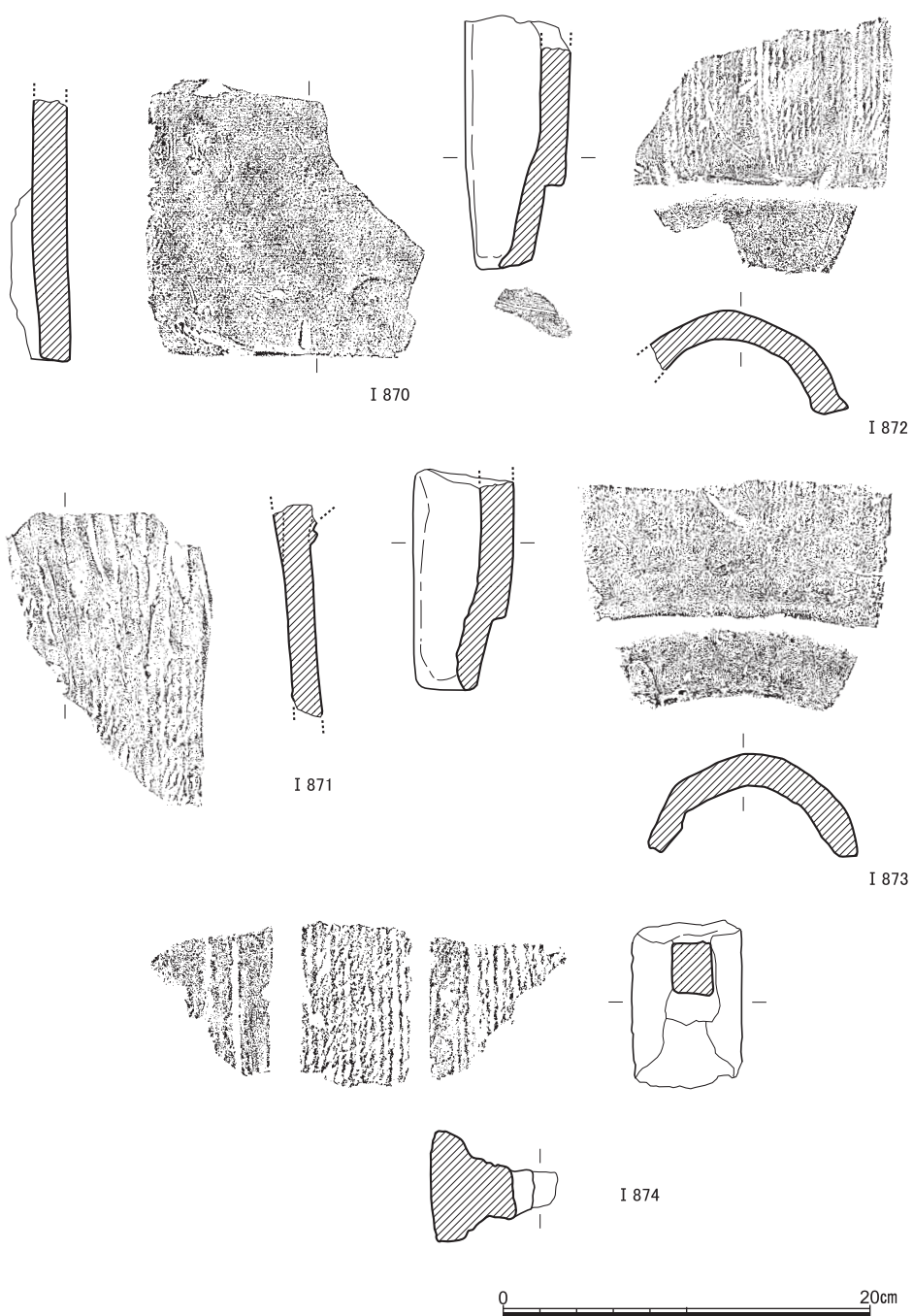


図63 丸瓦 (I 870～I 873)・埴 (I 874)

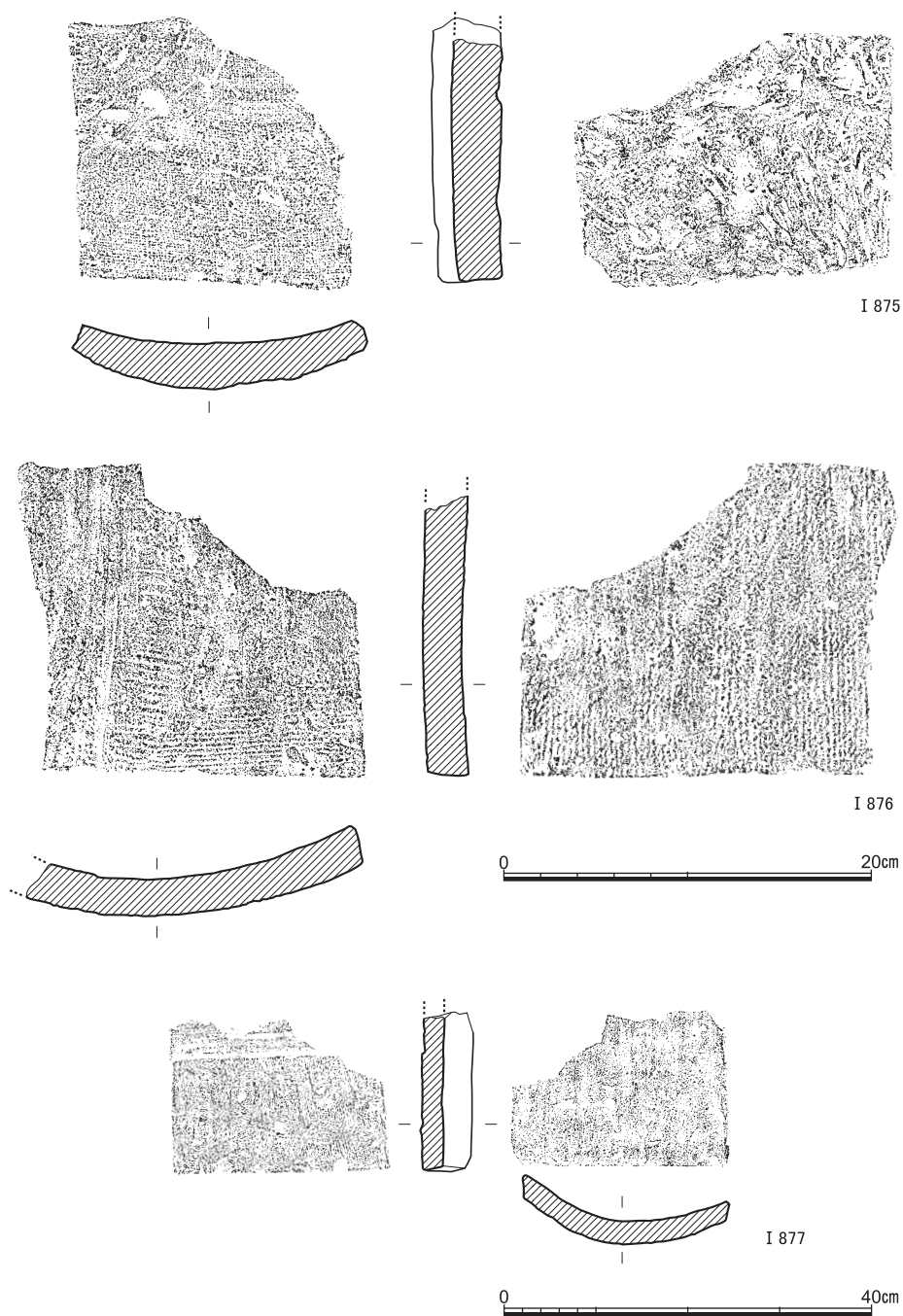


図64 平瓦（I 875～I 877） I 877縮尺1/8

I 860～I 865は連巴文軒平瓦。それらのなかには、中心飾りがおかれているものも含まれているだろう。いずれも凹面に布目圧痕が残るけれども、I 863・I 864はその大半が撫で消されている。I 860・I 861は茶褐色土落ち込み、I 862～I 865は茶褐色土より出土。

I 866～I 868は剣頭文軒平瓦。I 866は単弁で子葉を有する陽刻剣頭文を配している。S X21より出土。I 867は上下幅の狭い瓦当面に、こぶりの陰刻剣頭文をならべている。凹面に細かい布目痕が残る。また、顎から瓦当裏面にかけて横撫でによって調整がおこなわれている。茶褐色土落ち込みより出土。I 868は彫りの深い陰刻剣頭文を配する。凹面に細かい布目、瓦当裏面に横撫での痕跡が認められる。S D10より出土。

I 869は格子文軒平瓦。茶褐色土落ち込みより出土。

丸瓦・平瓦・塼（I 870～I 877） I 870～I 873は丸瓦。I 870は凹面に布目痕を残し、凸面には横方向に丁寧な撫で調整がおこなわれている。S D4より出土。I 871は瓦当部が欠落したもの。凹面に布目の痕跡が認められ、凸面には縄叩きの後、縦削りがほどこされている。S X44より出土。I 872・I 873はいずれも玉縁がつく。凹面に布目の痕跡を残し、凸面には縄叩きがおこなわれている。I 872には玉縁端面、I 873には凸面に曲線状の篋記号がみうけられる。前者はS X27、後者は茶褐色土落ち込みより出土。

I 874は塼。中央部がくぼみ、断面形が「I」字形となる。凹部に円孔の一部が認められる。側面の一方および端面に縄叩きがほどこされている。S D2より出土。

I 875～I 877は平瓦。I 875は凹面に布目、凸面に指押さえの痕跡が残る。茶褐色土落ち込みより出土。I 876は凹面に横位の糸切り痕がみうけられ、凸面には縄叩きをおこなっている。茶褐色土より出土。I 877は凹面に細かな布目痕を残し、凸面には縄叩きがほどこされている。ただし、凸面は端面から12cmのあたりで直線的にくぼんでおり、その低くなったところの表面には横位の糸切り痕が認められる。なお、凸面には離れ砂が付着している。茶褐色土より出土。

7 近世の遺跡

第3層（茶褐色土）上面で遺構検出をおこなうと（図65）、東北辺では東に5°振れて南北方向にはしる溝S D1を、中央付近では素掘りの野壺S E2を、それぞれ検出した。ともに遺物はほとんど含まれない。20cm前後の方形ないし円形のピットは、調査区全面で多数検出している。東西方向に規則的に並ぶ状況を確認できる場合もあるが、南北で対応するものを抽出できないので、建物跡ではなく農耕に関わるものだろう。また、調査区中央

近世の遺跡



図65 近世の遺構 縮尺1/300

(Y=2100辺り)の北半で南北方向に集中してみられる部分は、土地の区画を示すものかもしれない。

この集中部の南側では、南側および西側に下がる約20cmの段差を検出した。段差下の黒褐色土からの出土遺物には、近現代に帰属することが明確なものを認められなかったが、段差のラインは、北半の南北方向の杭の集中部や調査区全体の東西方向の杭群よりも西に振れ、ほかの近現代の穴列など軸線が平行する。したがって、この段差については、段差下位の溝も含め、近現代の産物と判断する。

調査区西辺では、近現代の陶磁器類を多数包含している廃棄土坑を複数確認したが、中央以東では、近現代の陶磁器類もあまり多くは出土しなかった。近世の遺物は、17世紀と判断できる遺物はほとんどなく、それ以降の時期でも出土量が少ない上にはほとんどは破片である。中央辺のピットSP1からは、完形の印が出土しており(図66)、近世と判断している。体部下半に紐通しの穿孔を認められる。

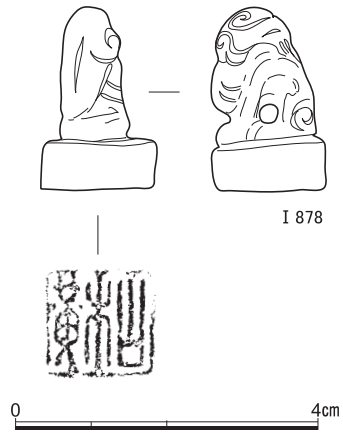


図66 近世の印 原寸

8 小 結

(1) 遺跡・遺物の調査研究法の試み

レーダー探査 本調査区では、1990年度に地中レーダー探査を実施している〔浜崎1991〕。こうした探査は、当時まだあまり実施されておらず、その点では重要な試みだった。そのときの成果の一つとして、本調査区西北辺に当たる部分での南北方向の大溝の存在が指摘された。そして、周辺地点での既往の発掘成果を加味した条坊復元に基づく歴史地理学的な理解で、その大溝は古代に掘削され中世でも機能していたと想定された。

発掘によって大溝の存否を確かめ得たのは、20年後の今回の発掘調査ということになる。はたして、それに相当すると思われる大溝が、実際にSD2として検出された。年代こそ中世後半であって、掘削が古代に遡る可能性を示唆することはなかったものの、レーダー探査の結果は実証されたと言える。その一方で、発掘調査で大きな成果の得られた、幅や深さの点で規模的にあまり遜色のない、そしてほぼ同一面で検出されている、古墳の周溝はこのときのレーダー探査では検出されなかった。

地中探査法においては、探査結果では、遺構が有るか無いか、有る場合にはその年代を

いつ頃と推定するか、という読み取りや解釈の上での課題を生むことは確かである。しかし、探査の実施によって、遺構によっては掘削しなくても存在を指摘し得るものがあることは、今回の発掘でも実証された。地中探査法は、緊急発掘調査での作業工程の策定や、学術調査での発掘地点の設定において、あるいはむしろ掘削を避ける目的の遺跡保存において、判断素材として有効に機能する場合もあろう。

遺物の出土状況分析 弥生中期の方形周溝墓と古墳中期の8・9号墳で、遺物の出土状態に留意した。出土状況の原位置分析は、墓のような、行為者の行為目的が比較的明瞭で、器物をともなった行為が為されたその状態を保つように案配されることの多い遺構では、行為者の意図にも接近し得る。非日常的な空間のために、器物が人為的な二次的移動を被る確率は低いと考えられ、実際に、元の形状をよく維持した状態で出土することも多い。本項では、方形周溝墓の分析についてまとめ、古墳については別項で詳述する。

弥生中期後葉の方形周溝墓では、型式学的に先行する東接する261地点の方形周溝墓では複数の土器が接近して出土する事例が多いのと対照的に〔千葉・阪口2005〕、3点の土器がそれぞれ離れて出土した。土器の系譜的特徴と出土地点におよその対応を認めうる点は興味深いが、偶然かもしれない。さて、南の周溝から出土した伊勢系の壺（I 21）は、横位で出土したが、中世の攪乱を受けて二次的に少し移動した可能性がある。

北の周溝の在地的とも捉えうる甕（I 20）も、横位で出土した。中世に口縁部の損壊を被ったが、遺構検出によって中世の遺構に切られた土坑と認識して掘削してから土器が出土した発掘過程に照らしても、既に横位になって埋積した後に損壊を被ったことは明瞭である。しかし、底裏面が周溝底面に直交して出土したけれども、この土器は、口縁側が重いので横位に置いても十分にバランスが取れ、底部側に傾くわけでもない。つまり、正位に据えられていたとしても、溜まった雨水など内容物があれば、横転したときに勢いもつくから、この体位を保つことは可能だろう。供献時に横位だったと断定はできない。

その一方、西の周溝の南縁で出土した、淀川水系を中心とした近畿西部系の水差（I 19）については、個体の向き、特定破片の出土位置や傾きなどから、正位でなく横位に安置されていた可能性を指摘した。正位で安定するための重厚な台部を有しながら、ライフ・ヒストリーの最終段階では、おそらくは接地面に凹凸をつけて安定させた横位状態で機能していたことになる。これは、焼成時の変色部をやや逸れたところに施された焼成後の穿孔部が、出土時に地面側を向いていたことにも関わろう。弥生時代には、胴体下半の穿孔部が地面側を向く状態で据え置かれる埋設土器がしばしば確認される。なお、穿孔部と把

手との位置関係を考慮すれば、穿孔箇所の設定は把手に規制されていたとも解釈できる。

遺物の破損状況分析 出土遺物については、破片の接合で明らかになる割れ線（＝破損線）の観察を、中世の埋甕S X13（I 607）と、陶器溜S X20から出土した3個体の甕（I 582～I 584）で試みた。中世の埋甕S X13の大甕は、土中に正位で据えられており、内部に焼土や包含層と同じ茶褐色土が埋積し、少量の銭貨も包含していた。埋設状態の東面の胴下半部に2箇所、中心が上下に並ぶ蜘蛛の巣状の破損線が展開し、ともに破片が外側にやや張り出す（図版13-3）。しかし、それらの中心たる割れの起点からの破損線は全面には広がらない。また、それ以外の胴下部では、破損線は水平方向に横走するか、水平に近い角度で斜走する。その一方で、口縁部から胴上部までは、肩部の屈曲をおよその境にして、口縁側も胴部側も、器体に対して縦方向に割れの幹線が走る部分が多い。すなわち、正位の状態で俯瞰すれば、同心円状よりも放射状の破損幹線を多く認める（図版13-2）。この大甕は、粘土帯の積み上げで成形されているが、埋設された状態を維持したままでひび割れる時には、このような縦走する破損線が主体になることもあるのだろう。

一方、陶器溜S X20から出土した破片の多くは、接合によって同様の器形の甕3個体分の屈曲部上位から口縁部にかけてのものと判明した。胴下半部の破片は少量で、底部はない。これらの3個体はいずれも、器体に対して縦方向に破損線の幹線がはしる部分が多い。出土時の破片の集合状況では（図版11-6）、I 582は、およそ遺構の下位の主たる構成破片となっているが、複数の大破片にわかれている。I 583・I 584は、上位であり大きなまとまりもなく、また双方に分布的排他性もなく、出土する。しかし、前者と後二者との間で埋土が少しでも厚いわけではない。以上から、別のところで割れた3個体分のおもに口縁部が集められて捨てられたと言える。

ほかの遺構やほかの遺跡の事例をまだあまり多く実見していないが、1mほどの大きさの甕において、屈曲部から口縁部にかけての破片が縦に長く接合してその長方形ないし脚台形のまとまりがいくつも存在する例を、今のところ確認できていない。ただ、時代や器形も異なり、したがって焼成や脆弱性も異なるが、縄文土器の深鉢では、正位に据えられて内外に土が充填される埋甕炉で、同様に、器体に対して縦方向に破損幹線のみがはしる個体は散見できる〔富井2011 p395〕。現時点では、S X20から出土した3個体も、埋甕だった可能性を考えたい。どこか近くに埋められていた状態だったものが、意図的に掘り返されて、内部の土を取り去って内容物を確認する際に邪魔になる屈曲部までが割られ、そしてそれが捨てられた、という解釈もできるかもしれない。

(2) 先史時代の堆積環境

第9層（黄褐色シルト～細砂）からその直上の第8層（暗茶褐色砂質土）へは、一挙性の堆積ではないが、土壌化のあまり進んでいない状態で上方粗粒化していることがわかる。第9層は掘削できていないので堆積年代は不明だが、第8層から出土したあまり摩滅していない土器片で古いものは、北白川上層式3期～元住吉山Ⅰ式に京都盆地で盛行する一乗寺K式（縄文時代後期中葉）なので、縄文後期中葉頃までにかけては、近くの河川などからの影響が強くなっていたことをうかがわせる。その水流は、第9層の下位には場所によって、高野川系の砂礫層が堆積していたり、白川系の砂層が堆積していたりするので、高野川と白川とのどちらかを特定することはできない。

第8層出土のあまり摩滅していない土器片で新しいものは滋賀里Ⅳ式（晩期後半）なので、後期中葉から晩期後半の古い段階までは、堆積環境は安定して土壌化が進み、第8層は褐色を呈するようになったと考えられる。その間ないしその後、大流路やSR1～3などの流路が本調査区をはしり、その水流が、流路内に第7a層（青灰色シルト～細砂）として細粒物を堆積させたり、調査区全体にあふれて第6b層（灰色粘質土）の母体となる細粒物を堆積させたりした。第6b層の上位には、第9層から第8層への展開と同様、上方粗粒化して第6a層（灰色砂質土）が堆積している。第7a層と第6b層の堆積は調査区全体で見ればおよそ同時期であり、前者はあまり摩滅していない弥生前期末の土器片を含み、後者はやや摩滅した縄文晩期末の滋賀里Ⅴの破片を含む。縄文晩期末から弥生前期にかけて、再び河川からの影響を受けやすくなったと考えられる。この流路の縁や底面に堆積するのは灰白色の粗砂なので、白川系の流路の影響が強かったと思われる。

(3) 古墳の器物出土状況と位置づけ

9号墳の須恵器出土状況 渡り土手のすぐ西で周溝底面近くから出土した須恵器の坏身（I53）と甕（I54）と鉄製U字形刃先（I55）では、坏身とU字形刃先が北に傾いている。しかし、坏身のすぐ南東側から出土した大型甕は、それらとは逆に、南側に口縁を向けてほぼ完全に横転している。中が空の場合には、砂質土の上でもこのままの体位では安定しづらく正位方向に戻りがちである。穿孔部が地面を向いていることも加味すれば、意図的に横位に据え置かれたと考えたい。

甕が据え置かれたとすると、下場の標高は3点とも同程度なので、坏身とU字形刃先の傾きは、両者の着地面の微凹凸を反映しているとは言えない。坏身は、北壁際で北に傾いているので、正位のところに、北側上部から崩壊したか南側からかかった土が、容器内の

北側に溜まって傾いたのかもしれない。その場合には、内容物は腐朽したかもともと無かったか、ということも考えられる。いずれにしても、正位のものが傾いたとすれば、坏蓋をともなわなかったことが傾いた素因である。なお、U字形刃先もそのときに傾いたならば、平たく置かれた状態で北側に土を受け北側に傾くことになるので、刃先のみだったとは考えがたい。把手が刃先に直角に近い角度で装着された鋏だった可能性がある。

8号墳東周溝の須恵器出土状況 東周溝の底面近くで、ホームベース状に並んでTK23・47段階の須恵器蓋杯が5組出土し（I25～I34）、その南側約50cm辺りにわずかな立ち上がりを確認した。北の1組を除いておよそ方形をなす4組は、いずれも方形の中心に向かってやや傾く。5組のうち、北の1組と西北の1組は、天地が通常と逆で蓋に身を被せる状態で出土している（図14）。5組のうち、内容物は東北の1組から出土した針状鉄製品2点にすぎず、しかもその組では上に被さる蓋（I29）が割れていた。割れて出土したのはこの蓋だけなので、上方からの圧力が不均等だった可能性が考えられる。

TK23・47段階には、たとえば滋賀県守山市服部古墳群など〔滋賀県教育委員会1984〕、墳丘裾部での須恵器の供献事例を散見でき、「須恵器祭式」とも呼ばれるが〔楠元1992・山田2014〕、これら5組の須恵器については、上述の特徴から、被葬者用枕への転用と考えたい。須恵器転用枕はおもに、つづくMT15段階（6世紀前葉）に近畿北部などで蓋や身を凸面上向けて置く例が多いが〔桑山2006〕、本例は萌芽期の一形態ともみなせよう。その場合、南側の立ち上がりを考慮すれば、被葬者の頭位は南だろう。また、方形をなす4組の中軸よりも東側に北の1組が位置するのは、被葬者頭部を西側に向けて安定させるためだったかもしれない。なお、針状鉄製品は形状的には髪留めかは不明である。

そしてこの須恵器群から50cmほど北側で、主軸を南北方向にして、刃部が墳丘外側の東を向き先端が南を向いて出土した鉄製刀子（I37）は、副葬品とみなしえる。また、須恵器群の5cm上から横倒して出土した壺（I35）も、刀子と同様に東周溝に葬られた者の副葬品と解釈できよう。壺は5組の蓋杯の分布の中心から30cmほどに西方で口縁が西側を向いていた。横位に安置された可能性もあるが、被葬者の頭部を意識してその直上付近に正位に据えたものが、横転して最終的にこの状態で埋没した可能性もある。周溝での葬送に棺を用いたかは不明だが、口縁が厚手のこの壺は、棺板上では正位では安定せずすぐ横転しよう。しかし、砂質土の上でならば正位で安置しえるので、その場合には、墳丘外側からの営力、たとえば降りかかる土などによって横転した状況を想定できる。

これらの器物と、50cmほど上位の埋土上層から多数出土した埴輪の破片との間には、遺

物をほとんど含まない埋土下層・中層が堆積しているが、埴輪の出土層準と同じ埋土上層からは、南周溝の上半からだが同じくTK23・47段階の甕（I41）が出土している。埴輪と同様に墳丘上のどこかの原位置から崩落してきたのであれば、8号墳の墳丘本体での葬送とこの東周溝での陪葬との間に数十年の時間幅を想定することはできない。

8号墳南周溝の土師器出土状況 東周溝と同様に、埴輪の出土層とは間層をはさんで底面近くに器物が出土する状況は、南周溝にも認められる。そこでは、赤色顔料と土師器（I39・I40）の破片が出土している。東周溝内での葬送との先後関係は不明だが、埋土上層出土の甕（I41）と東周溝の須恵器群とは同型式なので、およそ同時と言える。

赤色顔料のもっとも大きなまとまりは、西辺の人頭大のものだが、その西端は中世の土坑SK4に切られる。そして、そのまとまりの下部、SK4との境界付近から出土した6点の土師器片では、内外面と破断面に顔料が付着しているものもあり、また、1点は別の1点の下位から出土しているが、6点は一まとまりに接合した。これら6点の口縁方位は異方向なので、この一まとまりはその場で割れたものではない（図15）。これら6点と接合する破片も多いSK4から20点以上出土した同一個体の破片でも、内外面だけでなく破断面にも顔料が付着しているものが目立つ。接合により、全体として一個体の甕の底部から胴下半であることが判明したが（I39）、口縁部や頸部のような変曲点の破片は出土していない。以上から、南周溝に持ち込まれるまでは中華鍋状の底部大破片に赤色顔料を収めていたと思われるが、破片が出土位置に着地する以前には割れていたことになる。

別の個体ではほぼ完形になる壺は（I40）、破損線の走向から、底部に割れの起点を推定できるが、東から離れて出土した口縁部の出土状況から、その場で割れた状態を保っているとは考えられず、二次的な移動を想定し得る。口縁部の残存率が低いこともこの想定を支持しよう。出土時に下位に赤色顔料が認められた破片でも、その破断面や上面側には顔料は付着していないので、甕（I39）よりは後にここにもたらされたのだろう。内面が上向きで出土することは、破片の形状に照らせば無理からぬことではあるが、朱色の内面は赤色顔料と同様の視覚的効果を帯びたのではないだろうか。

8号墳の埴輪出土状況 周溝の埋土断面は、埴輪が盛り土とともに崩れてきた状況を想起させた。埴輪の大半は、破片化し、南・東の両周溝からレベル差もあまりなく、表面が良好な遺存状態で、出土した。東周溝では、半截円筒状に検出でき完形に復元できた個体もあるが（I48）、円筒の軸と周溝の長軸は斜交し、墳丘のやや外側を向く口縁が墳丘側の底部より少し高い標高で出土したので、墳丘から完形のままでやや勢いをもって倒れ

落ちてきたと考える。南周溝でも、馬子の右側に樹立されていただろう馬形埴輪（I 43）の場合、左足が右足より東で出土することを考慮すれば、やや勢いをもって倒れた瞬間があったと思える。また、埴輪の全体的樹立状況は不明だが、個体数に照らせば個体間距離は数十cm程度だろうから、近接個体とぶつかったものもあろう。さらに、内面の剝離した放射状の破損線の収れん部を確認できる個体もある。つまり多くの埴輪は、比較的短時間に、中にはやや急な力を得て、墳丘から割れ落ちていったと考えて矛盾なかろう。

もっとも I 48 の円筒埴輪の場合は、接地面の対向面の破片は、半円筒内に収まるものが多いとはいえ、内面が接地面の内面に覆い被さるような状態ではなく、口縁方位が変わるくらいである。着地してから破片になるまでには、土砂が流れ込む猶予もあったし、また破片化してからも土砂は一気には溜まらなかったのだろう。

その一方、南周溝東辺で出土した家形埴輪（I 44）と円筒埴輪（I 45）は、完形状態のまま着地してその瞬間に破片化したと考えられる。しかも、家は周溝の軸に対して直交に近い角度の周溝外側から、円筒も方形墳の南面の東隅近くでありながら東方面の周溝外側から、それぞれ営力を受けている。この2点は、周溝の内外どちらに立っていたにせよ、それ以外の埴輪とは異なる直接原因で割れたと思える。人為的廃棄かもしれない。

吉田二本松8号墳の位置づけ 吉田二本松古墳群ではこれまで7基の古墳が確認されており、いずれもTK23・47段階（5世紀後半ごろ）である〔伊藤2010〕。今回検出された8・9号墳も、出土した須恵器はTK23・47段階で、同時期である。8号墳以外は、一辺10～13m程度の同規模の方形墳と考えられる。8号墳も、西・北に近接する地点の調査成果から大型古墳の張り出し部とは思えず、方形墳と判断できる。しかし、規模は確定できないが一辺が13mを上回るのは確実で、埴輪をもち、周溝での陪葬の可能性さえある。8号墳の主体部の被葬者は、ほかの8基の被葬者より社会的に上位だったと言えよう。

5世紀後半ごろ、埴輪と須恵器においては、生産が地方展開し〔高橋1996 p.152, 菱田1996 p.71〕、古墳での組成や扱われ方が変化する〔高橋1998〕。近畿では、大型前方後円墳をそなえる墓群が途絶える一方で新たに小規模古墳が群集する地域が出てくる〔和田1992〕。山城北部でも、吉田二本松古墳群を含め小型古墳の群集が顕在化する〔宇野2010〕。京都盆地東北部で埴輪をともしなう古墳は、動物・人物（巫女）・家・蓋・楯をもつ鳥羽古墳群や〔堀内・吉崎1986〕、円筒のみと思われる梅小路古墳がある〔梶川1993, 宇野2010〕。より北に位置する吉田二本松8号墳では、埴輪の様相は両者の中間である。また東周溝の須恵器の出土状況は、古墳での葬送儀礼の地域的展開を考える上で興味深い。

(4) 中世の遺跡

本調査区において、遺構・遺物の質・量ともにピークを迎える時期にあたる。それらのうち中世2期、すなわち14世紀代のものがかなりの数を占めている。ただし、15・16世紀代の遺物はほとんど認められず、それゆえにその遺構を確定することはかなわなかった。

まずは、中世1期、13世紀代の遺構について着目するに、溝・井戸・水溜と推測されるもの・土坑・土器溜などが検出されている。しかしながら、この時期の遺構の数はけっして多いとはいえない。

遺物のうち、注目すべきは、水溜と思われるS E 9から出土した13世紀末ごろの華南三彩盤となる。めずらしい物品である点をふまえると、S E 9の近くにそれを入手することのできた有力者が邸宅を構えていた公算が大きい。

なお、先に述べたように、その底部外面には文字の墨書がみうけられた。なおざりにすることができないのは、医学部構内308地点の整地層である黄色粘土層から、同様に底部外面に墨書を有する華南三彩盤がとりあげられている点だ〔伊藤2008, III 956〕。このほど実見したところ、それは文字であるのは疑いないものの、重ね書きしている可能性もあって、何にあたるのか断定しえなかった。けれども、そのような優品に文字を書き記すことにかんしては、同じ家系に属する人びとによっておこなわれたとも推考され、注意が必要となろう。

また、S D 4・S E 9・S K 11・S X 42～44などにおいて、乙訓在地形の土師器がみつかる点がないがしろにすることはできない。乙訓地域産と思われる土師器がどうして吉田地域にもたらされて使われることになったのか、今後さらなる出土をまっとうえて、さまざまな視角から考察を深めていくことが肝要となろう。

つづいて、中世2期の遺構については、溝・石組井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・石室の可能性のある集石など、多彩なものが検出されている。

これらのうち土器溜に眼を向けるに、S X 32・36をのぞくそれらには、灯火のための土師器が少なくとも1つは含まれていた。たとえば、本調査区においてもっとも出土量の多いS X 2では、口縁部が1/6以上残るもののうち、E₁類の土師器小皿が3点（I 332・I 336）、E₁類・E₃類の土師器皿が2点と1点、白色系の土師器碗が1点の合計7点が確認されている。したがって、それら土器溜にかんしては、夜間における飲食の際に土師器が用いられ、それが終了したのちにまとめて廃棄されるにおよんだとも推想される。

くわえて、留意すべきは、本調査区の南東部から陶器の甕が少なからずみつかる

点だ。前にふれたように、S X13の常滑焼の埋甕のほかに、土坑S K 7やS X20といった陶器溜から常滑焼や備前焼の甕の破片が出土している。また、その茶褐色土落ち込みからも常滑焼の甕の一部（I 711）がとりあげられている。

これら事例を勘案すると、本調査区内にこの時期、邸宅が存していた蓋然性はすこぶる高いと考えられるのではなかろうか。甕の出土量にもとづくに、食料や飲料などを貯えておくための建物が南東部にもうけられていたことがうかがわれる。

ちなみに、本調査区からは、柱穴と思われるものがたくさんみつまっている。けれども、残念ながら建物や柵列を確定することはかなわなかった。また、瓦の出土量が少ないことから、そうした建物が瓦葺きであったとはとうてい考えがたい。

これまで、吉田南構内から検出された中世の遺構をめぐっては、勤修寺流吉田氏および吉田神社との関係で説明されることが少なくない。けれども、吉田地域にはそれら以外の貴族の邸宅などが相当に営まれていたことはまずまちがいあるまい。文献史料からは、割合に多くそれらをひろい出すことが可能となる。したがって、本調査区でみつかった遺構を特定の人物や氏、社寺などに結びつけていくことはなかなかむずかしいといえる。

なお、福山敏男氏は、応仁の乱以前の吉田神社の鎮座地について、吉田南構内に位置していたと推測している〔福山1984〕。しかしながら、本調査区において神社とおぼしき遺構はまったく検出されなかった。

発掘調査と資料整理は、富井と笹川が担当し、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾怜、荒田敬介、河野葵、貴志真生也、上月克巳、坂川幸祐、下川澄子、鈴木健吾、高木康裕、高原洋子、西田陽子、水谷正人、杵佐和子が補佐した。なお、古墳時代の遺構と遺物について、宇野隆志（奈良県立橿原考古学研究所）、片山健太郎（本学文学研究科博士課程）、河野正訓（東京国立博物館）、下垣仁志（立命館大学）、高橋克壽（花園大学）、土生田純之（専修大学）、藤沢敦（東北大学）、山本亮（本学文学研究科博士課程）、吉井秀夫（本学文学研究科）、和田晴吾（立命館大学）の各氏から、弥生時代の遺構と遺物について、深澤芳樹（奈良文化財研究所）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、若林邦彦（同志社大学）の各氏から、縄文土器について長田友也氏（中部大学）から、堆積物について竹村恵二氏（本学理学研究科）から、有益なご助言をいただいた。記して謝意を表します。

〔注〕

- （１） 発掘調査現地説明会の時点で巫女とみなした破片は、接合作業により、馬の左手綱と判明した。